



fig. 110 第1遺構面全景 (西から)



fig. 111 第2遺構面全景 (西から)

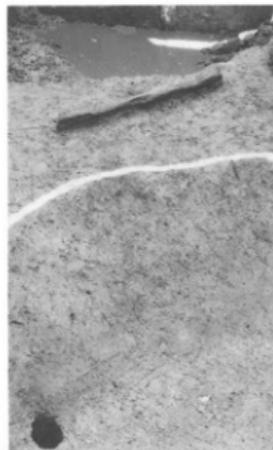


fig. 112 第3遺構面
木製品出土状況 (東から)

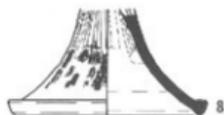
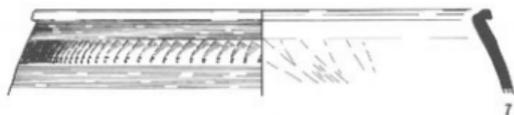
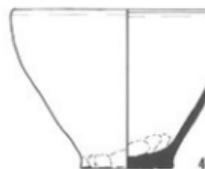


fig. 113 戎町遺跡出土遺物

13. 兵庫津遺跡^{ひょうごつ}

1. はじめに 今回の調査地は、JR兵庫駅の東約700mに位置している。ここは天正8年(1580)池田信輝が花隈城を落城させた後、兵庫城の外郭として築いた都賀堤の内側に当たる。

兵庫の港は、古い歴史をもっているが平安時代末期に平清盛が日宋貿易の一拠点として大輪田の泊を修復し、鎌倉時代の東大寺僧重源が経ヶ島を修築してからこの港は確固たるものになったとされる。

延慶元年(1308)には、東大寺が港に出入りする船から「升米」・「置石料」などの関税をかけるようになる。暦応元年(1338)には興福寺が当地に介入するようになって、東大寺は北に、興福寺は南にそれぞれ関所を設け前者は「升米」・「置石料」を、後者は「商船目銭」を中心に税を徴収するようになった。



fig. 114 調査地位置図 S = 1 : 5000

兵庫津は対明、対朝鮮貿易で繁栄したが応仁・文明の乱で大きな痛手を
受け堺港にその地位を奪われることになる。

兵庫が復興するのは池田信輝がこの地に城を築く天正年間と考えられて
いる。しかしこの後慶長元年（1596）震災により再び被害を受け江戸時代
に入ってようやく栄えるようになったと考えられている。

今回の調査地区は、元禄9年（1696）の「兵庫津絵図」によれば西国街
道に面してあった神明社のすぐ北側に当たることが知られる。

2. 調査の概要

試掘調査は平成2年3月2日に機械により行い、遺物包含層を確認した。
発掘調査はこの結果を踏まえ、建物の基礎が到達する部分に限り実施し
た。調査区は東西2ヵ所に分かれ東側をⅠ区、西側をⅡ区として発掘を行
った。

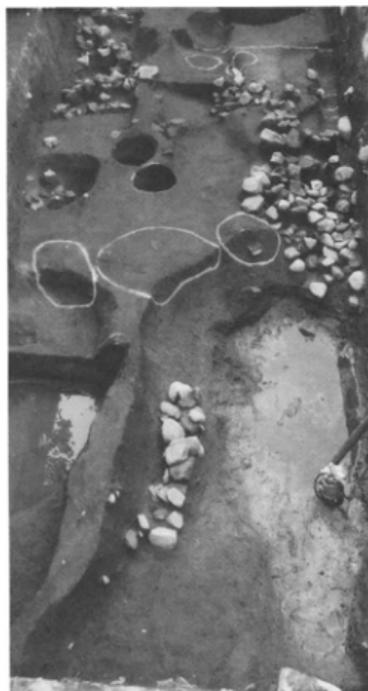


fig. 115 Ⅰ区第2遺構面（北から）

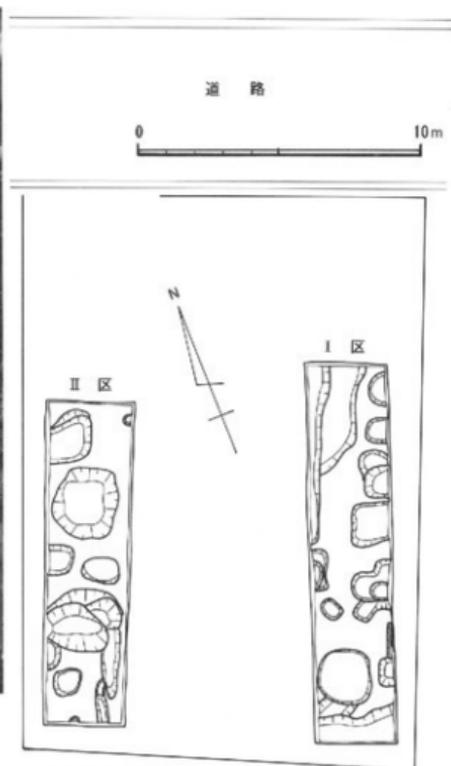


fig. 116 調査区配置図

I 区

I 区の遺構面は 2 面確認でき、上面では江戸時代の土坑・溝が、下面では江戸時代の七坑と共に鎌倉～室町時代の七坑・集石遺構が検出された。

江戸時代の第 1 遺構面は標高 1.3m 前後で確認でき、江戸時代の第 2 遺構面と中世の遺構面は標高 0.8～1.0m 前後で確認された。

江戸時代の遺構は円形・不整形形を呈する土坑が主で、直径 1～2 m を測るものが多い。それらには陶磁器類、瓦、土人形、キセル、銭貨、フイゴ羽口、鉄滓などが投棄されていた。

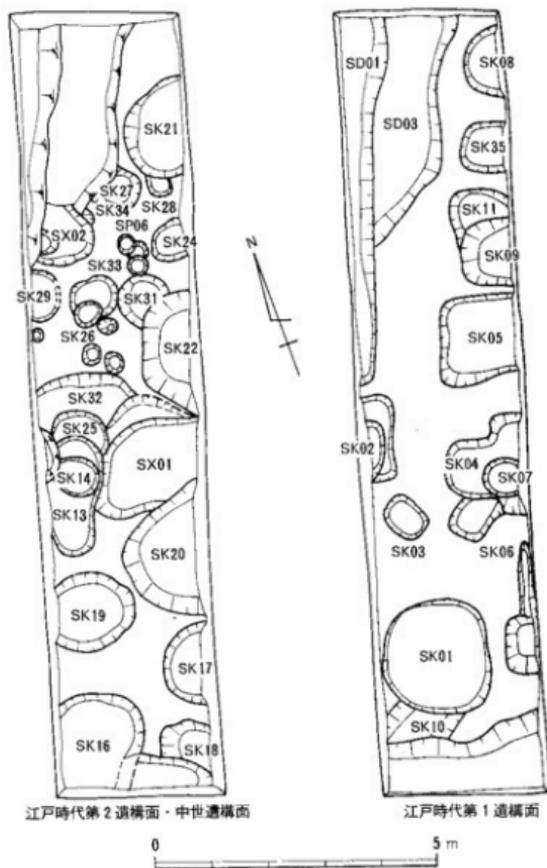


fig. 117
I 区遺構平面図

中世の遺構もビット、土坑を主とするがS X 01・S X 02は、拳大の石が多量に出土した。

S X 01 南北約2 m、東西1.7 m以上、深さ約0.6 mを測る集石土坑である。遺物は石の間から多くは破片となって、特に集中することもなく出土した。遺物には土師器皿、同鍋、同火舎、瓦器羽釜、備前播鉢、瀬戸美濃天目碗のほか中国製白磁、同青磁や瓦などがある。

15世紀後半を中心とする時期と考えられる。

S X 02 南北1.5 m以上、東西1 m以上、深さ約0.45 mを測る集石土坑である。遺物はS X 01同様、石の間から破片の状態で出土した。遺物には土師器皿、同鍋、瓦器火舎、須恵器控鉢のほか備前播鉢がある。

14世紀後半のものと考えられる。

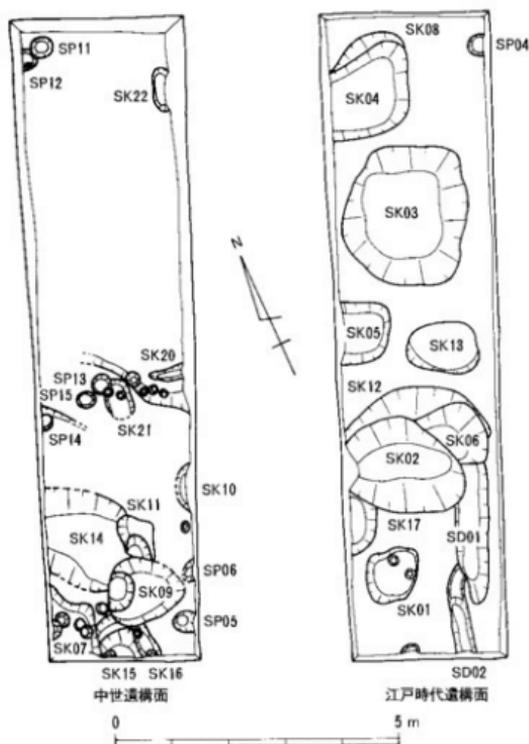


fig. 118
II区遺構平面図

II 区

II区の遺構もI区と同じく2面確認された。上面では江戸時代の土坑・溝が下面では江戸時代と鎌倉～室町時代の土坑・ピットなどが検出された。

江戸時代の第1遺構面は標高1.1m前後で、江戸時代の第2遺構面と中世遺構面は標高約0.8mで確認した。

江戸時代の遺構は円形・不整形を呈する土坑が主で、直径1～2mを測る。それらには陶磁器類、瓦、土人形、フイゴ羽口、鉄滓などが投棄されており、I区の様相と基本的には変わらない。ただ、江戸時代の遺構の集中度はI区に比較し、疎である。

中世の遺構には土坑のほかピットが確認されたが、調査面積の狭小さもあって建物としてまとまるものはなかった。

遺物

fig. 120上段1～5は13世紀のもの、fig. 121中段1～9は14世紀代のものである。fig. 123 1～21は15世紀代である。fig. 122の1～3は瓦の拓影である。1は珠文帯の内外に圈線が巡るものである。3は福字を凸線で表すものである。時期を明確にできないが、中世に遡る可能性も考えられなくもない。4はフイゴの羽口で径約9cmを測る。江戸時代土坑から出土している。fig. 124の1は18世紀代の肥前系磁器で、見込の五弁花文は手書きである。2は、肥前伊万里で京焼を手本として焼かれた陶器で、17世紀を中心とする時期と考えられる。fig. 124の土人形はいずれも両面の型を使用する。3は恵比寿天、4は釈迦如来と思われる。



fig. 119 II区ピット11 (南から)

挿図番号	遺構名
fig. 120 1～5	II区ピット13
fig. 121 1～9	I区SX02
fig. 122 1	I区SK26
fig. 122 2	II区SD04南
fig. 122 3	II区SK04
fig. 122 4	II区SK02
fig. 123 1～21	I区SX01
fig. 124 1	II区SK05
fig. 124 2	II区SK03
fig. 124 3	I区SD03
fig. 124 4	I区SK14

表2 兵庫津遺跡出土遺物の遺構名一覧

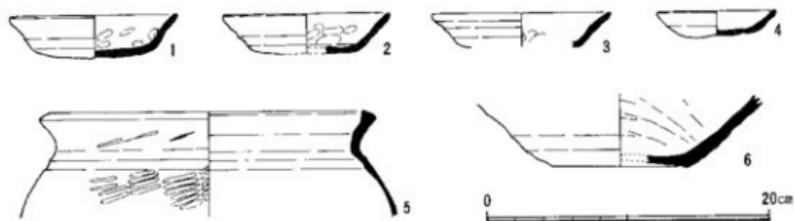


fig. 120 II区ピット13出土遺物 1～5：土師器 6：須恵器

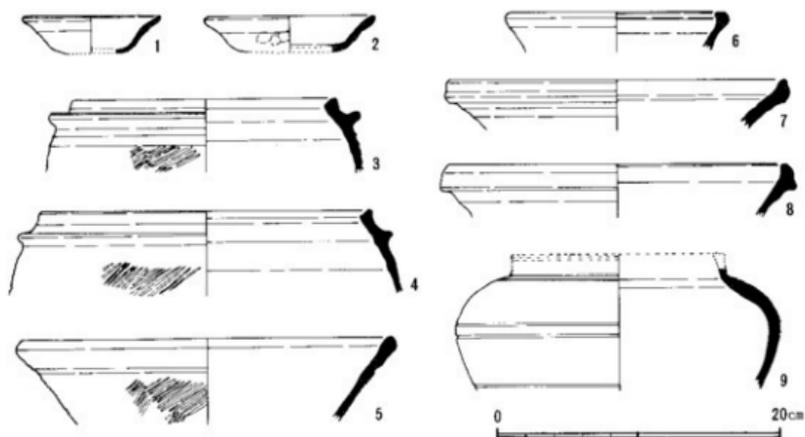


fig. 121 I区SX02出土遺物 1～5：土師器 6～8：須恵器 9：瓦器



fig. 122 I・II区出土瓦・ファイゴ羽口

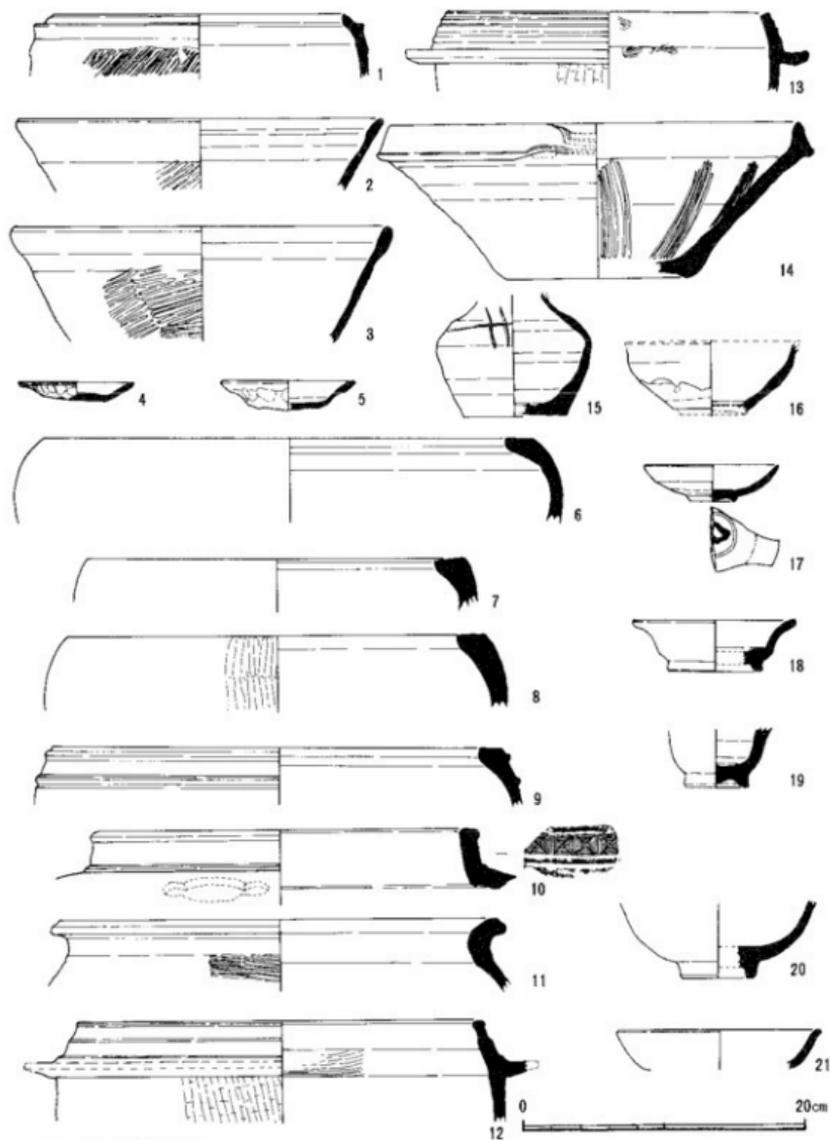


fig. 123 I区SX01出土遺物

1~5・10: 土師器 6~9・11~13: 瓦器 14・15: 備前 16: 瀬戸・美濃 17: 白磁 18~21: 青磁

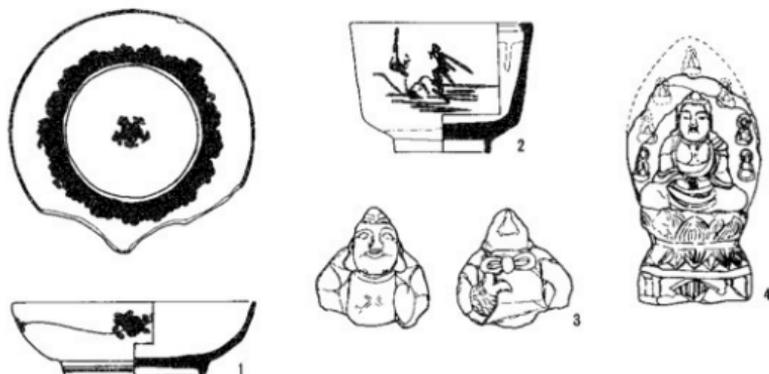


fig. 124 I・耳区近世遺構出土遺物 1・2：1/5 3・4：1/5

3. まとめ

今回の調査面積は非常に限られていたが、多くの事実が明らかになった。

まず、中世ではこの地点に鎌倉～室町時代の遺構が近世遺構の土坑で破壊されながらも残存していることが明確となったことは重要である。それらには性格不明の集石遺構を含め瓦を伴うものが多い事も注目される。当時瓦を使用する建物は、寺や公的施設など限られていたものと推定されているからである。ただ出土遺物は当時の日常雑器類がほとんどで、中国製の磁器類の比率も低い。

また遺物の検討は十分になしえていないが、16世紀に属するものが明らかでないのは、この地域が応仁・文明の乱で荒廃したという記録に合致するものとも思われる。しかし、遺跡の性格や遺物の時期的なかたよりの意味はこの地域の調査の進展と共に明らかにされるべきものであろう。

次に近世では、18世紀を中心とする時期の遺構が密集して検出された。遺物には17世紀に遡るものも存在するがその量は少なく、当地区の生活活動が盛んになったのは18世紀に入ってからのことと現時点ではいえる。

出土した遺物には様々なものが含まれていることも注目される。フイゴ羽口と鉄滓はここで鉄鍛冶が行われていたことを明らかにすると共に、ここから北東約200mにあり、元禄9年の絵図にも記される「鍛冶屋町」との関係が問題となろう。

また多く出土した土人形は神仏関係のものが日立つ存在となっており、付近に寺院が集中する事と無関係とは思えない。

近世の遺構も中世と同様に土坑を主とするため明確な性格を推定することは極めて困難であるが、これも周辺の調査が進めば、明らかとなろう。

14. 旧三宮駅構内遺跡

1. はじめに 当遺跡付近は古くから市街地として開発が進んでおり、明治14年の神戸区地図及び地籍図から見ても早くから外国人居留地ないしは役場として利用されていたようである。そして明治17年には当該地に神戸尋常高等小学校（現在の神戸小学校）が建設され現在に至っている。

明治21年に東海道本線が開通し、三宮駅が建設された。この三宮駅は現在の元町駅周辺と考えられている。昭和3年に旧三宮駅が取り壊され、その解体工事中に福原潜次郎氏が弥生土器を採集されており、周辺に弥生時代の遺跡が存在することが明らかとなった。

また、調査地のすぐ西側には花隈城跡として公園が築かれており、周辺部も花隈の地名とともに古くから花隈城跡とされてきた地域である。

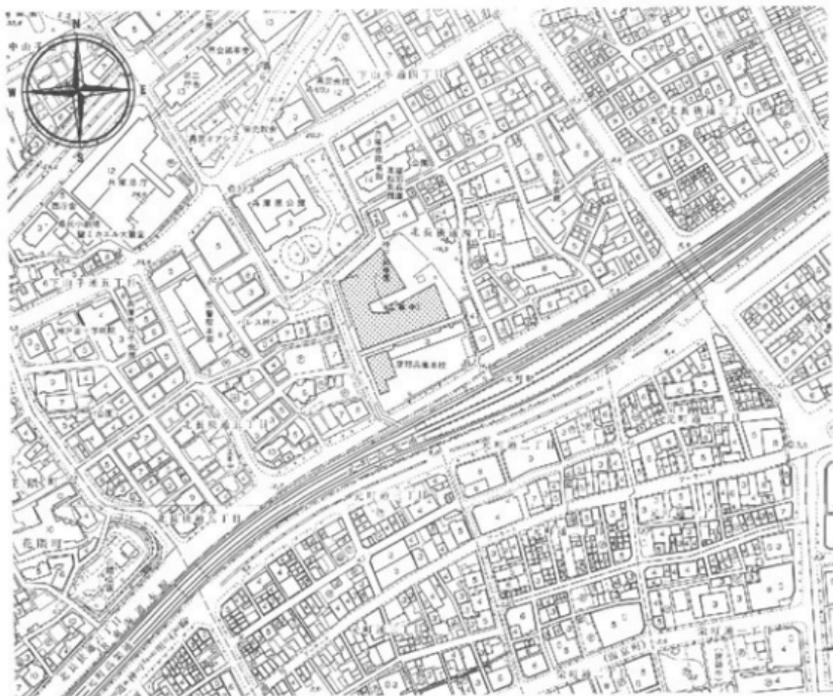


fig. 125 調査地位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

調査の経過

旧三宮駅構内遺跡にかかわる発掘調査は、学校の統廃合による神戸小学校と神戸中学校・摩耶兵庫高校の跡地に建設が予定されている神戸生田中学校の建築計画に伴う事前調査として行ったものである。調査は平成2年から平成3年にかけて総面積4500㎡におよんだ。

この調査は校舎解体工事と並行して行う関係から4回に分けて実施することとなり、それぞれ1次—I区調査、1次—II区調査、1次—III区調査、1次—IV区調査と名づけた。

調査区は、学校の基礎により随所に著しい削平を受けている。遺構検出面は、標高14.3～15.0mで東南へ低くなる。基本的に暗黒褐色の地山で、砂質部分が多い。ほぼ全域が後世の削平を受け、14世紀から15世紀（室町時代）の地表面は残っておらず、大部分の遺構は同一面で検出された。

(i) 弥生時代

SK311

III区の西端に位置する東西2.0m、南北1.4mの不整形土坑である。SD310と重複し、SD310より古い。埋土からは弥生土器とともに縄文時代晩期の突帯文土器が出土した。



fig. 126 調査地区割図
S = 1 : 1500

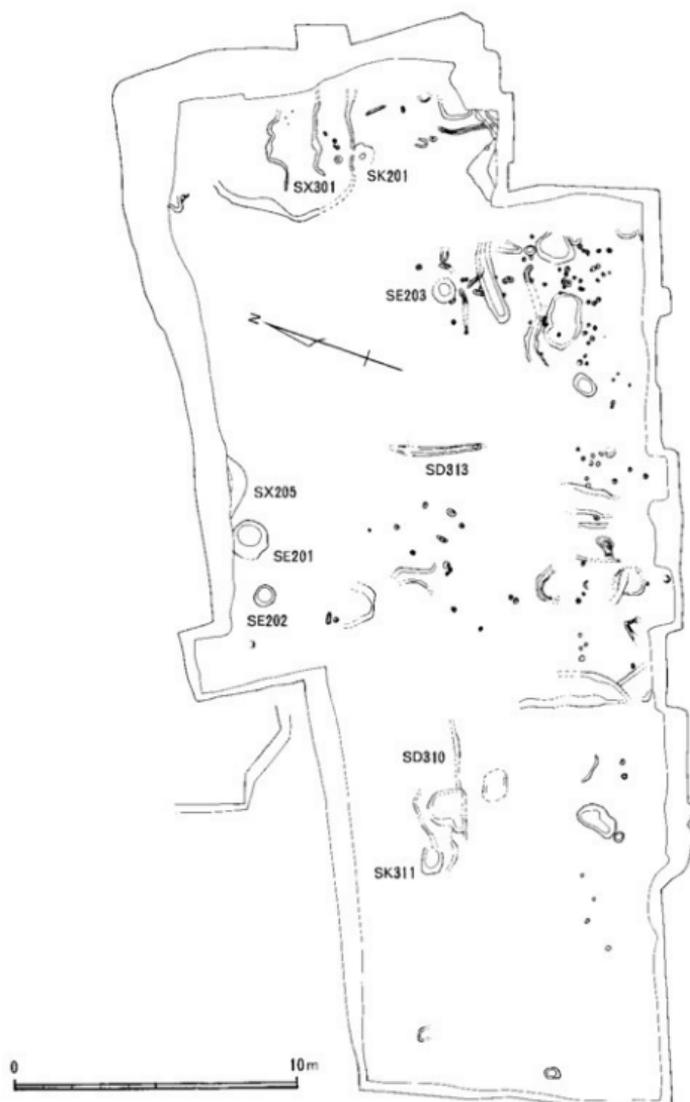


fig. 127 Ⅲ区遺構配置図

(2)奈良時代

S X 301

I区の北半に位置する南北10.0m、東西7.5mの不整形土坑である。2段落ちになっており、内部に木組の水路状の構造を持つ。水路状の木組みは、幅0.1mの薄い板材を2～3段に重ねて積み上げ、両側を杭で挟み込むように固定している。木組みの幅は0.4m～0.8mである。東側に底から高さ0.3mの段があり、段の上に小口を持つ。西半には板材に接してT字型に密集して自然石が投げ込まれたように置かれている。木組み部分の下半は極細砂で埋没している。石は暗黒褐色の砂に埋没しており、その上層の埋土は暗褐色の砂である。下層の埋土からは8世紀中頃(平城宮土器Ⅲ)の土器が出土した。さらに上層の埋土からは11世紀中頃の土器が出土している。上層と下層に著しい時期差があり、下層はほぼ一括遺物としての様相をもつことから、上層・下層それぞれをS X 301-B・S X 301-Aとする。

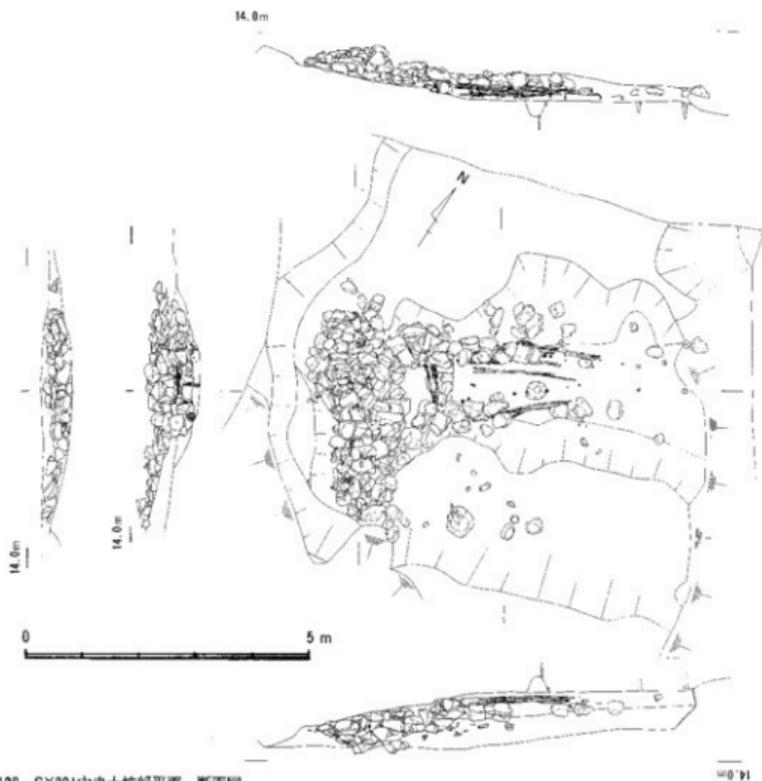


fig. 128 SX301中央土坑部平面・断面図

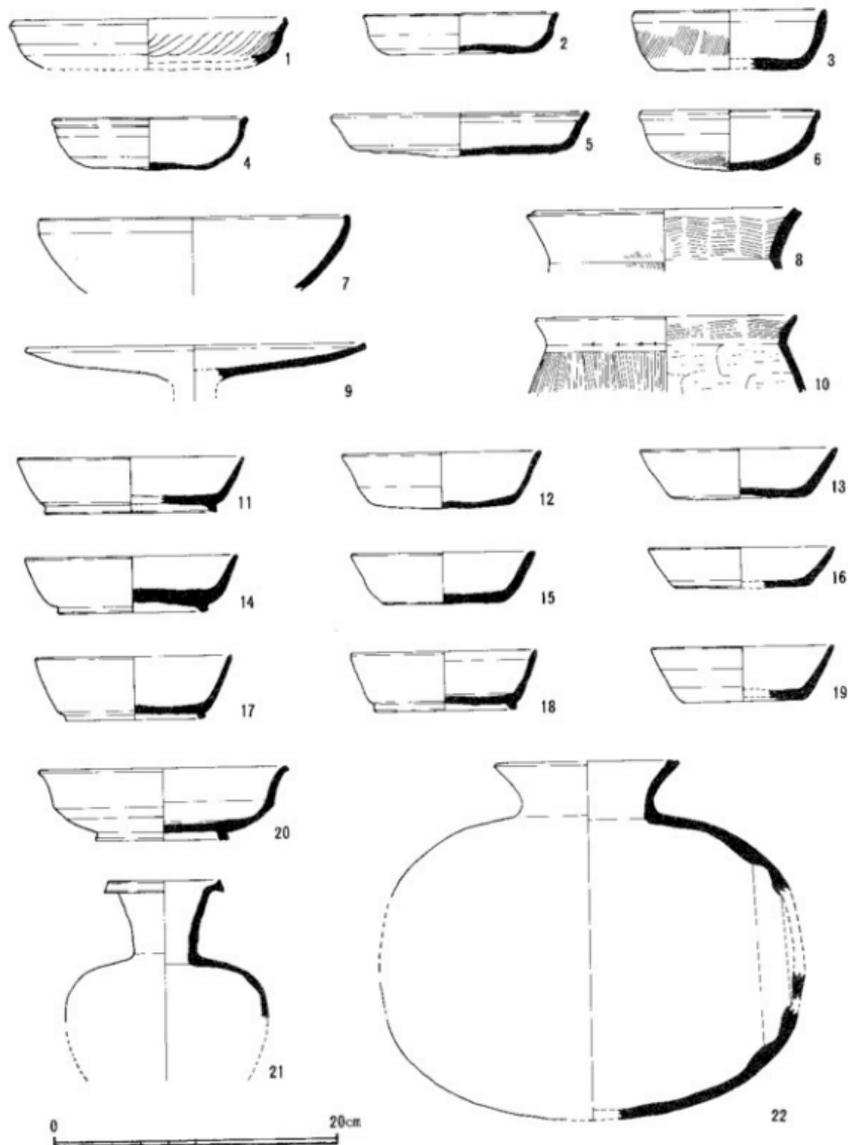


Fig. 129 SX301-A出土遺物 1~10:土師器 11~22:須恵器

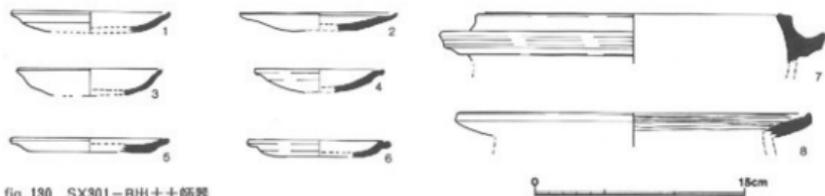


fig. 130 SX301-B出土土篩器

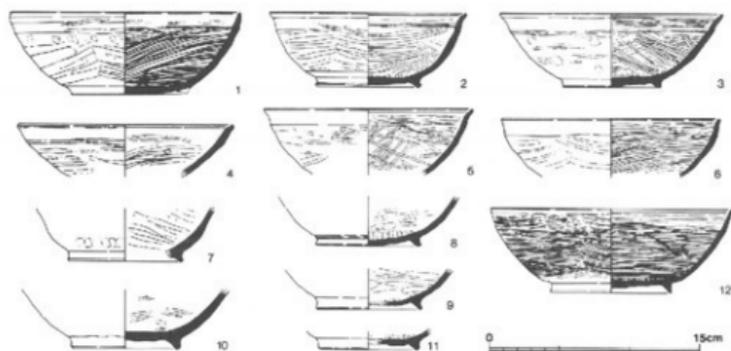


fig. 131 SX301-B出土黑色土器

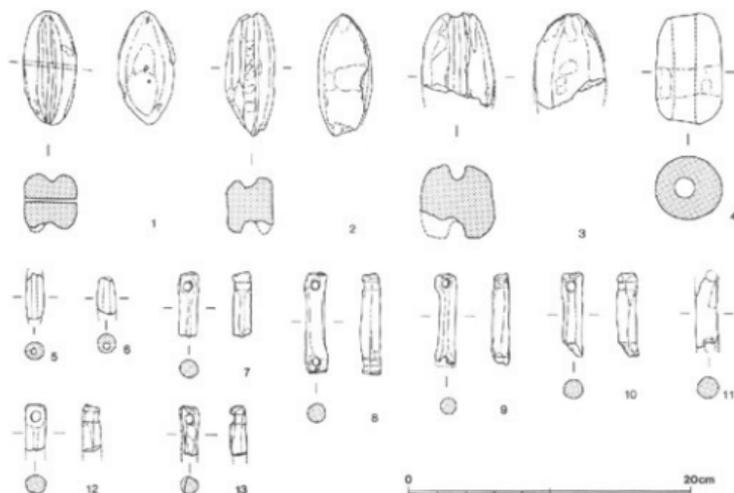


fig. 132 SX301-B出土土錘

(3)平安時代後期 I区はほぼ中央に位置する南北1.5m、東西1.1m以上の不整形土坑である。

SK201 埋土からは12世紀代の東播系の須恵器などが出土した。

(4)室町時代 III区中央北端に位置し、SX205のすぐ西で検出した、桶板と石組みの上下2段構造の円形井戸である。

SE201

下段は井戸底から92cmの高さまでで、桶板を2段に組んでおり、下段の井戸枠は底から43cmの高さで、31枚の桶板を組み、直径50cmを測る。上段の井戸枠は井戸底から92cmの高さで、40枚の桶板を組み、直径63cmを測る。裏側に薄い竹で編んだ輪をあてがっていた。

上段は下段の井戸枠に接して、薄い板材を井桁に組み、この上に自然石を円形に積み上げている。直径は100cmである。井戸底の深さは、遺構検出面から180cmある。掘形は東西263cm、南北275cmで、遺構検出面下から急に狭くなり、底では井戸枠がちょうど収まるくらい大きさに掘られている。掘形からは14世紀後半代の土器が出土し、井戸枠内からは15世紀前半代の土器が出土した。

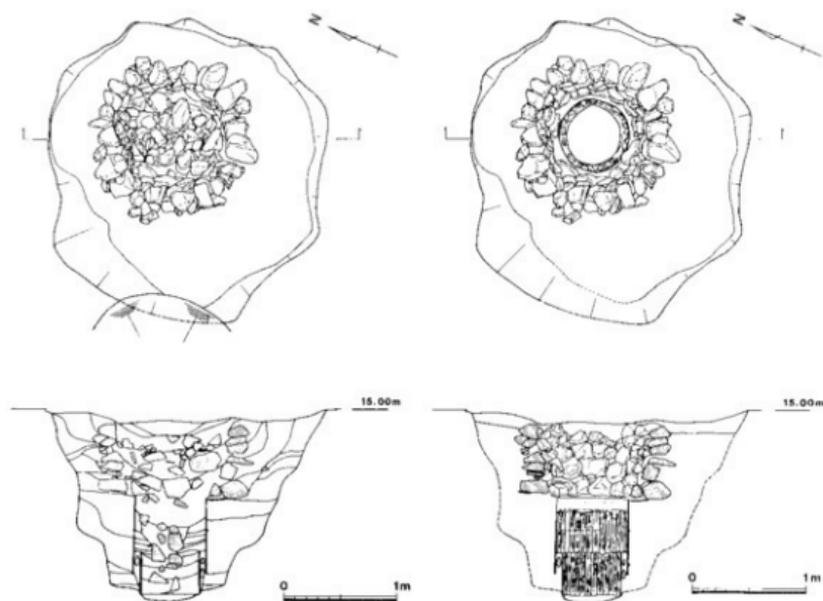


fig. 133 SE201平面・断面図

S E 202

Ⅲ区中央北端に位置する井戸で、S E 201のすぐ西にあたる。掘形からは14世紀後半代の土器が出土し、井戸枠内からは15世紀前半代の土器が出土した。

S E 203

Ⅲ区東端中央に位置する井戸で、掘形からは14世紀後半代の土器が出土し、井戸枠内からは15世紀前半代の土器が出土した。

S X 205

Ⅲ区中央北端に位置する東西1.5m、南北1.1m以上の不整形土坑である。埋土から16世紀前半代の土器が出土した。

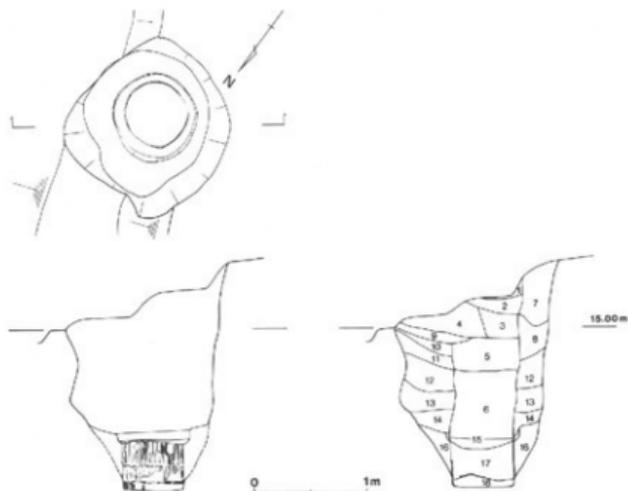


fig. 134
SE202平面
・断面図



fig. 135
SE201
完掘状況
(北から)

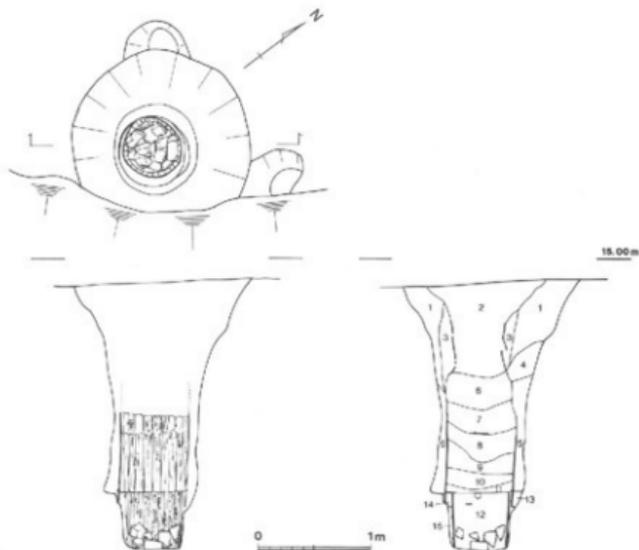


fig. 136
SE203平面
・断面図

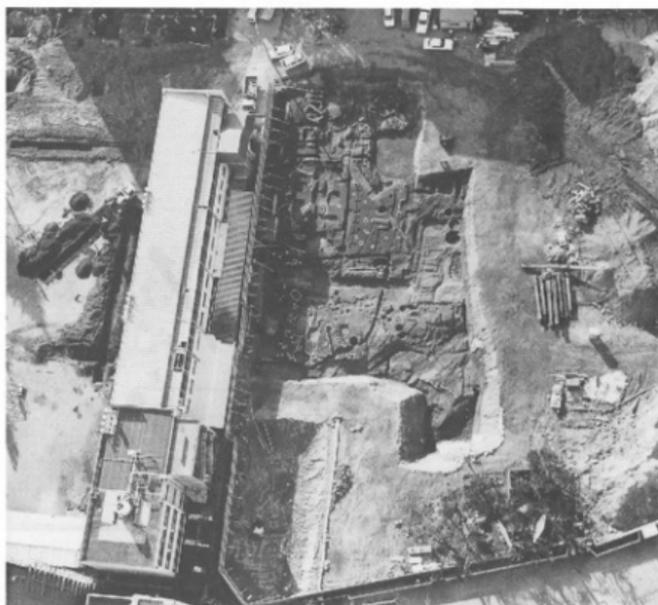


fig. 137
Ⅲ区全景

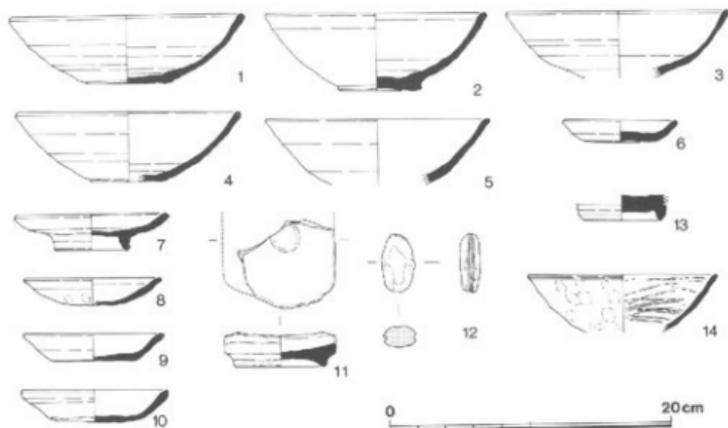


fig. 138 SK201出土遺物 1～6：須恵器 7～11：土師器 12：土錘 13：青磁 14：瓦器

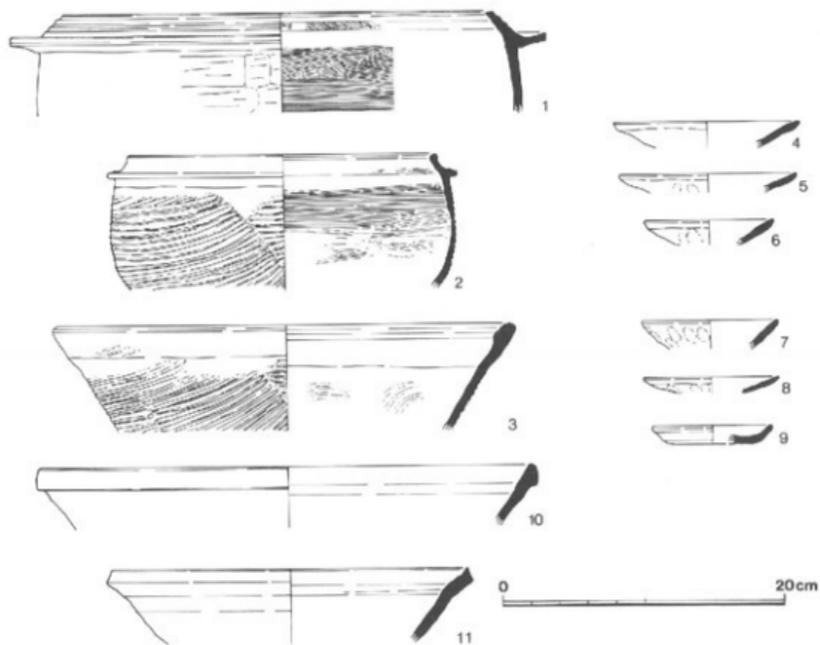


fig. 139 SE202出土遺物 1・9：瓦器 2～8：土師器 10・11：須恵器 1・2・11：掘形内出土

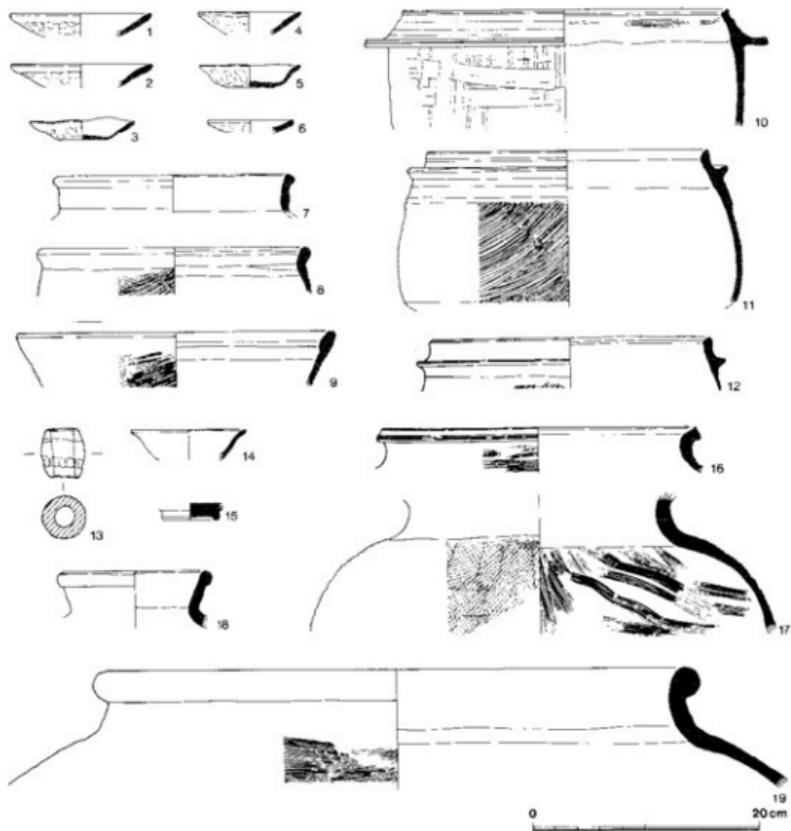


fig. 140 SE201出土遺物

1～12：土師器 13：土埴 14：白磁 15：青磁 16・17：須恵器 18・19：陶器（備前）

1～5・7・9・12・16：掘形内出土



fig. 141 SE203出土遺物 1～6：土師器

3. まとめ

今回の調査において、古くから遺跡の存在が明らかにされながらその実体が不明であった旧三宮駅構内遺跡について、その一端を今回の調査によって明らかにすることができた。

まず旧三宮駅構内遺跡は、縄文時代から安土・桃山時代にいたる複合遺跡であることが判明した。

今回の調査において、古い時期のものとして、SK311が弥生時代である他、SD310・313などから古墳時代の遺物が出土している。

また、奈良時代の遺物として神戸市内でもあまり例のない須恵器の破境(塊A)を始めとする奈良時代の土器群が出土した。遺構の性格は明らかではないが、官衙的な性格を帯びた施設に付随する可能性があり、後世の西国街道の要所でもあり、注目されるところである。

奈良時代以後、11世紀中頃、12世紀代の遺構・遺物は存在するが、その性格は明確ではない。

12世紀の後半には生田の合戦を始めとする源平の戦い、14世紀の前半には湊川の合戦や滝山城をめぐる赤松氏と新田義貞の戦いなど、にわかに調査地付近が歴史の松舞台に現れるが、この間の遺構・遺物は乏しく、今回の調査においては人々の生活を感じさせるものはあまりない。

14世紀後半からは井戸をはじめ、土坑、ピット群など明らかに村落の存在を匂わすものが多数検出されている。また包含層からではあるが、中世のものと思われる埴埴が出土しており、当地が何らかの生産と関わりも持っていた可能性がある。しかし、15世紀の後半には周辺は水田もしくは畑に変わっていくようである。

16世紀後半には周辺部に花隈城と侍町・足軽町が築かれたとされているが、今回の調査では遺構・遺物は確認できなかった。絵図によると、城はほぼその辺を東西南北に向けているが、侍町・足軽町は城に対して30度ほど長辺を北にふっている。現状の地形からも現在の兵庫県公館に通じる南北の道を境に傾斜が北西から南東へと傾斜が変化している。この北西から南東へと傾斜が変化している面を階段状に削平し、侍町・足軽町を形成していた可能性がある。調査においても北西から南東への急激な傾斜を確認しており、上記のことからも、調査区が侍町・足軽町の縁辺部にあたる可能性は依然残るわけであるが、削平が著しく、可能性の指摘に止めたい。

15. 篠原遺跡^{しのはら}

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲山南麓を流れる六甲川と柚谷川が合流して都賀川となる付近を中心とする標高50～85mの扇状地上に立地する。

昭和4年に小林行雄氏によって世に紹介され、広く知られるところとなっていたが、その後、宅地造成が急速に進み遺跡の多くは消滅したと考えられていた。昭和58年に至り、遺跡範囲内で2件の開発計画が出され、各々について試掘調査を実施したところ、現在もお遺跡が良好に残っていることが判明した。篠原中町5丁目の第1次調査地点（「篠原A遺跡」）は（財）古代学協会が、篠原中町2丁目の第2次調査地点（「篠原B遺跡」）は多淵敏樹氏がそれぞれ発掘調査を実施した。

第1次調査地点では、縄文時代中期末の住居址や礫溜、後期前葉の土坑、晩期の石器製作関連遺構、弥生時代後期の住居址状遺構や溝などが検出されている。第2次調査地点では、縄文時代晩期中葉の土器棺墓9基や集石遺構、弥生時代後期後半の竪穴住居址2棟や集石遺構などが検出されている。ことに第2次調査地点では、縄文時代晩期中葉の土器に混じて大洞式土器の注口土器や菱形土器などのセットや遮光器土偶が出土しており、大洞式土器の分布の西限を示すものとして注目されている。



fig. 142 調査地位位置図 S=1:2500

昭和62年の第3次調査では、弥生時代後期の竪穴住居址1棟、土坑7基、ピット多数や近世の石材採掘遺構などが検出されている。

以上の調査を含めて、これまでに5次にわたって調査が行われており、今回の調査は第6次に当たる。調査地は六甲川と柚谷川の合流地点の東方、標高56m前後の北東から南西に向かった扇状地上に立地する。

2. 調査の概要

(1) 調査の経過

今回の調査地は、昭和58年度に多淵敏樹氏による発掘調査（以下、第2次調査と称す）が実施された地点である。調査後、開発の計画が変更になり、建造物の規模が当初よりも大きくなった。

このため、既調査範囲からはみ出る部分について発掘調査を実施することになった。調査はまずH網を挿入するための竪坑部分から開始した（「平成2年度調査地1区（深礎坑部分先行調査）」）。このうち北辺東半分の調査では第2次調査範囲内であるにもかかわらず、多くの遺構が未調査の状態で見残していることが判明した。続く北突出区の調査において、その南側160㎡について埋め戻し土を排除したところ、未調査の遺構がほぼ全面に残存していた。この結果、第2次調査範囲内すべてにわたって同様の状態であることが予想され、当初の調査予定範囲を変更し、建造物影響部分全面について発掘調査を実施した。

調査は、深礎部分の工事や残土の仮置きなどの都合から、4回に分けて実施した。以下の叙述において北西区、北突出区、南西区、東区と呼称する場合は、図に示した範囲付近を指すものである。

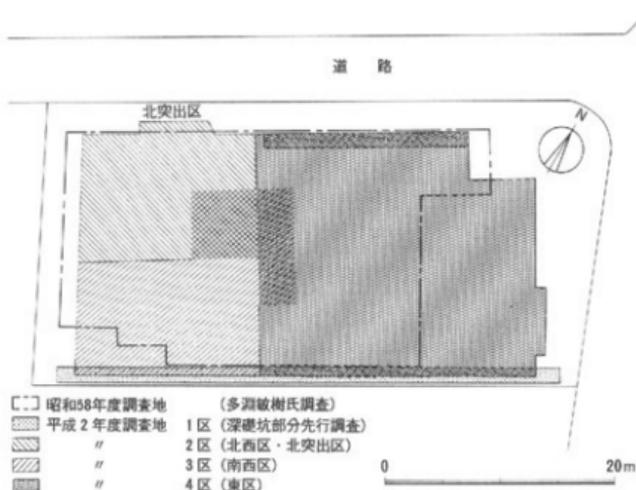


fig. 143 昭和58年度調査地と今回の調査地との関係位置図

(2)基本層序

基本層序は、1層（整地土）、2層（旧耕土）、3層（明灰色シルト混砂）、4層（明灰褐色シルト混砂）、5層（淡灰色シルト混砂）、6層（明灰褐色砂）、7層（暗褐灰色砂）、8層（黒褐色砂）、9層（淡茶褐色砂）、10層（黒色砂）、11層（暗茶褐色砂）、12層（暗黒褐色砂）、13層（暗茶褐色砂礫）となる。最終遺構面においては、東端付近で現地表面から85cm、西端では2.1mで、全体に北東から南西に向かって傾斜している。そのため、後世の削平によって東区付近では中世遺物包含層が失われており、旧耕土を除去すると平安時代遺構面が見れる状態であった。

7層は中世包含層、8層は弥生時代後期包含層でその上面が平安時代遺構面となっている。9層は主にSX08の埋土で、弥生時代後期の遺物を包含している。10層は縄文時代晩期・弥生時代後期包含層である。11層上面が弥生時代後期遺構面となるが縄文時代の遺構もこの面において検出されている。このことは、弥生時代後期の生活面形成の段階で、縄文時代晩期の遺構面が削平されたことによるものと考えられる。11層・12層は、縄文時代晩期の遺物包含層である。縄文時代晩期の遺構は、11層上面と地山面（淡黄色粗砂ないし淡黄色礫混砂）で検出しているが、遺構面と遺構埋土の土色が極めて近似しており、遺構検出が困難であったため、実際には11層上面および12層上面に本来の遺構面が存在するものと考えられる。

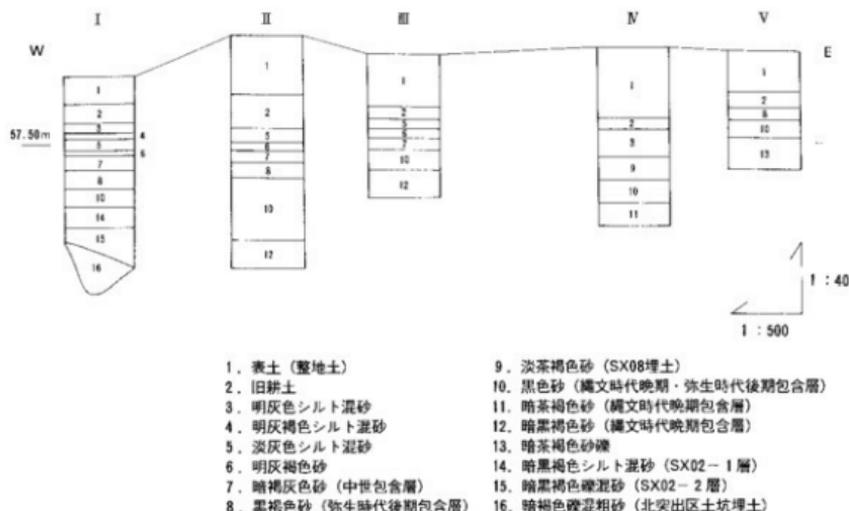


fig. 144 基本土層柱状図（北壁）



fig. 145 縄文・弥生時代遺構面

0 10m

(3) 縄文時代

晩期

縄文時代晩期の遺構としては、土坑58基（土坑墓11基を含む）、土器棺墓2基、集石遺構1ヵ所、土器溜まり1ヵ所、ピット600基以上などが検出されている。いずれの遺構・遺物とも滋賀里Ⅲb式に収まるものである。ただし、遺構面はその切り合い関係から時期差は極めて少ないが、1型式内において2面存在するものと考えられる。遺構のうち、ピットなど大部分について時期差を判断することは難しく、東区の土器棺墓と土坑墓群の関係で、土器棺墓が造られた面が新しいということがいえるだけである。

SX02

北突出区において検出されたもので、幅3m以上、深さ40cmを検出したが、規模、形状は不明である。第2次調査ではそれに繋がる遺構の検出をみていない。遺構からは大量の土器のほか、多量の石器類、メノウ玉1個などが出土している。土器は在地のものが大半であるが、それらに混じて原下層式や大洞系の土器、河内の胎土を持つ土器が出土している。

石器には、石鏃100本以上、石錐6本のほか刃器・削器や大量のチップが出土している。これらの大部分はサスカイト製であるが、まれにチャート製の石鏃もみられるほか、結晶片岩製の石刀も出土している。また、自然石に混じて磨り石、叩き石、台石が出土している。チップの中には石鏃の製作過程を追えるような未製品なども多く含まれており、石器製作址であった可能性もある。

集石遺構

一辺2mの三角形の範囲内に、拳大から人頭大の石が集中している。焼けた痕跡のある石は認められないが、自然に溜まったとみるより、人工的なものと考えられる。集石内に磨り石1点が含まれていた。

土坑

土坑は全部で58基検出している。このうち第2次調査で検出されているSK127～SK136まではいずれかが土器棺墓であろうということ以外まったく不明であり、時期についても定かでない。ただ、その配置から推定して墓であった可能性は高い。東区において検出された土坑のなかで、その規模、形状、配置等から土坑墓の可能性の高いものは以下のものである。

SK121

長径1m、短径90cm、深さ20cmの楕円形の土坑墓である。中からは深鉢1個体が出土している。深鉢は補修孔を有しており、棺として使用された例が多いことから、墓である可能性が高いものである。



fig. 146
北突出区SX02
遺物出土状況図

- SK 151 長辺50cm以上、短辺50cm、深さ13cmの隅円方形の十坑墓である。十坑内に20cm×20cm×10cmのほぼ直方体の石を立てており、立石墓と考えられる。
- SK 153 1.2m×65cm、深さ40cmの方形の十坑である。
- SK 154 1m×70cm、深さ12cmの隅円方形の土坑である。土坑中央に20cm大の扁平な石が置かれている。
- SK 157 1.2m×85cm、深さ42cmの方形の土坑である。
- SK 158 1.4m×90cm、深さ26cmの隅円方形の土坑である。
- SK 159 長径70cm以上、短径65cm、深さ18cmの楕円形の土坑墓である。土坑内に15cm大と60cm大の石2個を立て、それらを支えるように拳大の石3個を配した立石墓と考えられる。

土器棺墓 2基の土器棺墓は、9層（淡茶褐色砂）除去後検出している。いずれも弥生時代後期の整地の際に削平されたものとみられ、土器棺墓1では口縁の一部が、土器棺墓2では上半がそれぞれ失われている。

土器棺墓1 径48cm、深さ20cmの十坑内に深鉢が据えられている。やや南東に傾いて検出されており、土圧の影響を受けており、当初は垂直に据えられていたものと考えられる。底部は打ち欠かれており、中に自然石2個が入っていた。打ち欠かれた底部は掘形周辺からは見つけることはできなかった。

土器棺墓2 径45cm、深さ20cmの土坑内に、深鉢がほぼ垂直に据えられている。底部は打ち欠かれている。打ち欠かれた底部は掘形内などにおいて見つけることはできなかった。

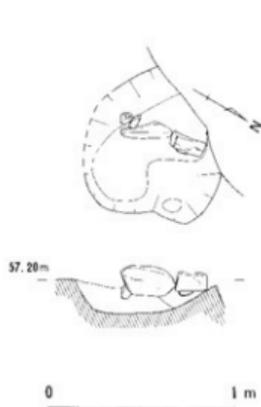


fig. 147 SK159平面・立面図

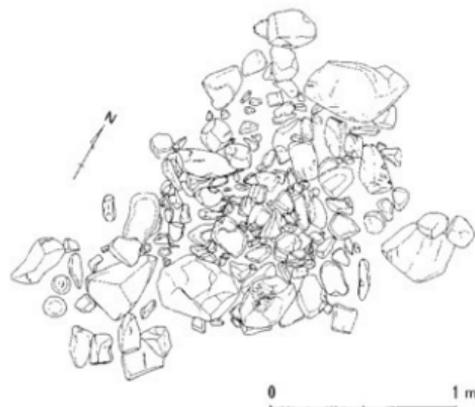


fig. 148 集石遺構平面図

いずれの棺内からも骨片を採取しているが、骨片は土器棺墓付近を含め10層全体から出土しており、現段階では人骨か動物骨かの判断は難しい。

S P 302

長径70cm、短径40cm、深さ20cmの楕円形のピットである。ピットの底は楕円状で、甕がまとまった状態で出土していることなどから、土器棺墓である可能性が高い。

ピット

遺構面全体に足の踏み場もないほどのピットが検出されているが、それらがいかなる目的で穿たれているのかは明らかでない。この時代の住居についてはその構造など不明な点が多く、検出例も少ない。おそらく平地式住居が構成されると考えられるが、柱の配置については現段階では明らかにはしえない。

石器

今回の調査地からは大量の石器、チップ類が出土している。その大部分はサヌカイト製で、石鏃300点以上のほか、石錐、削器、刃器などがある。石鏃には平基式、凹基式、凸基式、尖基式があるが、平基式、凹基式、尖基式が多く、凸基式は1点を数えるに過ぎない。これら石器製作に伴うとみられる大量のチップやサヌカイト原石が出土している。サヌカイト製品以外のもとしては、遺構面全体に、洪水による堆積と思われる自然石が多くみられるが、それらに混じって磨り石、叩き石、台石、凹石、石錐が出土している。磨り石は、その多くが生駒山周辺の石材である。

石錐は、渡辺誠氏のいう切目石錐である。また、磨製石斧も2点出土している。



fig. 149 土器棺墓1 (北から)

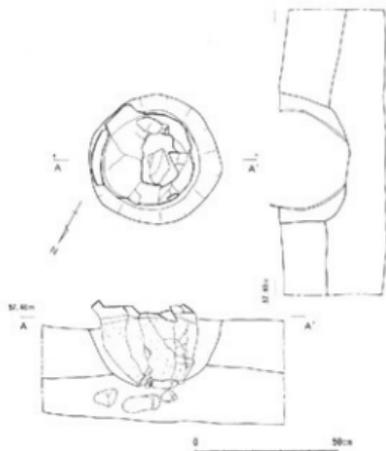


fig. 150 土器棺墓1平面・立面図

石 棒

黒色砂除去後の面において、有頭で断面楕円形のやや扁平な石棒が出土している。1辺のみに稜を有しており、むしろ石刀と呼ぶべきかもしれないが、反りがないため断言はできない。一方が欠損しており、単頭か、両頭かは不明である。



fig. 151
石棒出土状況
(北から)

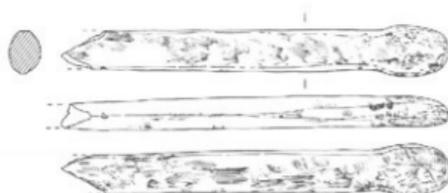
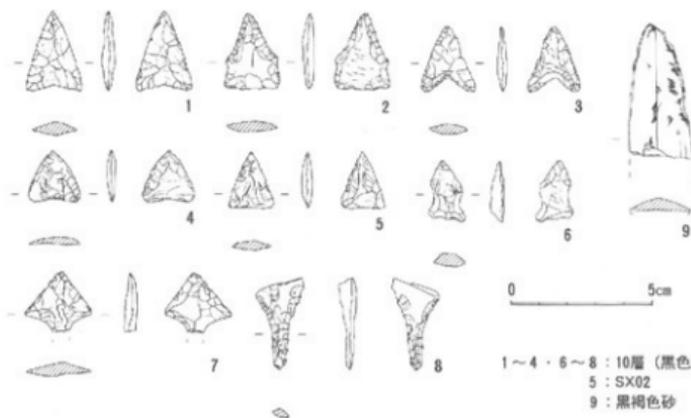


fig. 152 石棒



1~4・6~8 : 10層 (黒色砂)
5 : SX02
9 : 黒褐色砂

fig. 153 石鏃と磨製石剣

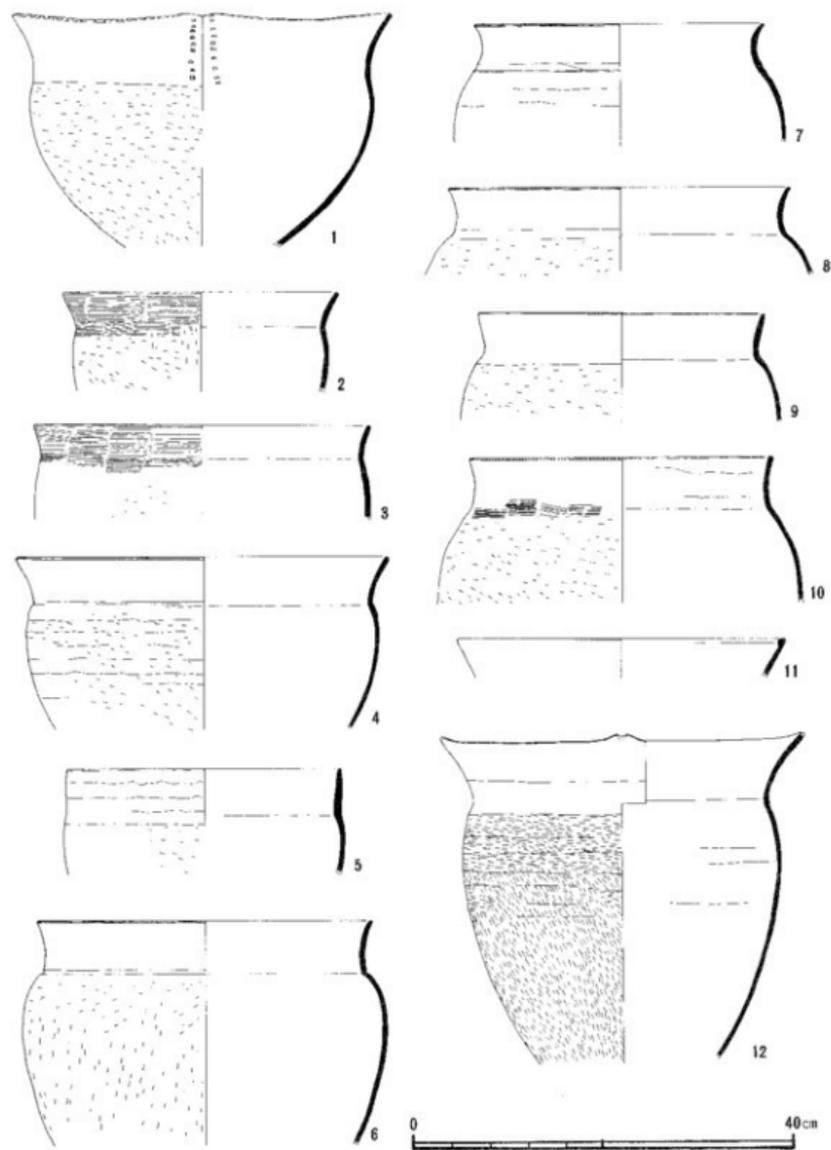


fig. 154 縄文時代SX02土器棺 1出土遺物 1~11: SX02 12: 土器棺 1

(4)弥生時代後期 弥生時代の遺構としては、第2次調査のものも含めて、竪穴住居址4棟、土坑2基、土器溜まり1ヵ所、ピット数基などである。いずれも弥生時代後期後半のものである。

SB01 径8.4mの円形の竪穴住居址である。6本柱と考えられる。屋内施設としては径1.5mの中央土坑を穿ち、ベッド状遺構を設けている。周壁溝が認められるほか、ベッド状遺構と床部の間にも壁溝が認められる。

SB02 一辺6.4mの方形の竪穴住居址である。住居址は4本柱で、中央には径80cmの中央土坑がつくられており、周壁溝が巡っている。今回の調査ではすでに削平されて判然としなかったが、ベッド状遺構が設けられていたようである。

SB03 調査区の南西隅でその一部が検出された。全体に規模は推し測り難い。柱穴は1基検出しており、屋内高床部が設けられており、周壁溝が巡る。床面から台石が出土している。

SB04 径6.5mの円形の竪穴住居址である。4本柱で、柱間は3mを測る。柱穴は床面から60cm掘りこまれており、底には拳大の根石を入れ、深くしてしっかりしたものである。中央土坑は長径1.2m、短径80cm、深さ45cmで、中には炭が多く含まれていた。西辺に幅50cm、深さ15cmの不定形の溝状遺構が伴っているが、用途は不明である。幅20cm、深さ10cmの周壁溝が巡る。

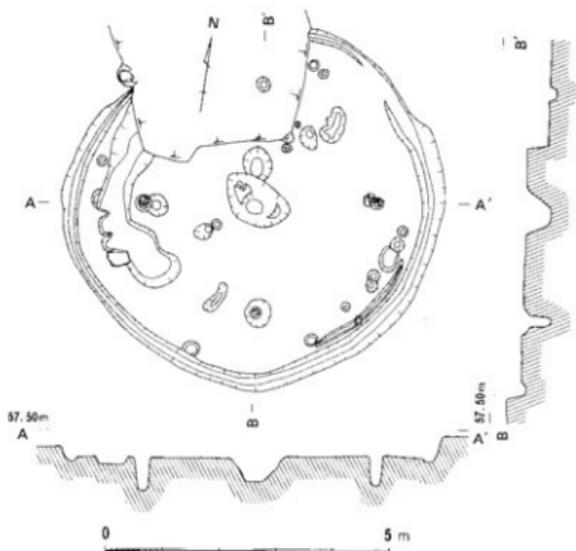


fig. 155
SB04平面・断面図

溝状遺構と周壁溝の間に台石が置かれていた。南東に周壁溝の重複がみられ、柱穴にも重複がみられることから、建て替えがあったものと考えられる。特筆すべき遺物としては埋土中から管玉2点が出土している。

S X 08

S B 04が廃絶して間もなく、その住居址を覆うように長径11m、短径8.5mの浅い土器溜まりができる。S B 04が廃絶して間もなく、その住居址を覆うように大量の土器を廃棄したものと考えられる。いずれも弥生時代後期後半のものと考えられる。器種は壺形土器、甕形土器が大半で高坏形土器は少ない。在地のものほかに山陽系とみられる土器も出土している。土器に混じって、磨り石、台石、砥石なども出土している。また、S X 08付近の黒褐色砂中から磨製石剣片が出土している。

S K 120

長辺1.1m以上、短辺75cm、深さ65cmで、ほぼ垂直、一部挟れる形で壁が落ちる方形の土坑である。底には拳大の比較的平たい石が、敷かれたように置かれていた。中からは土器が多く出土したが、炭化物は認められなかった。その形状などから、貯蔵穴の可能性はある。

(9)平安時代

東区においてのみ平安時代の遺構面が確認されている。ピット5基と人および獣の足跡が検出された。ピットの性格などは不明である。

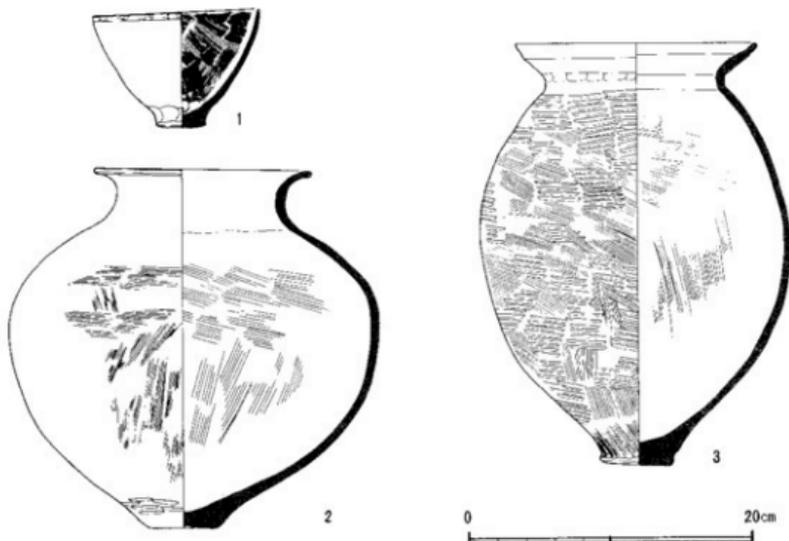


fig. 156 SX08出土遺物

3. まとめ

縄文時代晩期には土坑墓群の造られた時期と、土器棺墓の造られた時期の2時期が確認された。土器からみれば、いずれも滋賀里Ⅲb式で、各遺構出土土器の型式学的差異は認めがたく、層位と切り合い関係から判断したものである。調査区全体をみると、大きく東半分に基城がひろがり、西半分にピット群、すなわち居住域であったものと考えられよう。ただし、住居については先にも述べたように明らかでない。遺物では、土器とともに大量の石器が出土している。土器は、粗製のものが大半で、浅鉢の一部に精製されたものがみられる。また、在地のものに混じって、原下層式や大洞系の土器が出土している。ことに大洞系の土器はその分布範囲の西限を示している。今回の調査では、細片が十数片出土したにすぎないが、第2次調査においては大洞式の雲形文の顕著なものや注口土器片、遮光器土偶などが出土している。また、磨り石の多くは石材が生駒産とみられるものが多く、生駒山西麓の胎土の土器も出土しており、さまざまな交流のあとが窺える。

SX02にみられるように、石楸100本以上とそれに伴う未製品や大量のチップ、作業のための台石が出土しており、石器製作址の可能性が高い。

弥生時代後期後半には、集落を形成していたようで、堅穴住居址4棟や貯蔵穴状の土坑などが検出されている。また、SB04の廃絶後まもなくその直上に土器溜まり(SX08)が形成されている。これらの土器は一括性の高いものである。近年、第V様式～庄内式の土器編年細分が進んでいるが、これらの土器の位置づけについては今後検討を加える必要がある。



fig. 157
4区(東区)
全景(東から)

16. 郡家遺跡（城ノ前地区）

1. はじめに

郡家遺跡は、これまでに遺跡全体で40数次にわたり調査が行われており、弥生時代後期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。時期により盛衰はあるものの、ほぼ継続して営まれた遺跡であることが判ってきた。

検出遺構は、建物址・墓址・溝・井戸等で、中でも弥生時代後期末から古墳時代初頭と古墳時代後期の遺構は濃密な分布状況を示している。

調査地は石屋川、住吉川等により形成された複合扇状地上に立地している。周辺の遺跡としては、弥生時代～中世の複合遺跡である住吉宮町遺跡が東に位置している。

今回の調査は民間の住宅建設に伴うもので、建物基礎等で埋蔵文化財が破壊される部分について調査を行った。（城ノ前地区第30次調査）

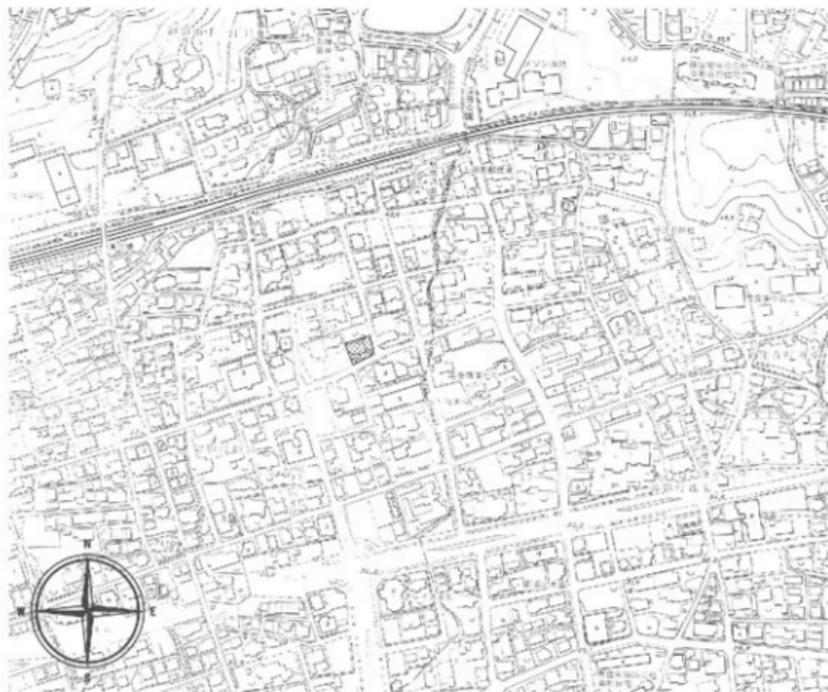


fig. 158 調査地位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要 調査地の基本層序は、(1)盛土、(2)淡灰褐色砂質土、(3)黄茶褐色細砂～中砂(第1遺構面)、(4)茶褐色細砂(第2遺構面)、(5)褐色砂質土(第3遺構面、地山面)である。

(1)遺構と遺物

第1遺構面

SP06

ビット27基、土坑1基、溝5条を検出した。いずれも削平を受けており残存状況が悪かったが、SP06付近は比較的残存状況が良かった。長径65cm、短径40cm、深さ20cmのビットで埋土に多量の炭化物を含んでいる。埋土中に一辺約40cm、厚さ8cmの三角形の板石が斜めに入り込んでおり、板石の下から土師器の小皿とミニチュアの壺が出土した。おそらく柱の下に礎盤として板石を据えて、その下に地鎮としてこれらの土器を埋納したものであろう。

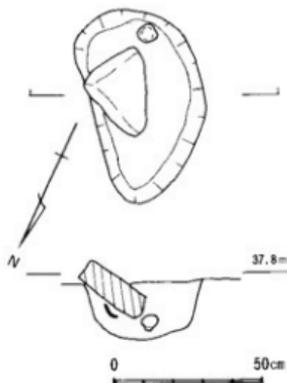


fig. 159 第1遺構面SP06平面・断面図

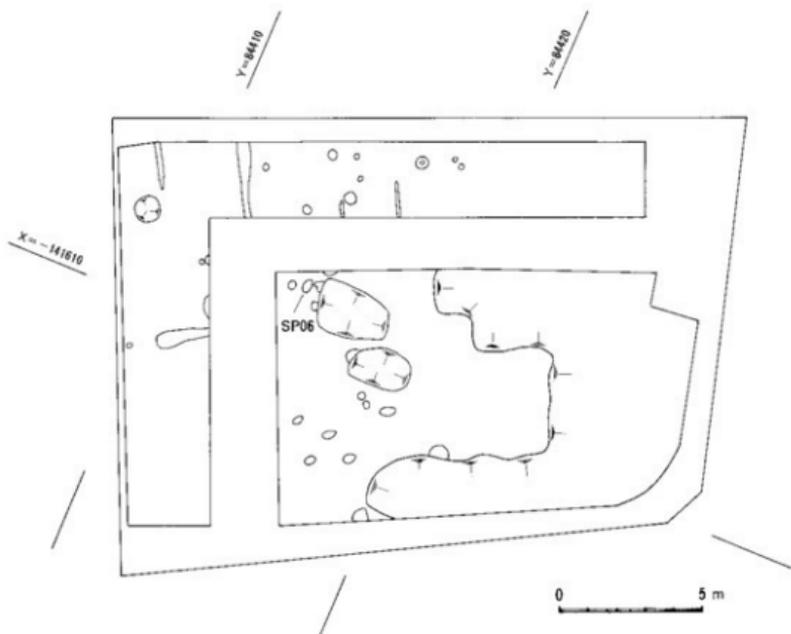


fig. 160 第1遺構面平面図

- 第2遺構面** 第1遺構面（黄茶褐色細砂～中砂）を除去したところで、第2遺構面を検出した。第2遺構面では、ピット69基、土坑4基、溝1条、流路を検出した。ピットは多数検出されたが、建物としてまとまるものはない。
- SK 201** 幅70cm、長さ130cm、深さ40cmの不定形の土坑で、埋土中から土師器小皿が3個体以上出土した。
- SK 202** 幅70cm、長さ100cm以上、深さ約40cmの長方形の土坑で、南側は調査範囲外に延びている。
- SK 203** 幅80cm、長さ170cm以上、深さ約40cmの不定形の土坑で、西側は調査範囲外に延びている。
- SD 201** 幅20～80cm、深さ20～30cmの溝で、西側は調査範囲外に延びており、東側は攪乱を受けているが、西から東にむかって幅は広がっている。
- 流路** 調査区西側で検出されたもので、西側の肩は調査範囲外に広がっており、幅は不明であるが、深さは60cmであった。埋土中には人頭大の礫を多量に含み、礫に混じて須恵器鉢、土師器鍋、土師器皿等の比較的大きな破片が出土している。

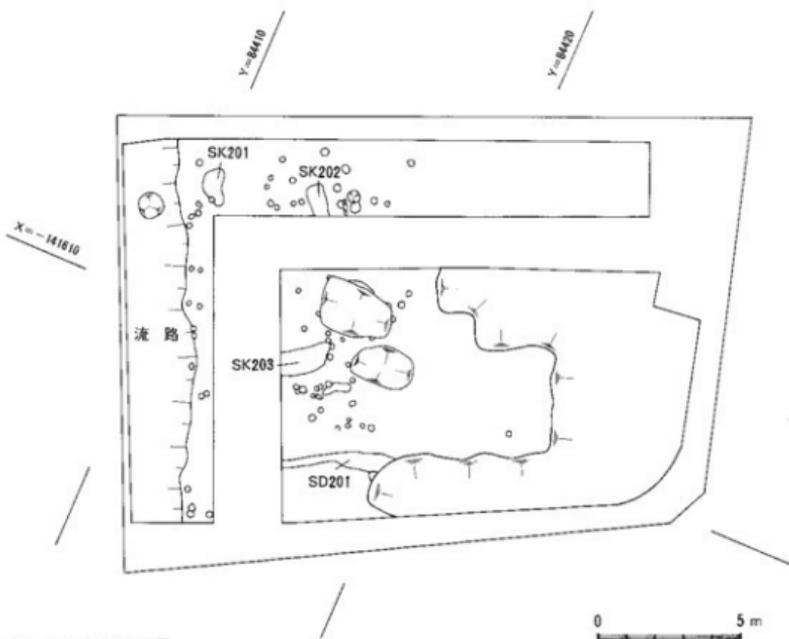


fig. 161 第2遺構面平面図

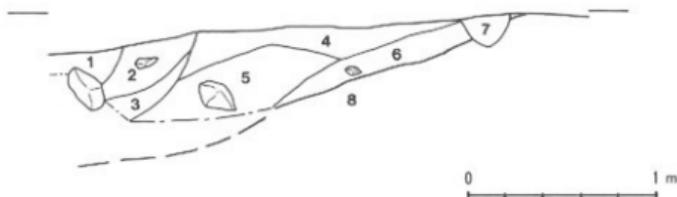


fig. 162 第2遺構面流路断面図

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1. 淡褐色粗砂 | 5. 暗灰色シルトまじり細砂 |
| 2. 灰色粗砂 | 6. 灰色細砂 |
| 3. 灰色シルトまじり細砂 | 7. 暗灰茶褐色砂質土 (ビット埋土) |
| 4. 暗灰褐色細砂 | 8. 褐色砂質土 (地山) |



fig. 163
第2遺構面調査区
中央部遺構検出
状況 (東から)

第3遺構面

第2遺構面(茶褐色細砂)を除去すると、第3遺構面があらわれ、ビット35基、土坑3基、溝3条、不明遺構2基を検出した。調査区中央部分は時期不明の須恵器、土師器の細片を含む自然河道により破壊されていた。

ビットは多数検出されたが、建物としてまとまるものはない。

S K 301

長径80cm以上、短径50cm、深さ35cmの楕円形の土坑で、東側は調査範囲外に延びている。内部から底よりやや浮いた状態で須恵器の坏、蓋があわせて5個体出土している。

S K 302

幅60cm、長さ110cm以上、深さ30cmの不定形の土坑で、北側は攪乱により破壊されている。

- S K 303** 長径130cm、短径40cm、深さ15cmの長楕円形の土坑で、内部より須恵器
杯身片、土師器片が出土している。
- S D 301** 幅25cm、深さ10~15cmの溝で、北側は調査範囲外に広がり、南側は攪乱
で失われている。
- S D 302** 幅20cm、深さ10cmの溝である。
- S D 303** 幅20cm、深さ7cmの溝である。S D 301・S D 302と平行して同じ方向に
流れている。
- S X 301** 幅600cm、深さ15~30cmの落ち込みで、西側は中世の流路により削られ、
東側は調査範囲外のため、長さは不明である。埋土より須恵器片、土師器
片が出土しているが、南の立ち上がりに近い部分からはほぼ完形の高杯が出
土している。竪穴住居址の可能性も考えられる。
- S X 302** 深さ30~40cmの南北に延びる落ち込みで、東の肩は検出しているが、西
の肩は調査範囲外のため幅は不明である。埋土より須恵器片、土師器片が
出土している。

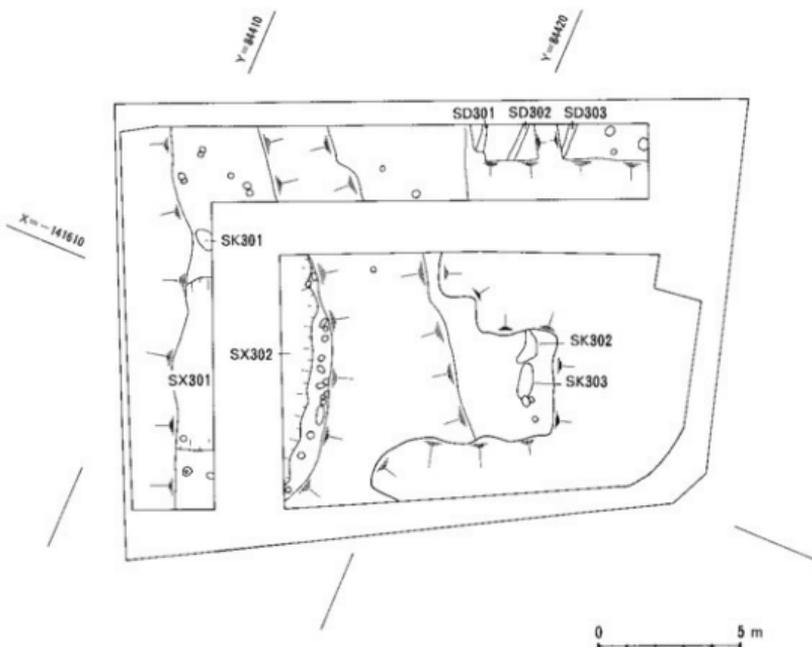


fig. 164 第3遺構面平面図



fig. 165 第3遺構面SK301土器出土状況（西から）

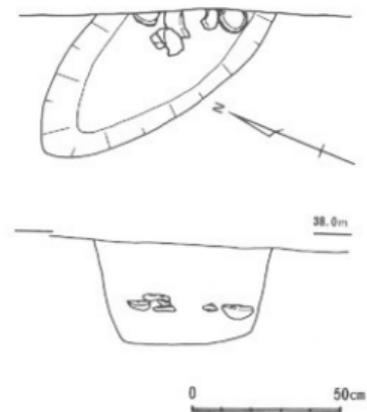


fig. 166 第3遺構面SK301平面・断面図

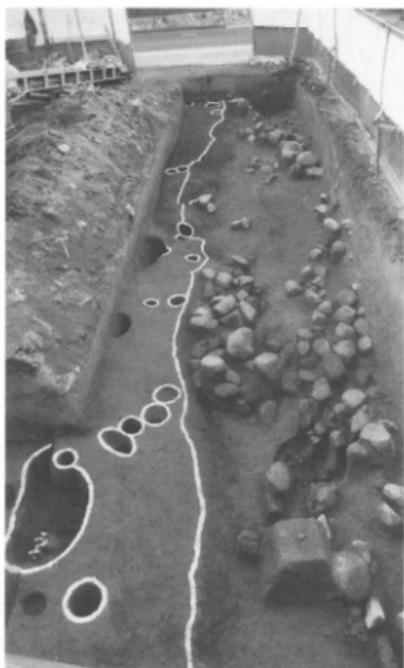


fig. 167 第2遺構面流路内際出土状況（北から）



fig. 168 第3遺構面調査区中央部遺構検出状況（北から）



fig. 169
第2遺構面
流路内土器
出土状況
(北から)

(2)遺構の時期

第1遺構面

S P06より土師器の小皿とミニチュアの壺が出土している。ミニチュアの壺については時期を判断することは難しいが、同時に埋納された小皿の時期が13世紀後半から14世紀前半のものであるところから、ほぼこの時期とみて差し支えがないであろう。したがって第1遺構面の時期は鎌倉時代であると思われる。

第2遺構面

S K201より出土している土師器小皿や流路から出土している須恵器鉢、土師器皿は、ほぼ同じ時期に収まり、13世紀後半から14世紀前半である。第2遺構面の時期も鎌倉時代であると思われる。

第3遺構面

S K301や他の遺構から出土している須恵器杯、蓋、高坏等の時期は5世紀末から6世紀前半にかけてのものであるので、第3遺構面の時期は古墳時代後期であると思われる。

3. まとめ

鎌倉時代の遺構は、これまでの城ノ前地区の各調査でも検出されているが、今回の調査ではこの時期の遺構面は2面存在した。このことについては、自然河道の埋没後第2遺構面上の各遺構が形成され、この面が洪水砂に覆われた後、あまり時を経ずして第1遺構面が形成されたという変遷が考えられる。

古墳時代後期の遺構については限られた面積の調査であったため、その性格を明らかにすることはできなかった。

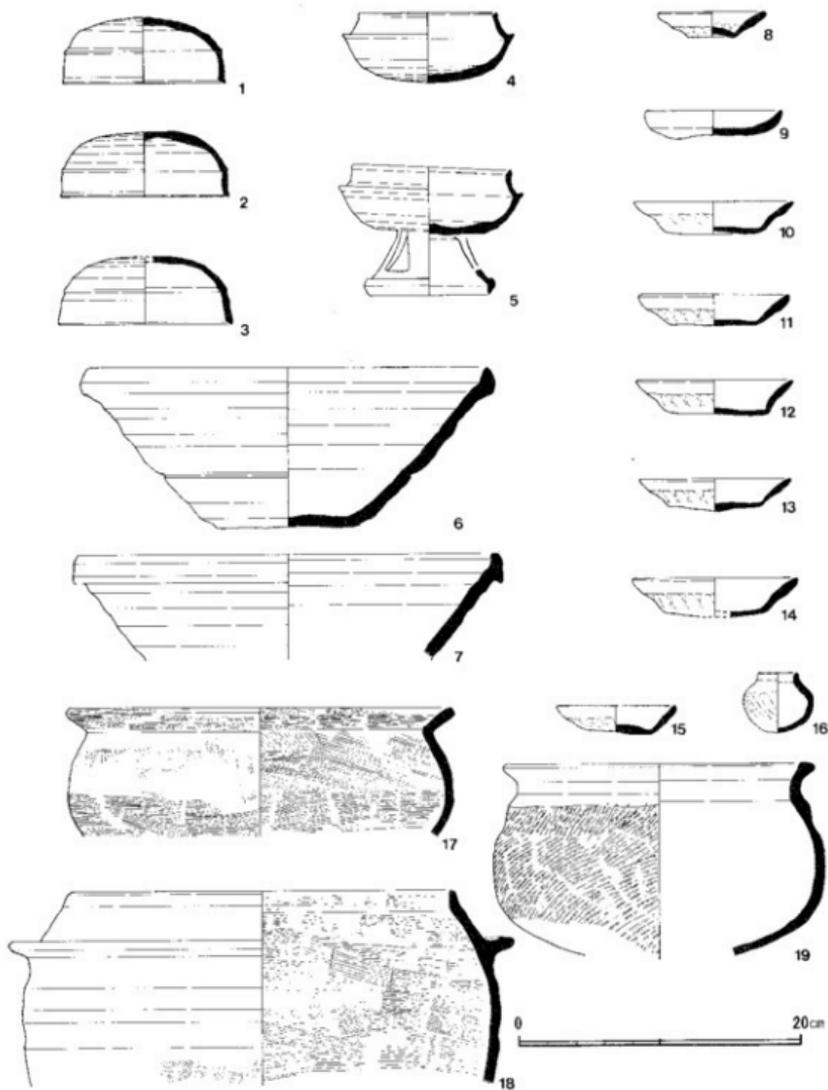


fig. 170 郡家遺跡(城ノ前地区)出土遺物

1 : SP302 2~4 : SK301 5 : SX301 8・10 : SK201
 9 : SP218 6・7・11~14・17~19 : 流路 15・16 : SP06

すみよしみやまら 17. 住吉宮町遺跡

1. はじめに

住吉宮町遺跡は神戸市東灘区住吉宮町を中心にして広がる弥生時代中期から室町時代までの複合遺跡である。これまでの調査では、弥生時代中期・古墳時代後期の竪穴住居址群や古墳時代後期の古墳群等が発見されている。今回の調査は、事務所兼住宅のビル建設に先立つもので、敷地面積約600㎡の内、建物の基礎および地中梁部分で埋蔵文化財が破壊される約250㎡について実施し、その他の部分については基本的に現状保存している。

なお、調査による掘削はビル建設設計図に基づく掘削深度までとし、これに到達しない部分については、調査を実施していない。

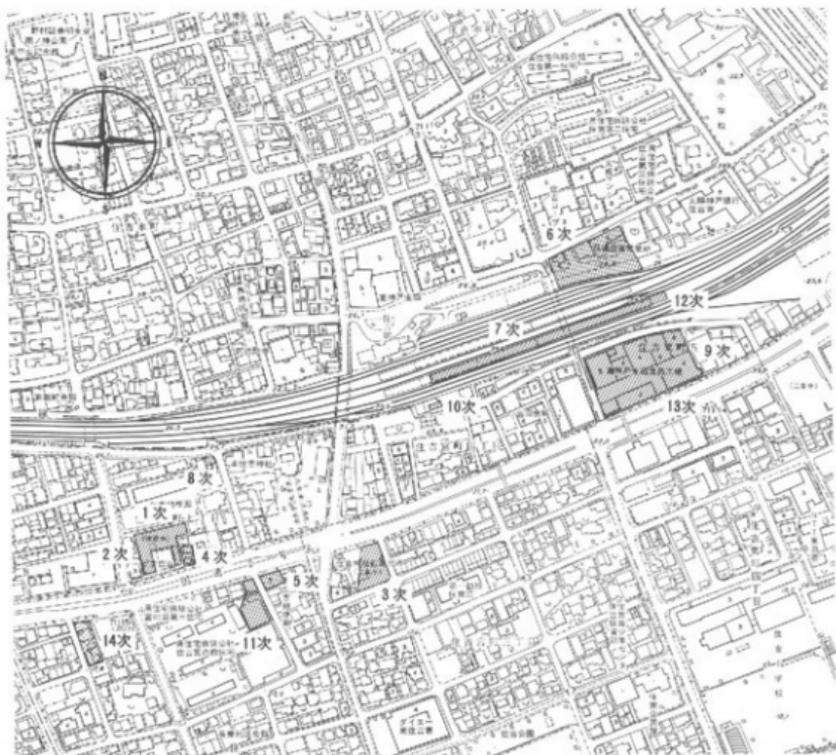


fig. 171 調査地位位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要 今回の調査（第14次調査）では、弥生時代後期から中世にかけての4時期にわたる遺構面を確認した。

(1)第1遺構面（室町時代後期）

現地地表下約2.5mで確認した遺構面で、黄褐色粘質土を基盤層としている。遺構は、調査地南側で検出された、SD01があるのみである。この溝は幅40cm、深さ30cmのもので、南東から北西に直線的に掘られている。溝の方向は現在に残る条里の方向に一致する。溝内および包含層からは、土師器片に混じり、備前焼插鉢、甕などが出土しており、室町時代後期（15世紀頃）の遺構と考えられる。

(2)第2遺構面（古墳時代後期～奈良時代）

第1遺構面の下約30cmで検出した遺構面で、黄褐色中砂層を基盤層としている。この遺構面では、古墳時代後期（6世紀後半）から奈良時代の多くの遺構を検出した。奈良時代の遺構としては、掘立柱建物址2棟と井戸が検出され、古墳時代の主な遺構としては堅穴住居址2棟が検出された。

SB03

南北3間（5.5m）、東西1間（2.0m）以上の掘立柱建物址である。柱の掘形は一片70cm内外の方形で、礎盤として人頭大の花崗岩河原石を据えるものもある。西側が調査区外に延びており、規模は不明な点が多い。



fig. 172 調査範囲図
S = 1 : 500

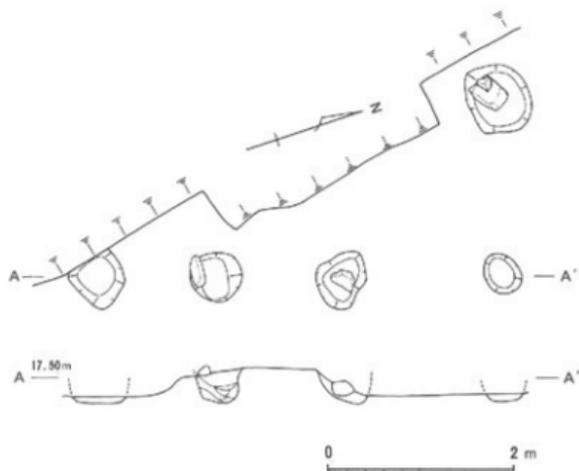


fig. 173 SB03平面・断面図

SB04

南北3間(6.0m)、東西1間(1.9m)以上の掘立柱建物址である。柱の掘形は一片0.8m内外の方形のものである。東側が調査区外に延びているため、規模は不明な点が多い。

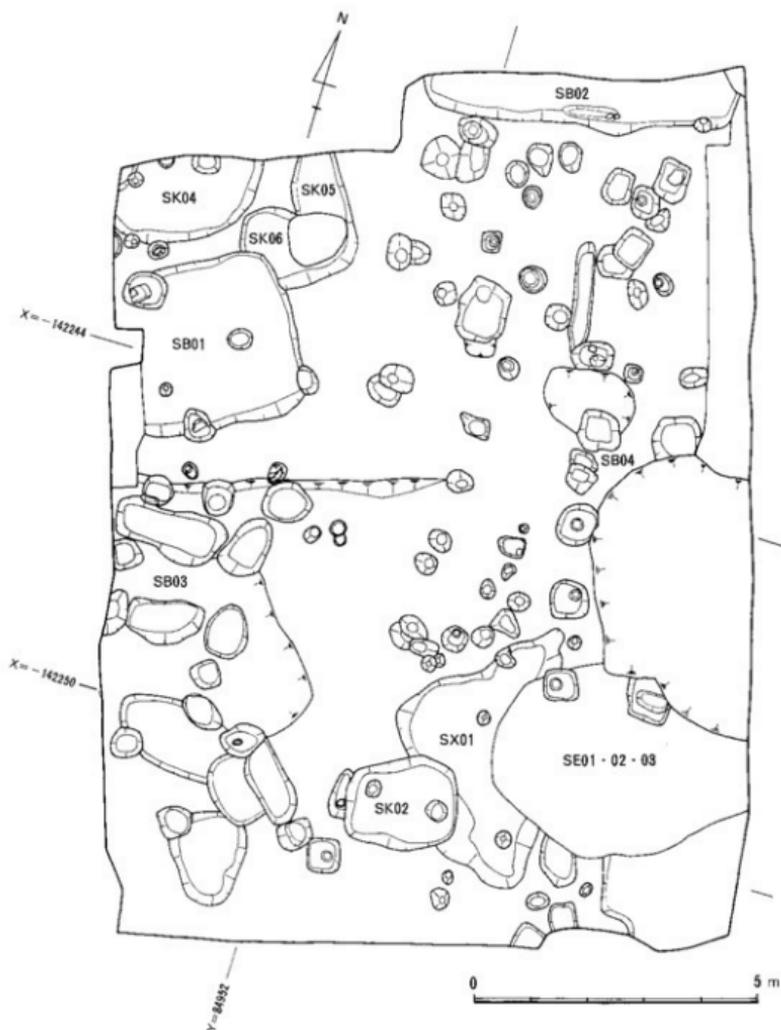


fig. 174 第2遺構面平面図

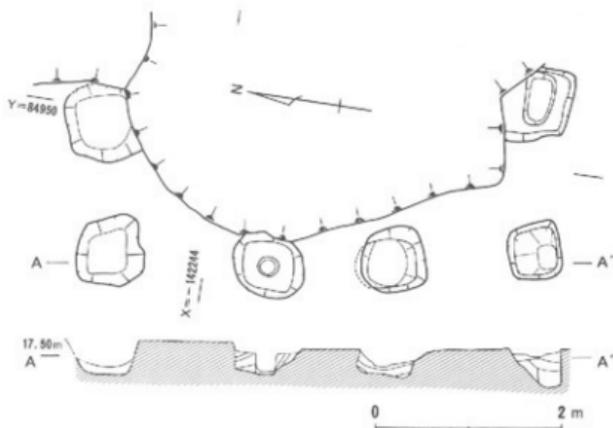


fig. 175
SB04平面・断面図



fig. 176
第2遺構面
南地区北半部
(北から)

井戸址

SE01

調査区の南東隅に検出された井戸址で、3回作り変えられている。

SE01は最後に作られた井戸で、2.1m×1.4mの掘形を掘り、その中に一辺0.8mの正方形の木組で井戸枠を作る。上方が南側に倒れた状態で、腐食も進んでいる。井戸枠の木組構造は隅柱・縦板・横板で構成される。検出状態から構造を復元すると直径15cm程度の先端を尖らせた丸柱を用いた隅柱を4隅に立て、その柱にもたせ掛けるように四方に3～5枚の縦板をたてる。横板は、基底付近の縦板の内側に2段に組まれたもので、端部には切り込みを設け、組み合わせている。

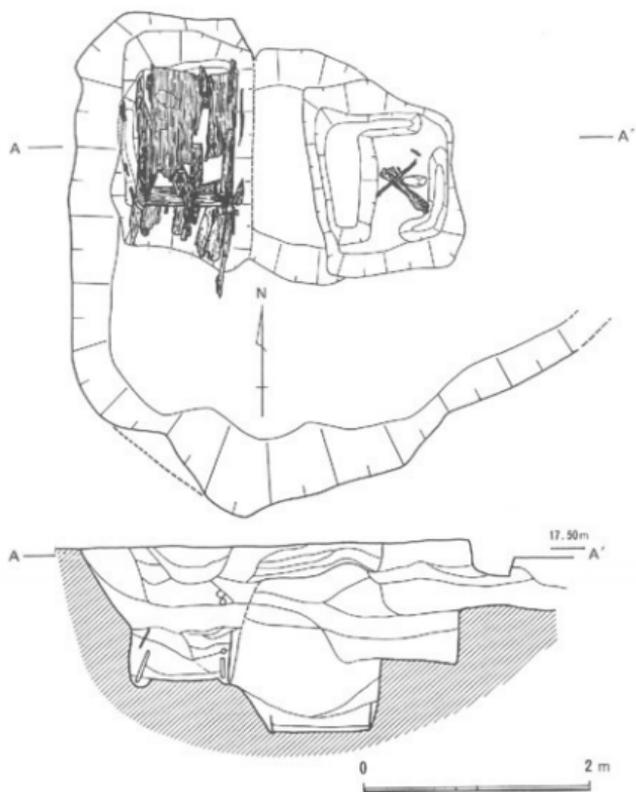


fig. 177
SE01 - 02 - 03
平面・断面図

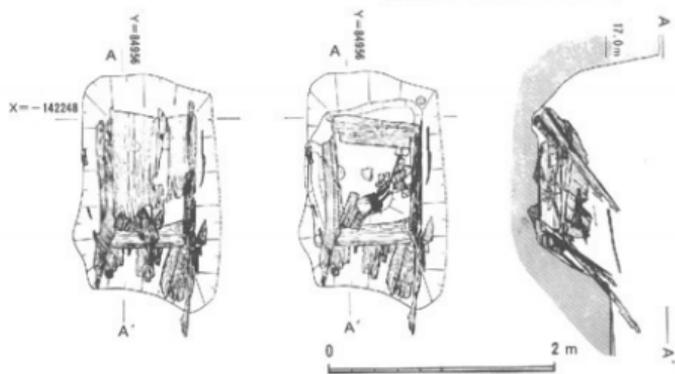


fig. 178
SE01
平面・立面図

井戸枠の部材は、建物の転用材を使用しており、端部に円柱状の突起を持つ扉2点の他、ほぞ穴を開けた板材等が出土している。

SE02

SE01の東側に検出された井戸址である。1.6m×1.2mの掘形を掘り、その中に1辺0.8mの正方形の木組で井戸枠を作ったものと思われるが、廃棄の際に部材は全て抜き取られている。

SE03

SE01とSE02間の下から検出された井戸址である。2.0m×1.2mの掘形を掘り、その中に1辺0.85mの正方形の木組で井戸枠を作ったものと思われるが、廃棄の際に部材は、最下段の横板を除き抜き取られている。

この3基の井戸址は、SE03→SE02→SE01の順に次々と作り変えられたものと推定される。



fig. 179
SE01・02・03
検出状況
(北から)



fig. 180
SE01全景
(北から)

S B 01 調査区の北東の隅で検出された3.2m×3.1mの隅円方形の小型の竪穴住居址である。周壁溝や柱穴は検出されなかった。埋土からは古墳時代後期後半（6世紀後半）の須恵器杯や土師器の甕形土器などが出土している。

S B 02 調査区の北東の隅で検出された、1辺5.6mの隅円方形の竪穴住居址である。北側の大部分が調査区外に延びているため、詳細は不明である。周壁溝は南壁に沿って、一部で検出された。出土遺物は、周壁溝付近で古墳時代後期後半（6世紀後半）の須恵器杯が出土している。

その他の遺構 その他、第2遺構面では多くの土坑、柱穴等が検出されている。時期的には、S K 05、06が古墳時代後期に属するもので、その他のものは出土遺物からみて、奈良時代のもと考えられる。柱穴の配列からは、S B 04の西側に、ほぼ南北に2.0～3.0m間隔で並ぶ6基の柱穴が柵などの構造物になる可能性を残しているが、現状では建物等を復元するのは困難である。

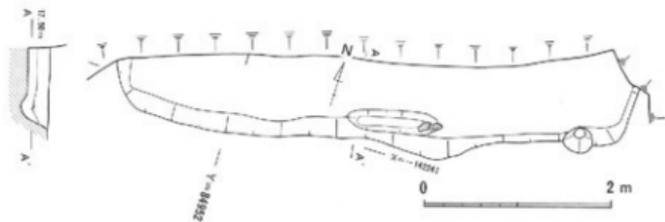


fig. 181 SB01
平面・断面図



fig. 182 第2遺構面南地区西半部（北から）

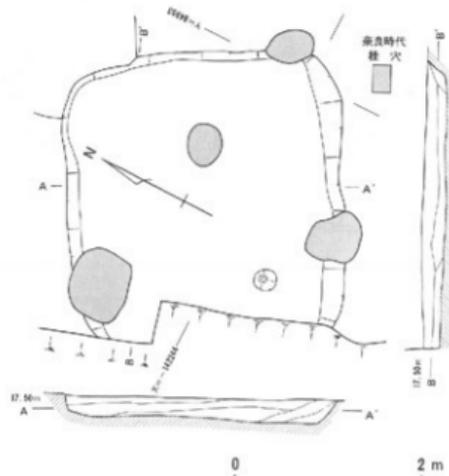


fig. 183 SB02平面・断面図

(a)第3遺構面（5世紀代）第4遺構面（弥生時代末期）の調査

第3遺構面より下層の調査は、基礎杭などにより、遺構が破壊される可能性のある8ヵ所に2m×2mのグリッドを設け、調査を実施した。

第3遺構面 第2遺構面の約25cm下にある。黒褐色粘土層を基盤とする遺構面である。5世紀末から6世紀の初頭にかけての須恵器・土師器片が出土したが、顕著な遺構は検出されなかった。

第4遺構面 第3遺構面の約20cm下にある。黄褐色粘土層を基盤とする遺構面である。弥生時代末期の土器片が出土したが、顕著な遺構は検出されなかった。

この2面の遺構面及びその上部に堆積する土層は、どれも有機質を多く含む土壌化の著しい粘土層である。保水性も良く、水田などに向けた地質条件を備えている。今回の調査では畦や水路等の遺構は検出されず、確定はできないが、付近に弥生時代末期から古墳時代にかけての水田址が存在する可能性は極めて高いといえる。

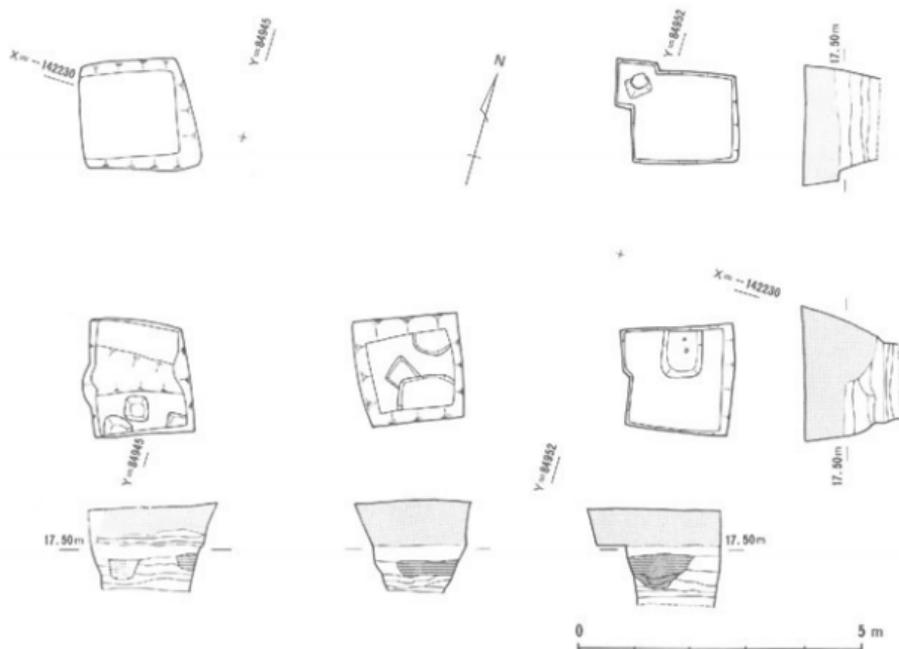


fig. 184 北地区平面・断面図

遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理用コンテナ10箱程度である。このうち、第2遺構面で出土したものが9箱ある。時期的には奈良時代のものが約6割を占め、古墳時代のものが約3割ある。多くは細片で接合するものも少ないが、井戸・柱穴・土坑等の遺構内で出土したものは、復元することにより、原形を窺うことができる。

墨書土器

井戸内からは底部の裏面に、墨書を残す土師器の皿が2点出土しているが、判読は困難である。

建築部材

井戸枠に使用された部材は、建築部材の転用材であることが判明している。そのうち、2点には隅に直径3cm、高さ1cmの突起があり、扉を転用したものと考えられる。他のものにも、井戸枠として組み合わせるまでに切り込まれた「ほぞ」や切り込みがあり、扉を固定するような建築材である可能性がある。



fig. 185
SE01井戸
枠検出状況
(北西から)

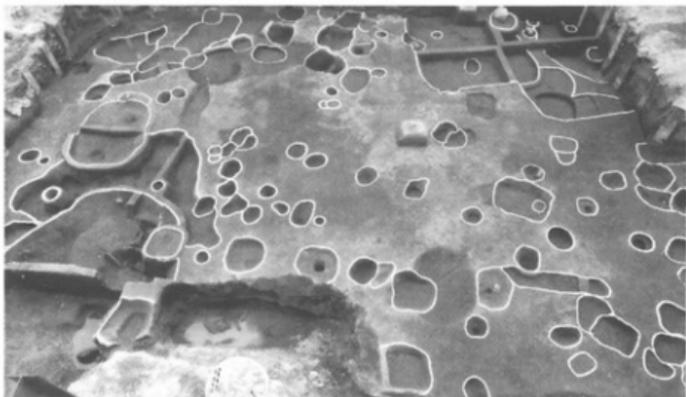


fig. 186
南地区第2
遺構面全景
(東から)

3. まとめ

今回の調査では、奈良時代の井戸址や掘立柱建物址、古墳時代の竪穴住居址の発見など多くの成果があった。この中でも、奈良時代の井戸の発見は、神戸市内では、西区玉津町の吉田南遺跡・出合遺跡に続く、3例目の発見である。また、井戸枠として使用されていた「扉」は、市内初の出土品となった。当時の建築様式を知る上での貴重な発見といえる。

今回の発掘調査地点は住吉宮町遺跡の中では最も西側に位置している。これまでの調査では最も東側の調査地点であった、第9次調査で奈良時代の集落が発見されているが、当地点との間で実施された各調査では、いずれも奈良時代の遺構は検出されていない。こうした視点に立つと当該調査で発見された建物群は、北西方向にある、郡家遺跡中町地区の奈良時代建物群に属する可能性が高くなったといえる。

また、下層の土層堆積から推定して、当該地が水田等の耕作地になりやすいという観点に立てば、住吉宮町遺跡の古墳時代後期の古墳群は、当該地までは分布せず、当該地と第1次調査地点の間に西端があるとの推定も可能となる。

当時の土地利用の空間領域を考える上で、重要な資料を得たといえる。

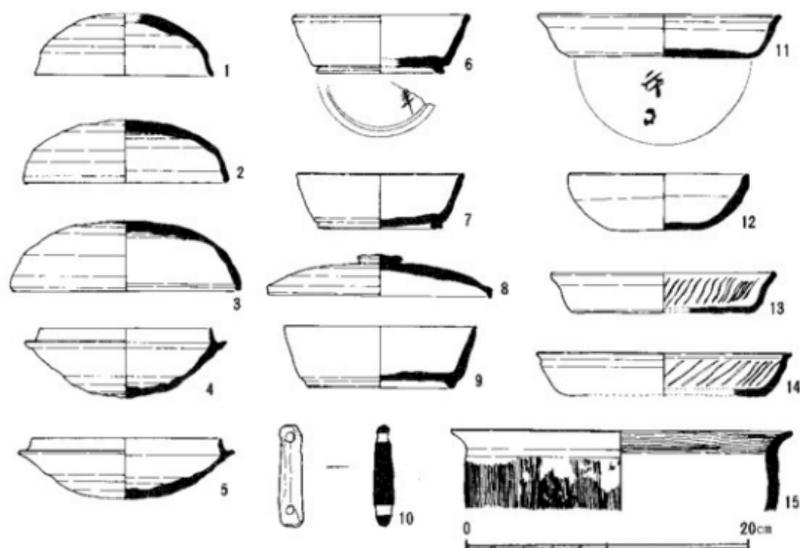


fig. 187 住吉宮町遺跡出土遺物

1~9: 須恵器 10: 土師器 11~15: 土師器

1・5・8・9: 灰色砂 2・3: SB02 4・6・7・11~15: SE02 10: SK04

18. 森北町遺跡

1. はじめに

森北町遺跡第10次調査地点は、六甲山南麓の標高約16m付近の扇状地に位置する。今回の調査地は芦屋市との市境から約50mのところ、森北町遺跡の範囲の東限にあたる。

当遺跡はすでに9次にわたる調査が行われ、弥生時代から近世にいたる遺構・遺物が発見されている。このうち主要なものは弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物で、この時代の大規模な集落の存在が想定される。

今回の第10次調査は、共同住宅建設に伴うもので、これに先立つ試掘調査により遺物包含層が2層確認された。その結果に従い建物敷地内の全面について発掘調査を実施した。試掘調査で確認された遺物包含層の上面までバックホーによる掘削を行い、以下は人力による掘削を行った。

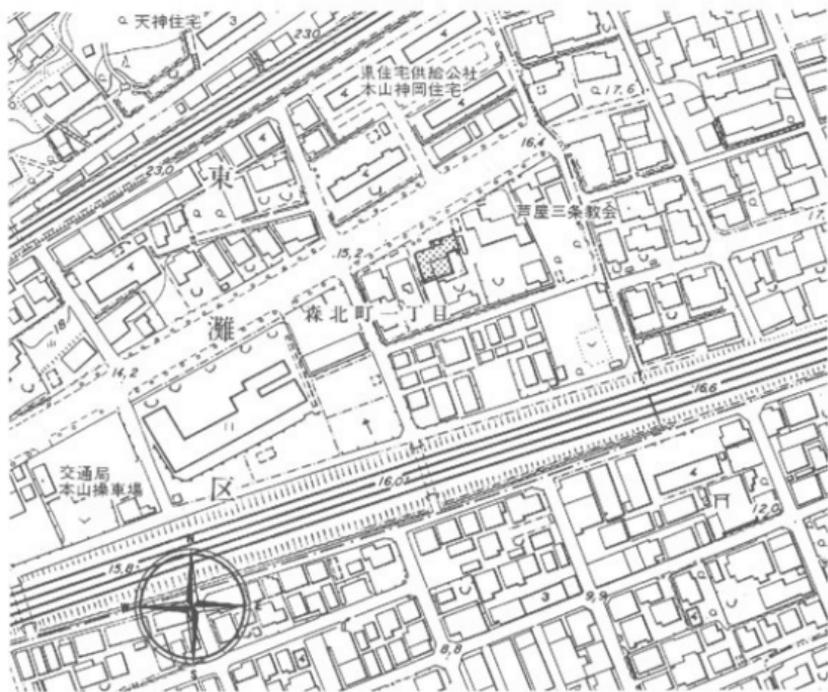


fig. 188 調査地位図 S = 1 : 2500

2. 調査の概要

基本層序

基本層序は以下の通りである。盛土（阪神大水害に伴う昭和12・13年頃の盛土を含む）、淡青灰色砂（近代耕土）、暗青灰色粘質砂（近世耕土）、灰色粗砂、淡灰黄色粗砂、淡褐色粗砂、黄褐色砂、暗褐色粘質シルト、暗灰色砂、黒色粘土（地山）。このうち暗青灰色粘質砂から暗灰色砂までの各層に遺物が包含されていた。遺構面は3面確認されている。

第1遺構面

第1遺構面では溝が3条検出された。S D01は幅1m、深さ15~20cmで、北から南に傾斜している。S D02は幅1m、深さ40~50cmで、南側に幅50cm、深さ40cmの小溝が平行して存在する。いずれも西から東に傾斜している。S D03は幅80cm、深さ6~10cmで東北東から西南西方向にのび、ほぼ水平である。S D01から流れた水は、東流するS D02に調査区南壁中央付近で合流し、さらに南へと流れる。合流点ではS D01とS D02の間に段差があり、人頭大の石が両肩部に据えられていた。なお、これらの溝の検出面は灰色粗砂除去面であるが、同じ溝が近世耕土面及び近代耕土面においても存在している。最初に掘削された時期は、灰色粗砂中の遺物からみて17世紀ごろと考えられる。これらの溝は、水田に伴うものと考えられ、17世紀以降近代まで機能していたようである。

第2遺構面

石列

調査地は北から南にかけて緩く傾斜しており、等高線に沿うかたちで東西方向の石列が検出されている。拳大から人頭大の石を用いて2列ないし

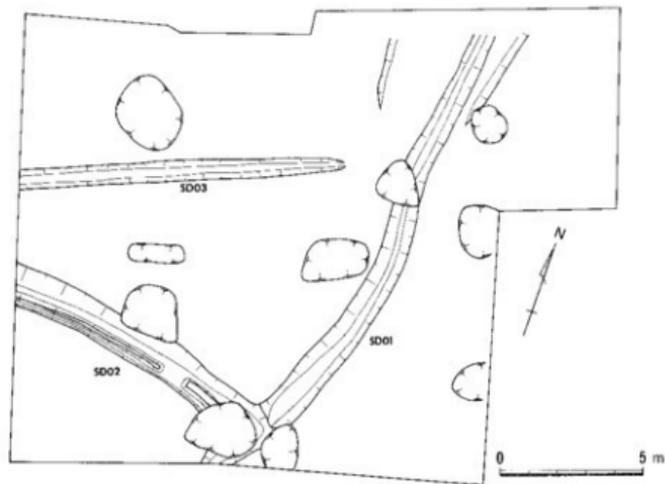


fig. 189 第1遺構面平面図

3列に配している。石列の間から出土した瀬戸美濃製の柄付片口の年代から15世紀の半ばから後半の時期が推定される。何の目的で構築されたかは不明である。



fig. 190
第2遺構面石列
(南西から)



fig. 191 第2遺構面平面図

第3遺構面

第3遺構面では土坑1基、溝1条、落ち込み状遺構1ヵ所が検出されている。SK01は長径70cm、短径50cm、深さ20cmの平面形が楕円形の土坑である。土坑内からは遺物は出土していない。SX01は幅2.8～4m、深さ20cm、長さ8m以上の浅い落ち込み状の遺構である。遺構の東肩付近に遺構に平行して径10cmの杭が50～80cm間隔で打ち込まれていた。遺構の性格は不明である。時期は第3遺構面の埋土である暗褐色粘質シルト及び暗灰色砂の遺物から14世紀後半ごろと考えられる。

祭祀遺物

遺構内からではないが注目すべき遺物が出土している。洪水砂と考えられる黄褐色砂中から瓦器羽釜のなかに土師器皿2枚を口縁同士を合わせて入れてあったとみられるものが出土している。付近及び土器内を精査したが穀物やその他の遺物は確認されなかった。土師器皿の口縁同士を合わせる行為は地鎮めのまつりの際に輪宝を描いたり、穀物を納めたりして埋納する例がある。また、同じく地鎮めのまつりの際に羽釜の中に沢山の小皿を入れて埋納する例が多く報告されている。遺構に伴わないため使用法は判らないが、これらの土器は何らかのまじないに用いられたものではなかろうか。時期は15世紀前半に属すると考えられる。

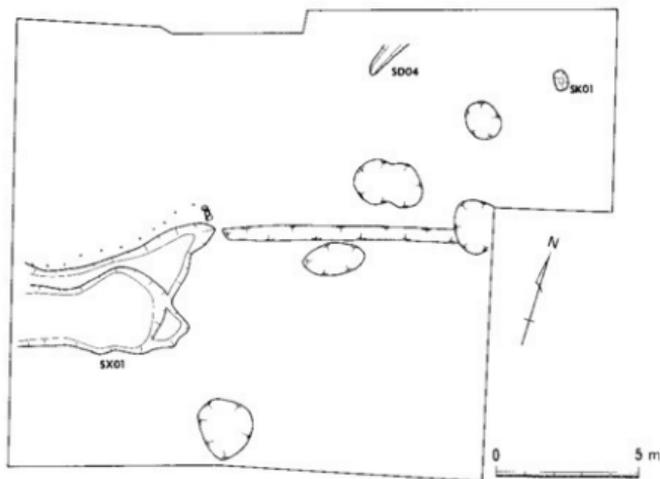


fig. 192 第3遺構面平面図

3. まとめ

今回の調査では、14世紀後半から16世紀にかけての遺構が検出された。森北町遺跡の中心付近で見られる弥生時代や古墳時代の遺構は認められず、別の遺跡単位であると考えた方が理解し易いようにも考えられる。今回の調査地では近世初頭以降、戦前まで水田が繰り返し営まれ、それぞれの水田を覆う洪水砂中に弥生時代から近世の遺物が含まれていることが明らかになった。



fig. 193
黄褐色砂遺物
出土状況

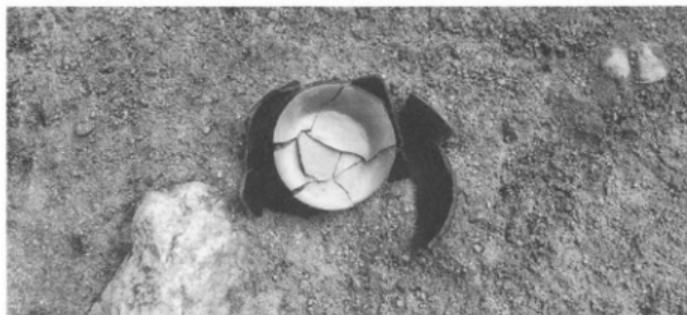


fig. 194
同上上の皿を
はずした状況

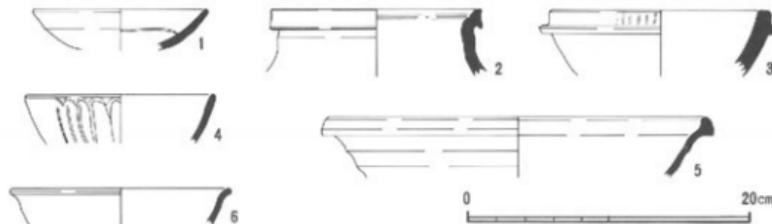


fig. 195 森北町遺跡出土遺物(1)
1～6：暗灰色砂出土
1：瓦器 2：常滑 3：石鍋 4・6：青磁 5：須恵器

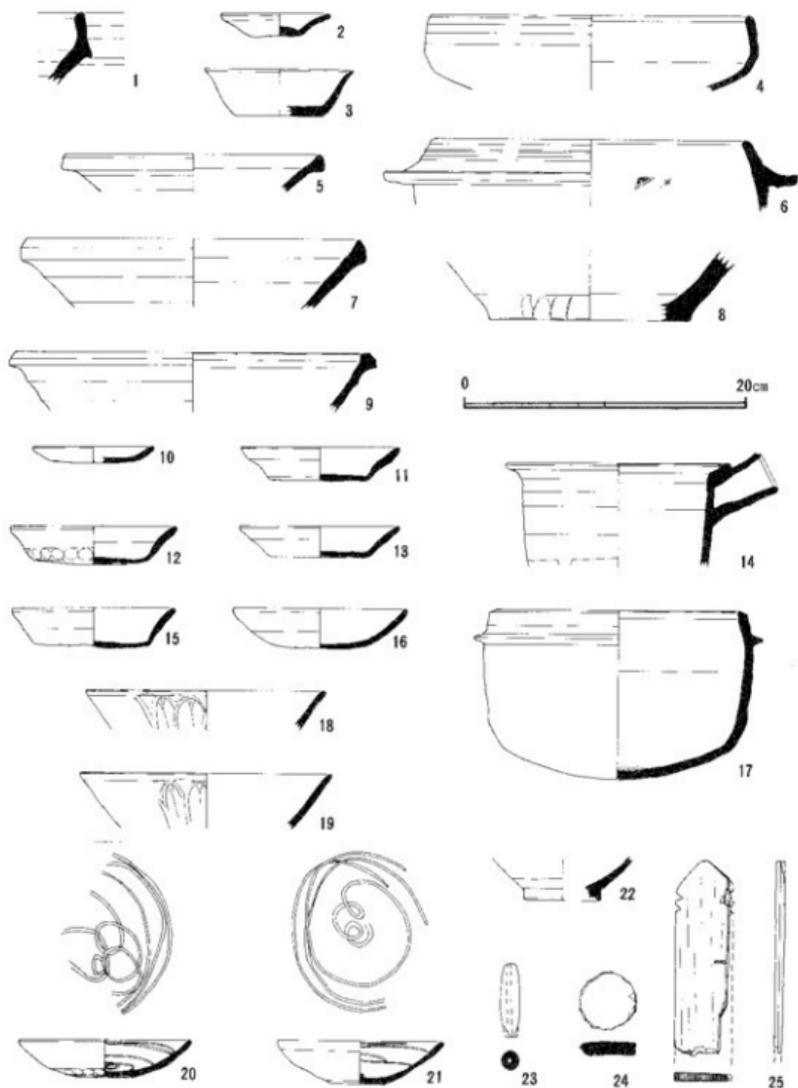


fig. 196 森北町遺跡出土遺物(2)

4: 近世焼土 1~3・5~8: 淡灰黄色粗砂 10・11・13・14・18・19: 淡褐色粗砂

12・15・16・17・24: 黄褐色粘質砂 20~22: 暗褐色粘質シルト

23・25: 暗灰色砂 9: 明淡灰色粘質砂

1: 彌前 2・4・6・10~13・15・16: 土器 3・22: 白磁 5・7: 須恵器 8: 常滑 14: 瀬戸・美濃

18・19: 青磁 17・20・21: 瓦器 23: 土鍾 24: 小型円板 25: 木札

19. 小部北ノ谷遺跡（第1・2次調査）

1. はじめに 小部北ノ谷は北区鈴蘭台団地の北方、杉尾神社以北の西小部川沿いに位置する。北から延びる尾根に挟まれた谷部に位置し、字名通りの地形を示している。

小部や鈴蘭台周辺では、これまでほとんど遺跡の存在は知られていなかった。現在の君影町5丁目付近の尾根道でサスカイト片が採取された縄文時代の遺跡とみられるソバカ坂遺跡のほか、中世の土師器が採取されている大蔵馬場遺跡などが知られているに過ぎない。また、杉尾神社境内には室町時代の作とみられる石燈籠が、宇西谷の前の西小部墓地には「永禄四年」「元亀元年」などの銘を刻む五輪塔群が残されている。

2. 調査の概要 第1次調査

都市計画道路長田・箕谷線（北の谷地区）街路築造工事に伴い、西小部川の付け替えを行う部分について調査を実施した。試掘調査の結果、灰色シルト混じり砂層が遺物包含層であると確認されていたため、その上面まではバックホーにより掘削を行い、以下は人力により掘削を行った。



fig. 197 調査地位置図 S = 1 : 5000

基本層序

基本層序は、現耕土、床土、暗灰色粘質砂（旧耕土）、淡褐色粘質砂、灰色シルト混じり砂層、灰色細砂層、暗灰色シルト質砂層、黄褐色粗砂層、淡灰色シルト混砂礫層、暗灰色シルト混じり砂層となっている。

遺構・遺物

遺物は灰色シルト混じり砂層以下各層に包含されているが、遺構は灰色シルト混じり砂上面において16世紀頃の暗渠1条が検出されたにすぎない。各層とも西小部川の洪水による堆積であるとみられ、それを順次水田として使用していたのであろう。このうち灰色シルト混じり砂層からは、咸平元宝（初鋳998年）と熙寧元宝（初鋳1068年）が密着した状態で出土している。他に元豊通宝（初鋳1078年）と□和□宝が近世河道埋土中から出土している。



fig. 198
中世遺構面全景
（南から）

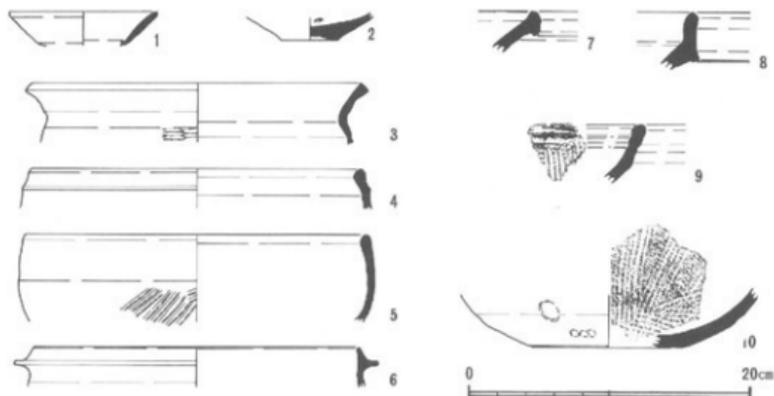


fig. 199 第1次調査出土遺物 1・3～6・9・10：土師器 2・8：陶器 7：須恵器



fig. 200 第1次調査出土銅銭（原寸大）

第2次調査

都市計画道路長田・箕谷線（北の谷地区）街路築造工事に伴う個人住宅移転の代替地について発掘調査を実施した。試掘調査の結果、灰色砂質土が遺物包含層であると確認されているため、その上面までは重機により掘削を行い、以下は人力により掘削を行った。今回の調査では、建造物工事による影響深度までとした。

調査の便宜上、調査区を第1～8トレンチの8区に分割した。以下の記述も第1～8トレンチの順に行う。

基本層序

基本層序は各トレンチとも概ね以下の通りである。①耕土、②床土、③明淡褐色灰色砂（旧耕土）、④明黄白色粗砂（花崗岩・パイラン土による盛土）、⑤暗茶灰色砂混シルト（中世遺物包含層）、⑥黄灰色砂（縄文時代遺物包含層）、⑦灰黄色砂である。このうち④層は第5トレンチのみでみられる。第1～3トレンチでは⑥層が欠層ないしは一部に残存が認められるだけで、遺物は③層からの出土である。⑥層以下の調査は第4・5トレンチにおいてのみ実施している。

第1トレンチ

第1トレンチでは、耕土・床土以下近世以降の盛土とみられる茶褐色ないし灰色の粘質砂中に中・近世の遺物が、その下層の灰褐色砂中に中世の遺物が、それぞれ若干量包含されていた。遺構は確認されなかった。

第2トレンチ

第2トレンチにおいても遺物の出土状況は、西半で第1トレンチとはほぼ同様で、東半では耕土・床土以下小礫を含む灰色粘質砂を除去すると地山面となる。ここでは、東に向かって傾斜する自然の落ち込みが検出されたにとどまる。この落ち込みは、第3トレンチ西端付近で検出された東に向かって傾斜するラインに繋がるものと考えられる。

第3トレンチ

第3トレンチにおいても土層の堆積状況は、第2トレンチの東半とはほぼ同様である。遺構としては流路ないし溝が3条、ピットが11基検出された。ピットはいずれも建物を構成するには到らない。

SD301

西端付近で検出された流路は、幅1m以上、深さ20cm以上の規模で、東岸には、40～50cm間隔で護岸用とみられる径6cmの杭が打ち込まれていた。近世まで機能していたものと考えられる北から南方向の流路である。

SD302

幅6m、深さ30cmの北東から南西方向の流路である。埋土に含まれてい

た遺物は、いずれも細片のため時期を明らかにすることはできない。

SD303

幅3.6m、深さ50cmの流路である。北からの流れはここで東に流れを転じている。埋土に含まれていた遺物は、いずれも細片のため時期を明らかにすることはできない。

第4トレンチ

試掘調査の結果では、中世の遺物包含層と遺構面が存在するのみとなっていたが、第5トレンチや第8トレンチで縄文時代の遺物が出土しており、付近に縄文時代の遺物包含層あるいは遺構の存在が予想された。

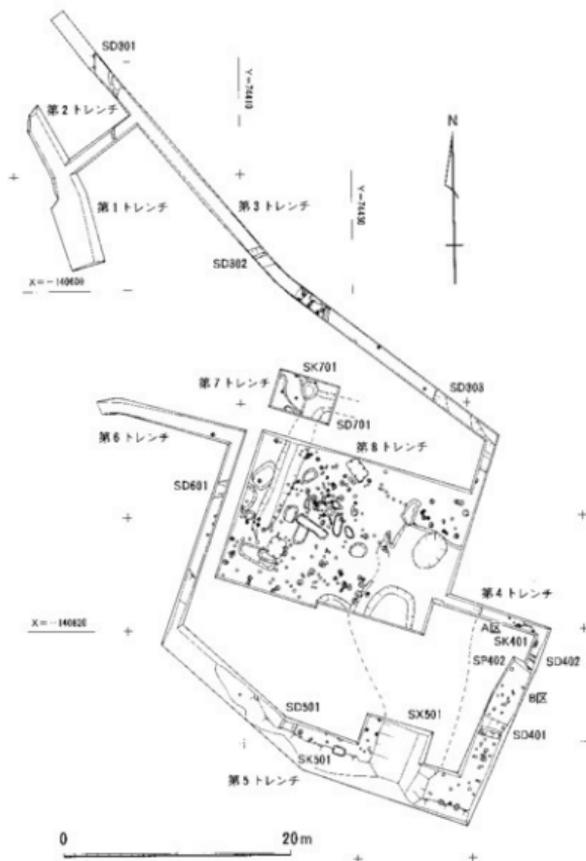


fig. 201
調査区全体図
(中・近世遺構面)

第4トレンチは建造物工事による影響深度が第8トレンチなどに比べ深い
ため、中世遺構面以下をさらに調査したところ縄文時代の遺物包含層お
よび遺構が検出された。

第1遺構面

中世遺構面では溝2条、土坑1基、ピット多数が検出された。ピットは
いずれも建物を構成するには到らない。

SD401

幅1.4m、深さ50cmの東西方向の溝である。北岸は途中で一口傾斜が緩
やかになり、拳大から20cm大の礫を並べるように配している。その性格に
ついては明らかにすることはできなかった。埋土に含まれている遺物から、
13世紀後半に属するものと考えられる。

SD402

幅60cm、深さ15cmの東西方向の溝である。トレンチの幅が僅か55cmに過
ぎなかったが、溝中には多くの遺物が含まれていた。なかでも、土師器の
小皿類は、完形品が多く単純に投棄されたものとは考え難い。その性格に
ついては明らかでないが、一括性の高い遺物であると考えられる。13世紀
後半に属するものと考えられる。

SK401

調査範囲内における最大径1.5m、深さ40cmを測る土坑である。埋土中
の遺物から13世紀後半と考えられる。



fig. 202 SD402遺物出土状況(南から)

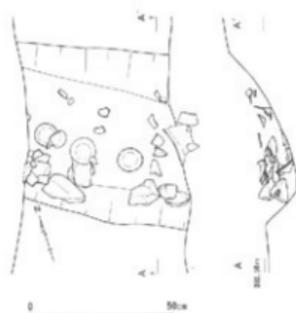


fig. 203 SD402遺物出土状況図

第2遺構面

中世遺構面の黄灰色砂および灰黄色砂中にはササカイト・黒曜石・チ
ャート製の石器や削片が多く含まれていた。それに比して縄文土器の出土
は十数片程度であった。こうした状況は第5トレンチにおいても同様であ
った。今回の調査ではこれらの遺物各々について3次元レベルでの分布状
況の把握が可能となった。

この記録の詳細な分析および検討はまだ十分に行い得ていないが、現在

配石遺構

のところ、大まかな把握ではあるが、第4トレンチの配石遺構の周囲およびその北側付近に分布が濃いということを読み取ることができる。

縄文時代の遺構面については、明確な面として捉えることが困難であったが、第4トレンチにおいて検出された遺構は配石遺構1ヶ所であった。遺構面全体にわたって拳大から人頭大の礫が疎らに分布しており、そのなかには磨り石・叩き石や台石と考えられるものも含まれていた。これらの礫の中で比較的大きめのものが集中し、レベルもほぼ揃っている箇所があり、配石遺構であると認められた。30~40cm大の礫3個を配し、その間に10~20cm大の小さめの礫を8個配している。配石の直下には、一辺70cm、深さ15cmの隅円方形の土坑が伴う。礫・土坑ともに火を受けた痕跡はなく、土坑内に焼土・炭などは認められなかった。また、遺構に伴う遺物も認められなかった。配石のレベルやサヌカイトなどの分布状況から実際の生活面は、検出面よりも若干高い位置であると推定される。

遺物

第5トレンチも含めて先にのべたようにサヌカイト・黒曜石・チャート製の石鏃・刃器・削器や磨り石・叩き石・台石、縄文土器片が出土している。縄文土器すべて包含層からの出土で遺構内から出土したものはない。いずれも遺存状態が悪く磨滅が著しいものもあるが、いく

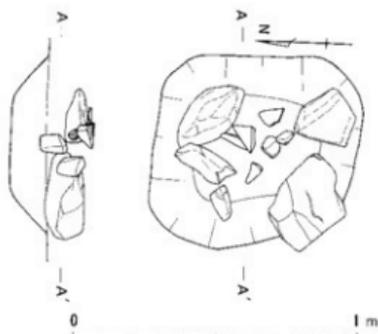


fig. 204 第4トレンチ配石遺構 平面・断面図

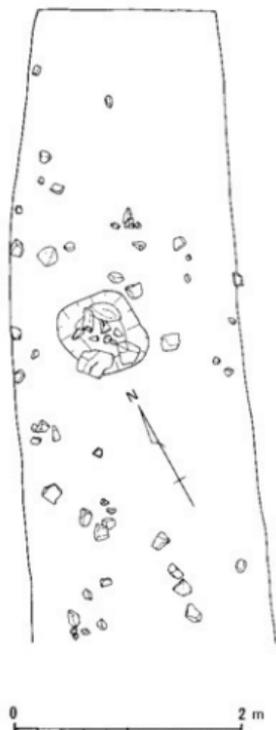


fig. 205 第4トレンチ 縄文時代遺構面平面図

つかの時期にわかれるようである。1は早期末、2～6は中期前半、7は中期中葉にそれぞれ推定される。遺構の年代については断定できないが中期前半から中葉に属するものと考えられる。

火山灰分析

第4トレンチB区中央付近において、火山灰分析のための土壌サンプルの採取を行った。分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰（降灰年代6300y. B. P.）は、黄灰色砂で含有量が最も多いが降灰層準と認定はしがたく、降灰層準に比較的近いと判断された。また、始良Tn火山灰（降灰年代21000～22000y. B. P.）は全分布層準で検出されるが、濃集度は低く降灰層準を認定することは困難であるとのことである。

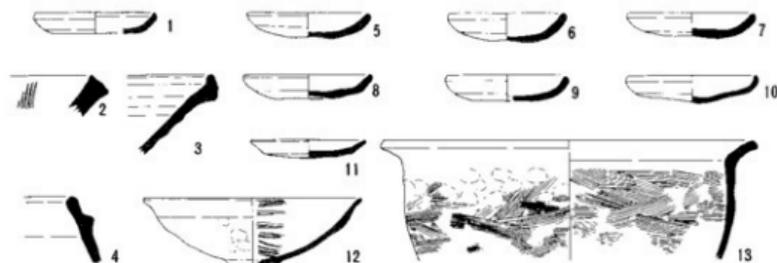


fig. 206 第4トレンチ出土遺物

1～4 : SD401 5～11・13 : SD402 12 : SP402
1・4～5～10・13 : 土師器 2 : 備前 3 : 須恵器
11・12 : 瓦器

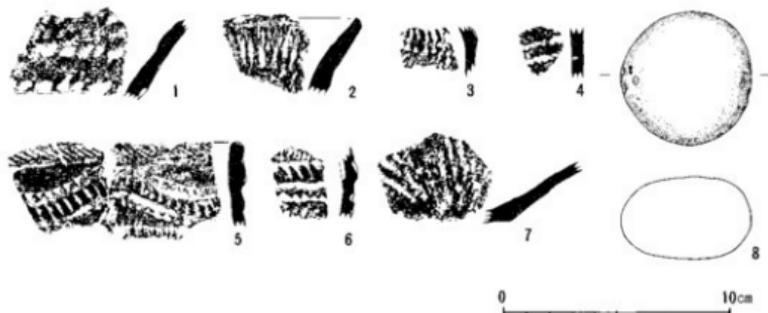


fig. 207 第4・5トレンチ出土縄文土器・磨石

- 第5トレンチ 第5トレンチも第4トレンチ同様、建造物工事による影響深度が第8トレンチなどに比べ深いため中世遺構面以下をさらに調査し、縄文時代の遺物包含層および遺構を検出している。
- 第1遺構面 中世遺構面では、溝1条、土坑1基、落ち込み状遺構1ヵ所、ビット多数が検出された。ビットはいずれも建物を構成するには到らない。
- SD501 幅1.2m、深さ10cmの南北方向の溝である。遺構内からは遺物の出土がなく、遺構の年代は不明である。
- SK501 1m×0.7mで深さ15cmの隅円方形の土坑である。後に述べるが第8トレンチの土坑群と共に、その規模・形状からみて土坑墓の可能性はある。遺構内からの遺物の出土はないが、第8トレンチの土坑群同様、13世紀後半に属するものと考えられる。
- SX501 幅5.2m、深さ60cmの南北方向の流路状の遺構である。遺構の性格は明らかでない。第4トレンチA区西端付近で検出された、西方向に傾斜する落ち込みの肩と、第8トレンチのSX805のそれぞれに繋がるものとみられ、全体として南に傾斜する落ち込みないしは流路であると考えられる。埋土中の遺物から近世に属するものと考えられる。
- 第2遺構面 縄文時代遺構面では、溝状遺構2条、土坑2基、落ち込み状遺構1ヵ所が検出された。幅80cm、深さ10cmの南西から北東方向の溝状の遺構である。遺構内には拳大の石のほか、20cm×40cmの扁平な台石と思われるものが存在する。遺構の性格は明らかでない。
- SD503 検出面において幅60cm、深さ9cmの南北方向の溝状遺構である。北壁の観察から、この遺構の本来の規模は、幅70cm、深さ20cmと推定される。遺構の性格は明らかでない。
- SK502 長径1.9m、短径1.4m、深さ55cmの土坑である。土坑内からは石楯やサヌカイトの剝片が出土している。土坑の底には、20cm大の礫が据えられた状態で検出されている。



fig. 208
第5トレンチ
縄文時代遺物
出土状況
(北西から)

第6トレンチ 中世遺構面で溝1条、ピット4基が検出された。ピットはいずれも建物を構成するには到らない。トレンチ南端付近は南に向かって傾斜しており、流土中から縄文土器片が出土している。

SD601 幅2.2m、深さ20cmの東西方向の溝である。

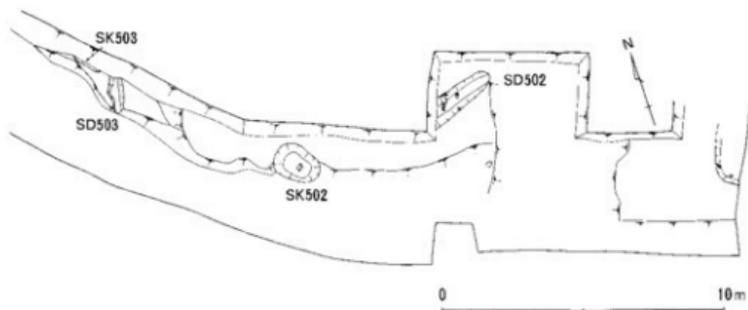


fig. 209 第5トレンチ縄文時代遺構面平面図

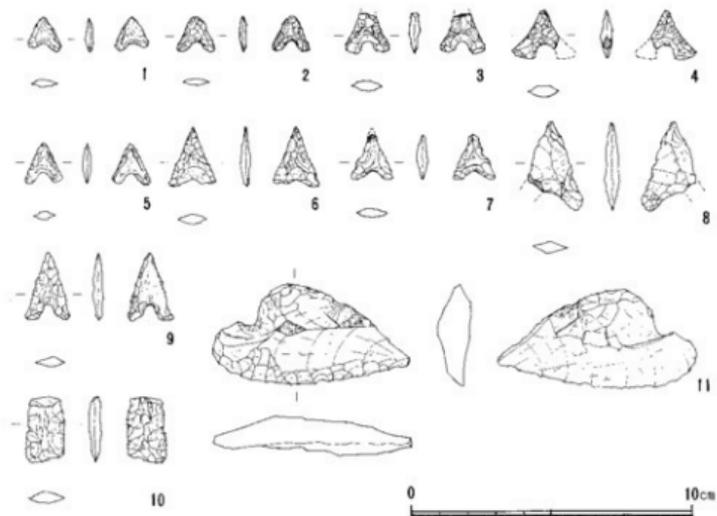


fig. 210 第4・5トレンチ出土石器 1～9：石鏃 10：削器 11：石匙

- 第7トレンチ 中・近世遺構面で溝1条、土坑1基、ピット4基、不定形の落ち込み状遺構1ヵ所が検出された。ピットはいずれも建物を構成するには到らない。
- SK701 径1.5m、深さ40cmの円形の土坑である。土坑中から遺物は出土しなかったが、近世のものとみられる。
- SD701 幅1.8m、深さ5～10cmの南北方向の溝である。溝はトレンチ中央付近で、ほぼ規模を同じくして東方向に流れる溝と、幅60cm、深さ10cmと規模をやや小さくして北方向に流れる溝とに別れる。第8トレンチのSD801に繋がるものとみられる。14世紀後半頃に掘削され、近世まで機能していたものと思われる。
- 第8トレンチ 今回の調査区で、最もまとまった面積のトレンチである。中・近世遺構面で溝1条、土坑23基、ピット多数、その他の遺構5ヵ所が検出された。
- SD801 幅2m、深さ40cmの南北方向の溝である。東岸は段をもって緩く傾斜している。先述のSD701に繋がるものである。
- SK801 長径2.7m、短径1.7m、深さ20cmの楕円形の土坑である。埋土中から土師器鍋が出土している。13世紀後半のものとみられる。
- SK802 長径2.1m、短径1.2m、深さ20cmの方形ぎみの楕円形の土坑である。
- SK803 径80cm、深さ10cmのほぼ円形に近い形の土坑である。埋土中からは須恵器碗、壺などが出土している。13世紀後半のものとみられる。
- SK804 長径1.6m、短径80cm、深さ30cmの楕円形の土坑である。SK805上に穿たれ、その北東部に収まっている。

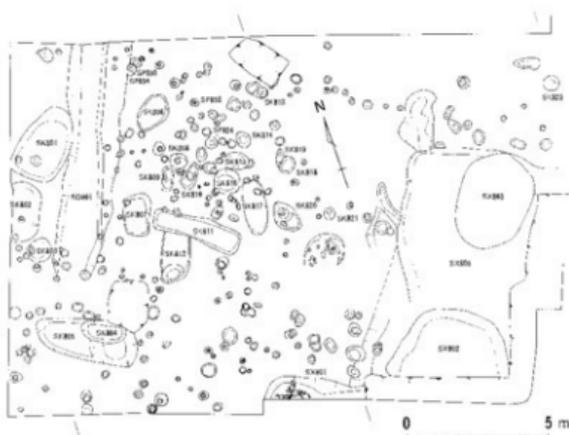


fig. 211
第8トレンチ中世・
近世遺構面平面図

- S K 805 長径3.6m、短径1.5m、深さ30cmのやや歪んだ隅円方形の土坑である。土坑内東半は径1.6m、深さ50cmに深く掘り込まれている。
- S K 806 長径1.4m、短径90cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。
- S K 807 1.5m×0.9mで、深さ45cmの方形の土坑である。その規模および形状から土坑墓の可能性はある。
- S K 808 80cm×60cmで、深さ30cmの瓢箪形の土坑である。土坑中に炭を含んでおり、北側の広い方の埋土中から「□□通宝」1枚が出土している。
- S K 809 80cm×40cmで、深さ40cmの方形の土坑である。土坑中に炭を含んでおり、拳大の石3個が含まれていた。
- S K 810 長径1m、短径40cm、深さ20cmの楕円形の土坑である。
- S K 811 3.1m×90cmで、深さ50cmの方形の土坑である。土坑中に炭を含んでおり、その規模および形状から土坑墓の可能性はある。
- S K 812 1.8m×1mで、深さ20cmの方形の土坑である。土坑底付近に炭を含んでおり、拳大から50cm大の礫14個が無造作に置かれている。南端は径25cm、深さ10cmに深く掘り込まれている。その規模および形状から土坑墓の可能性はある。
- S K 813 長径80cm、短径40cm、深さ20cmの楕円形の土坑である。埋土中から土師器皿、須恵器碗などが出土している。13世紀後半に属するものとみられる。
- S K 814 径50cm、深さ15cmの円形の土坑である。
- S K 815 長径90cm、短径60cm、深さ45cmの楕円形の土坑である。土坑の下半に炭を含んでいる。土坑上層付近から瀬戸・美濃製の茶入ないし水滴とみられる小壺が出土している。その形状から土坑墓の可能性はある。



fig. 212
第8トレンチ
中世遺構面全景
(北西から)

- SK 816 径90cm、深さ90cmの円形の土坑である。土坑内全体に炭を含んでいる。
- SK 817 長径2m、短径80cm、深さは削平が著しく、僅かに5cmの楕円形の土坑である。土坑全体に炭を含んでおり、底面は焼けている状況を示す。その規模および形状から火葬墓の可能性はある。
- SK 818 径60cm、深さ15cmの円形の土坑である。
- SK 819 長径48cm、短径18cm、深さ7cmの楕円形の土坑である。土坑内一杯に土師器の皿を重ねて並べるようにして置かれてあった。皿は27枚（小皿が24枚、それよりやや大きめの皿3枚）で1枚を除き、残りはすべて内面を表に向けていた。14世紀後半のものともみられる。
- SK 820 長径1.2m、短径80cm、深さ30cmのやや歪んだ楕円形の土坑である。土坑の北側は少し深く掘りこまれている。

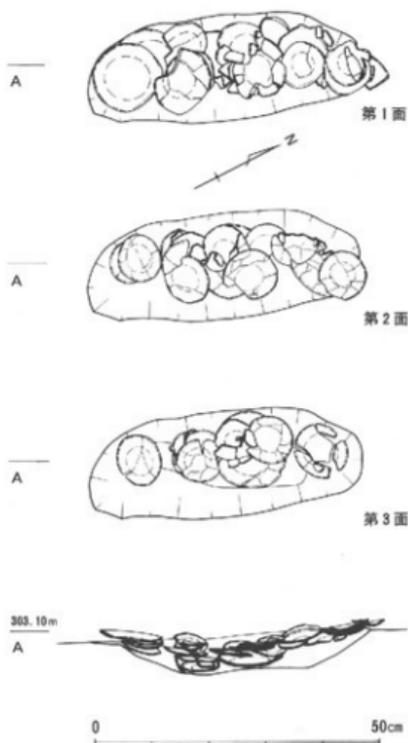


fig. 213 SK819遺物出土状況図



fig. 214 SK819遺物出土状況（第1面・北東から）



fig. 215 SK819遺物出土状況（第3面・北東から）

- S K 821 径40cm、深さ35cmの円形の埋土である。埋土に若干の炭を含んでいる。
- S K 822 径1.4m、深さ50cmの円形の土坑である。拳大から50cm大の礫が入っている。出土した遺物から近世に属するものとみられる。
- S K 823 径60cm、深さ25cmを測る円形の土坑である。
- S X 801 3.7m以上×1m以上、深さ50cmを測る落ち込み状の遺構である。拳大から40cm大の礫が入っている。その性格については不明である。出土した遺物から13世紀のものともみられる。
- S X 802 S X 805の下層から検出されたもので、推定径4.5m、深さ30cmを測る円に近い形になると思われる落ち込み状の遺構である。出土した遺物から14世紀のものともみられる。
- S X 803 長径3.5m、短径2.5mの楕円形の落ち込み状の遺構である。出土した遺物から近世に属するものとみられる。
- S X 804 明確な遺構は認められなかったが、後述のS X 805の西岸肩部に土師器の鍋が伏せた状態で置かれていた。鍋の内面には墨書が認められる。中央に梵字「ウーン」を書き、その上下左右に「卍」をそれぞれ1字ずつ配する。そして、それらを取り囲んで上下左右に角が来るように二重の八角形を描いている。また、底中央付近に焼成後の穿孔が認められる。時期は17世紀前半のものともみられる。

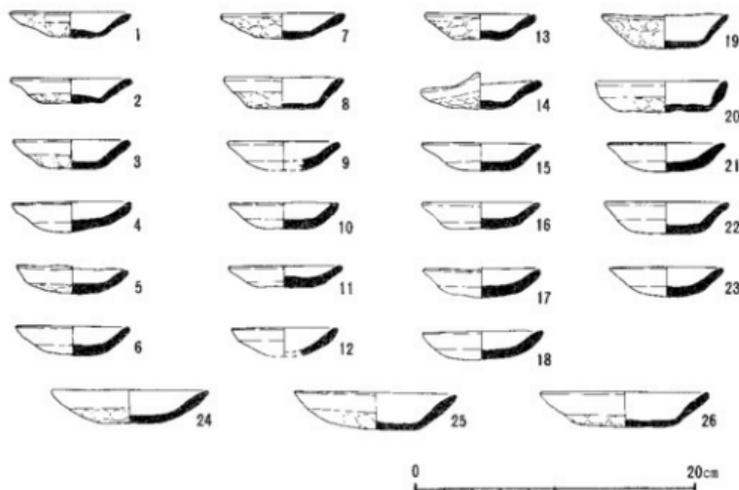


fig. 216 SK819出土遺物

S X 805 幅9.5m、深さ20～30cmの南北方向の流路状の遺構である。遺構の性格は明らかでない。第4トレンチA区西端付近で検出された西方向に傾斜する落ち込みの肩と、第5トレンチのS X 501のそれぞれに繋がるものとみられ、全体として南に傾斜する落ち込みないしは流路であると考えられる。

ビット 第8トレンチでは多くのビットが検出されたが、明確に建物になるものはないが、今後検討を加える必要がある。

なお、ビット中で特殊な性格のものがいくつか検出された。

S P 850 径18cm、深さ6cmのビットである。かなり削平を受けているものと思われる。ビット内には土師器皿2枚が重ねて埋納されていた。柱穴内への埋納であるとなれば、立柱ないし抜柱のまつりに伴うものであると考えられる。時期は14世紀後半のものと思われる。

S P 854 長径45cm、短径35cm、深さ13cmの楕円形のビットである。ビット内には甕が据えられていたようであるが、後世の削平により上3分の2が欠損している。わずかにその際にビット内に落ちた口縁部の一部より全体を窺い知ることができる。甕の底に銭3枚が密着して出土している。1枚は「天徳通宝」（初鑄年1017～22年）で残りの2枚は遺存状態が悪く銭種の判別は不能であった。

S P 858 径18cm、深さ5cmのビットであるが、削平を受けているものと思われる。ビット内から「治平元宝」（初鑄年1064年）が出土している。S P 850同様、柱穴内への埋納であるとなれば、立柱ないし抜柱のまつりに伴うものと考えられる。

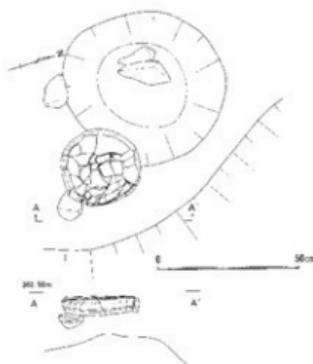


fig. 217 SX804遺物出土状況図

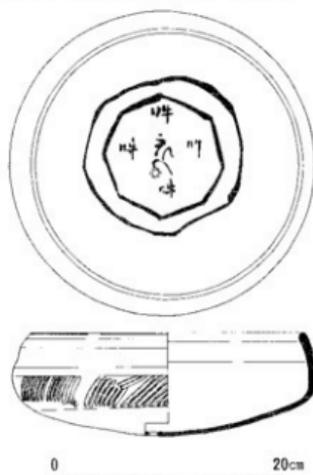


fig. 218 SX804出土遺物

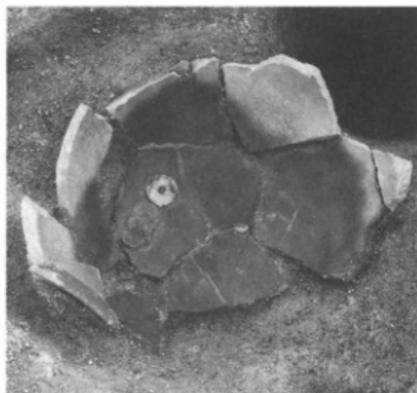


fig. 219 SP854遺物出土状況 (北から)

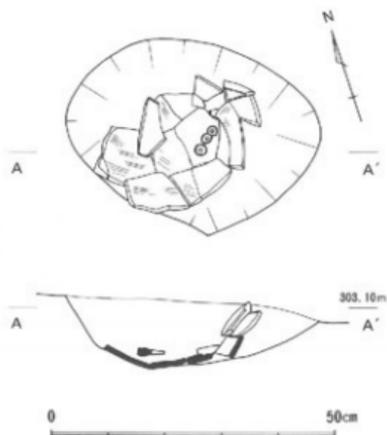


fig. 220 SP854遺物出土状況図

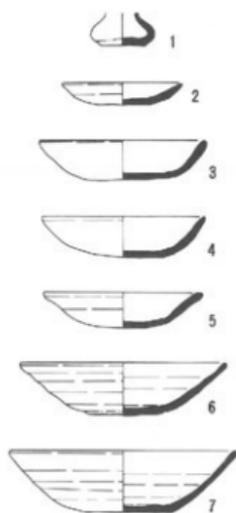
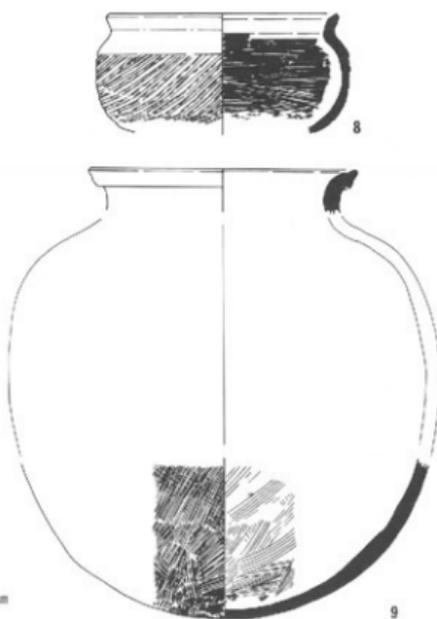


fig. 221 第8トレンチ遺構出土遺物

1 : SK815 2 : SP824 3・4 : SP850 5・6 : SK813 7 : SK803 8 : SK801 9 : SP854
 1 : 瀬戸・美濃 2~5・8 : 土師器 6・7・9 : 須恵器



3. まとめ

(1)第1次調査

第1次調査では数次にわたる西小部川の洪水による堆積層と、それを順次水田として使用した跡および西小部川の旧流路が確認された。この谷部付近は16世紀頃から水田として利用されはじめたと考えられる。

遺物の中で灰色砂層から出土した土師質の播鉢は、いわゆる和泉型播鉢と称されるもので16世紀頃に属するとみられるものである。

(2)第2次調査

枚数にばらつきがあったが、概ね縄文時代、13世紀後半、14世紀後半、近世初頭の4時期の遺構を確認することができた。

縄文時代

縄文時代の遺構としては、配石遺構1ヵ所、土坑2基、溝状遺構2条などを検出している。土器の出土量は少ないが、一方、ササカイト・チャート・黒曜石製の石器類や叩き石、磨り石などとともに、ササカイト・チャート・黒曜石の剥片が多量に散布している。殊に製品・剥片ともに配石遺構周辺において密集して出土している。検出された遺構の時期は決めたいが、出土した土器から中期前半から中葉と推定される。

13世紀後半

この時期の遺構は特に第8トレンチにみられる土坑群を中心とするものである。その多くに炭が含まれ、SK819のように底面が焼けているものもある。その規模・形状からも土坑墓や火葬墓であるとみられ、一帯は墓地として利用されていたものと考えられよう。

14世紀後半

14世紀後半の遺構の大部分はピットである。ただし、先述のように明確に建物を構成するような配列を見出すことはできない。ただ、ピットのなかには建物の立柱や抜柱のまつりに係わると考えられる状態で遺物の出土があり、住居地としてこの地を利用していたものと考えられる。SK819についてはピット類を伴わず、建物にかかわるものとは考えがたく、土地利用にあたっての地鎮めのまつりが行われた跡であると考えられよう。

近世

近世には、第1次調査の結果とあわせても一帯は水田として利用されたものと考えられる。中世末期にSX805およびSD501が掘削され、おそらく溝として利用されていたものであろう。また、その埋没にあわせるように、なんらかの呪いに用いられた土器が岸辺に置かれていた。呪いの内容については明らかでない。

これまで、小部周辺では明確な遺跡の存在があきらかでなかった。こうしたなかで今回の調査では豊富な遺構・遺物が検出され、わずかではあるがこの地の過去の生活の一端を垣間見ることができた。

にしわきやま 20. 西脇山遺跡

1. はじめに

当該地は、昭和55年に山の街ニュータウン開発に伴う分布調査及び試掘調査を実施した第5地点にあたる。このとき設定した第1～3トレンチの内、第1トレンチの西端近くから中世火葬墓と思われるピットが検出された。また第2トレンチから2段の石組遺構が、第3トレンチから須恵器・土師器を含む土層が確認された。第2次調査は平成元年6月29日～7月12日まで行った。この調査は前回の試掘調査が全面に実施できていなかったため当該地の開発に先立って、再度埋蔵文化財の有無とその範囲の確定や性格の把握のため実施した。

今回は、昭和55年および平成元年度に実施したトレンチ（1トレンチ～10トレンチ）の調査で検出された遺構・遺物などの性格をより具体的に把握するために、発掘調査を行った。

A～B平坦面の道路部分については、全面的な調査を行った。C平坦面については、200㎡弱の調査区を設定して調査を行った。前者を第Ⅰ地区、後者を第Ⅱ地区と仮称する。

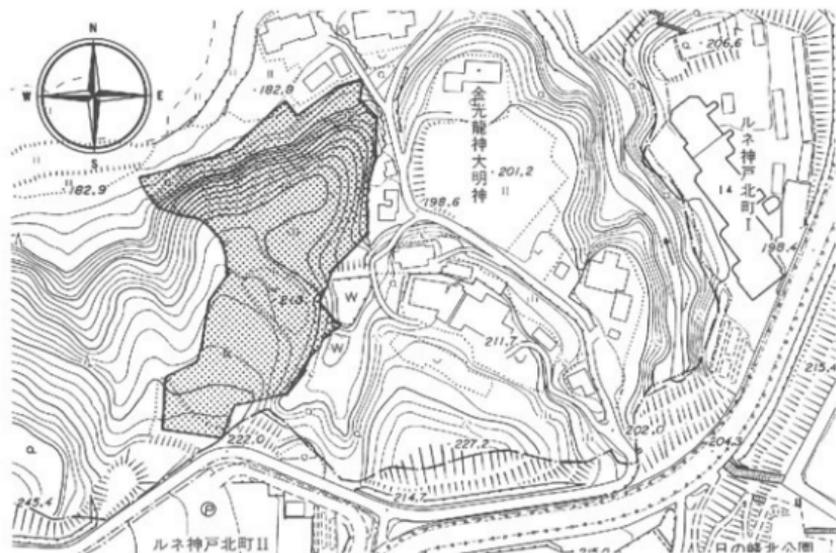


fig. 222 調査地位位置図 S = 1 : 2500

2. 調査の概要 第I地区は、堆積土層などから南部・中部・北部に分けることができる。

第I地区 南部は表土下に遺物包含層を検出することができなかったが、その形から中世に造られたと考えられる集石遺構が検出された（SX01）。

SX01 径0.7～0.8mの土坑内に拳大から人頭大の石が落ち込み、その周囲にも石が集中していた。出土遺物はなかった。

ST01 中部で検出した炭粒子と径10cm以下の円礫が覆土中に含まれる深さ約10cmの不整形の落ち込みである。その南部分に一辺20cmを越える比較的大型の円礫・亜角礫が集中する部分がある。この部分はさらに深く径約50cm、深さ約30cmの土坑となる。土坑上部の礫を除去すると、下部から礫に混じって土師器鍋1個体分が出土した。この土器は外面に煤、底部内面には炭化物が付着する。骨などは遺存していないが類例から火葬骨を納めた蔵骨器であると思われる。この年代は土器から室町時代と考えられる。

SK01 長辺80cm、短辺75cm、深さ約10cmの方形を呈する土坑である。覆土には炭粒子が微量含まれる。遺物の出土はなかった。従って、年代も明確にはしなかった。

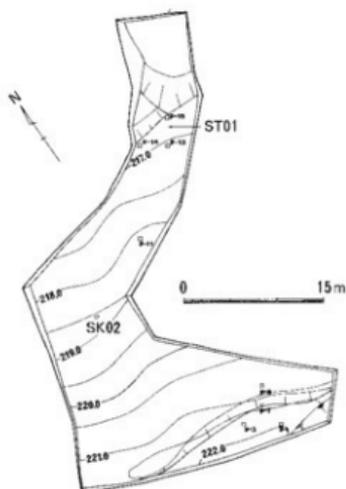


fig. 223 第I地区平面図



fig. 224 調査区位置図 S = 1 : 1500

SK02

長辺60cm、短辺50cm、深さ約20cmの土坑で、炭・焼土とともにサヌカイトの剥片が出土した。他に遺物がなく時期は明らかでない。

柱穴群

第I地区の中央付近にピット7基が集中する部分がある。すべて径約20cm程度の平面円形を呈するものであるが、掘立柱建物址としては調査区の狭小さもあってまとめられなかった。遺物も検出されなかった。



fig. 225
第I地区全景
(南から)



fig. 226 第I地区SK01平面・断面図



fig. 227 第I地区遺構平面図

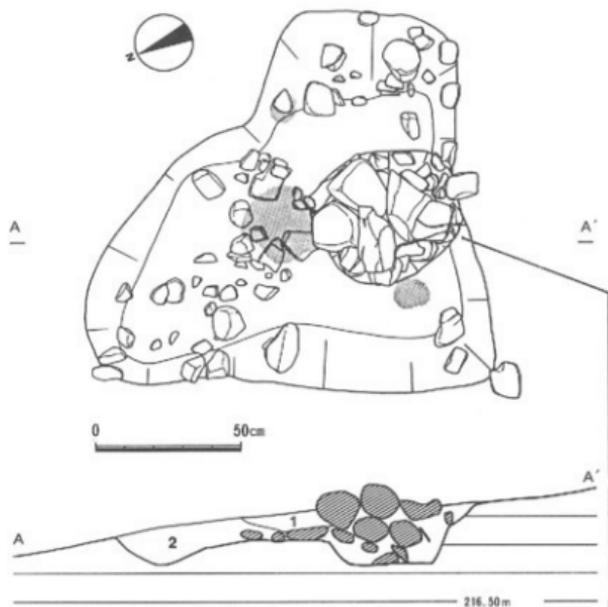


fig. 228 第I地区ST01平面図（網線は炭粒子集中部分）



fig. 229 ST01出土炭骨器 S=1:4

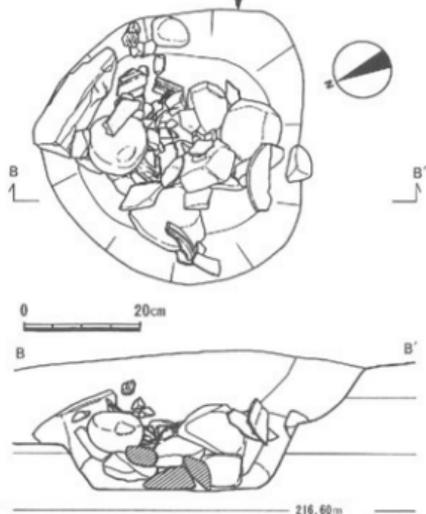


fig. 230 ST01遺物・確認状況

第Ⅰ地区の北部はB平坦面に位置するが、この部分は既に溜池築造時(近世以降)に削平されており、遺構は全く検出されなかった。

また中部では、これらの遺構の上に遺物を含む土層が堆積しており、中世の土師器、須恵器、輸入青磁や江戸時代の寛永通宝も出土している。

これよりみてA平坦面には、中世～近世にかけての遺構・遺物が調査を行った範囲以外にも広がっていることが、十分考えられる。さらにB平坦面についても、その南半は溜池により遺構は存在しないものと推定されるが、北半については遺構の残存は次に述べる第Ⅱ地区との関係からみても、おおいにあり得るものと考えられる。

第Ⅱ地区

この地区は平成元年度のトレンチ調査(6トレンチ)で、建物の礎石や落差約1mの段落ちが検出されたところで、これを拡張したものである。

調査の結果、C平坦面東側に段落ちの続きが現れ、段の東側は幅3m以上、おそらく10m以上と思われる平坦面が存在するものと思われる。この平坦面には炭・焼土が入った柱穴や土坑が検出され、平坦面の直上にも炭・遺物を含む土層が堆積していた。

段の西側は広い平坦面で、ここからも土坑や柱穴が検出された。遺物は14世紀代を中心とする土師器片が出土した。

なお、第Ⅱ地区は埋め戻しを行っている。

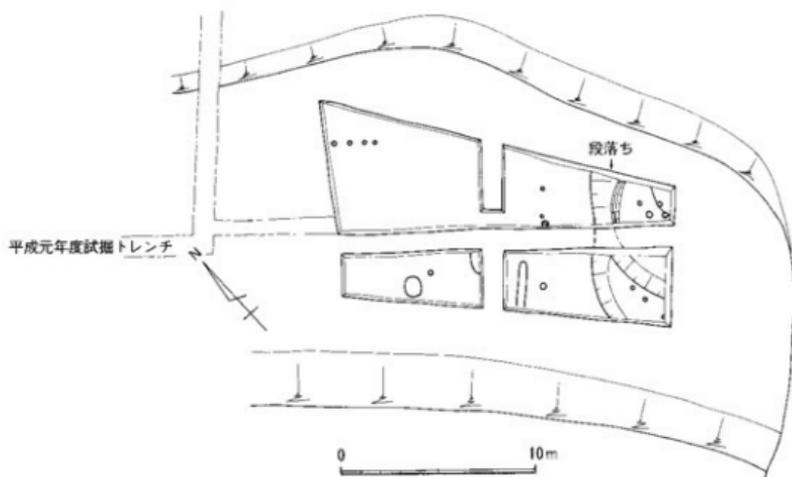


fig. 231 第Ⅱ地区平面図

3. まとめ

今回と過去2回の調査の結果から、この北へ延びる低い丘陵上にはほぼ全面にわたり14世紀代と思われる中世山城が存在する可能性があり、南辺部にはこれと有機的な関係が想定される墓地在り占拠していたことが明確となった。



fig. 232
第II地区全景
(西から)

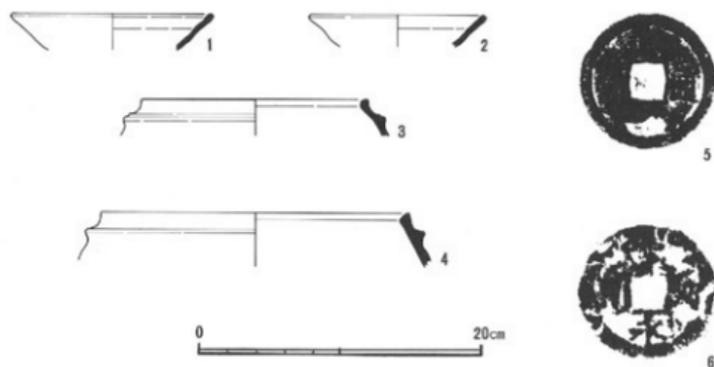


fig. 233 西船山遺跡出土遺物 5・6は原寸大

やまだはらの 21. 山田原野遺跡

1. はじめに

山田原野遺跡は、加古川の支流である志染川の上流域に位置する。

当地域における埋蔵文化財の調査は、未だ十分な調査が行われておらず、遺跡の実態については明確でない。しかし、当地域の東側丘陵部には、中世山城址と考えられる西脇山遺跡が存在し、また、当地域よりやや西側下流域には、弥生時代～中世の複合遺跡である山田・中遺跡が存在することもある。遺跡の存在する可能性の高い地域であると考えられる。

今回の調査は、国道428号線改良工事に伴うもので、今年度の10～11月に試掘調査を実施し、中世前期～近世・近代に至るまでの水田層、遺物等が確認された。そのため調査を実施したが、調査の結果、試掘調査と同様に中世～近世・近代の水田層、遺物が確認された（第2次調査）。

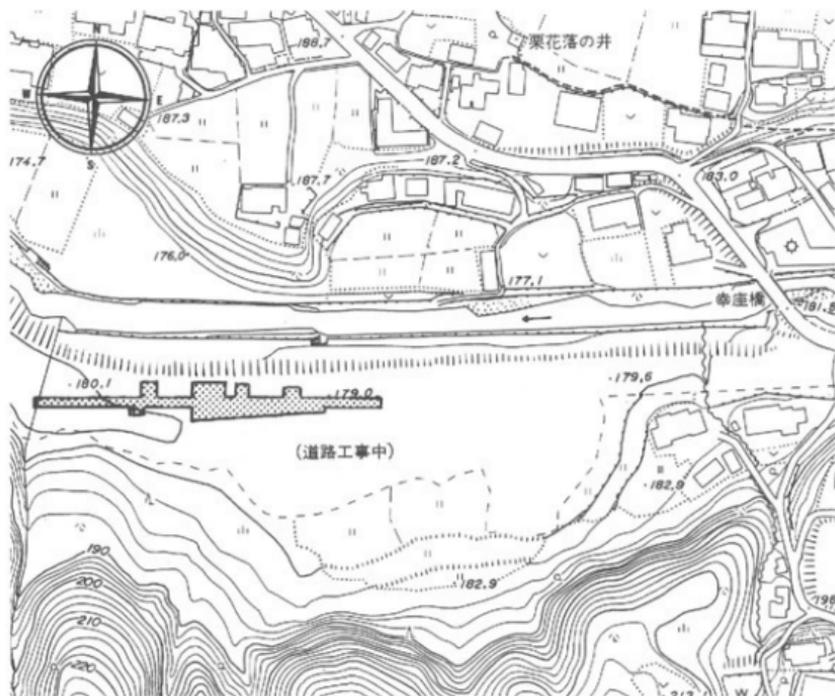


fig. 234 調査地位豊図 S=1:2500

2. 調査の概要 試掘調査によって確認された埋蔵文化財の存在範囲内に水田層の枚数や各水田層の時期を確認する目的で、調査対象地内に幅約2mのトレンチを設定し、必要箇所を拡張するという方法で調査を進めた。また、トレンチがかなりの長距離に及ぶため、調査の進行あるいは遺物整理の便宜上、調査地をA～F区に区分した。

今回の調査においては7層に及ぶ水田層と中世～近世・近代の遺物が検出された。なお、水田層の名称は上層より第1水田層～第7水田層とする。

第1水田層 調査区域のほぼ全域に存在する水田層である。

～第3水田層 第1水田層は現代の耕土で、第2・3水田層は出土遺物から、それぞれ近代、近世の水田層と考えられる。水田区画は現代の水田畦畔の下に畦畔が認められるため、現代の水田とほぼ同じと考えられる。

第4水田層 A区以外のほぼ全域に存在する水田層であるが、B・C区においては削平を受けていると考えられ、層厚約5cm程度しか存在しない。

～第5水田層 いずれの水田層も出土遺物から14～15世紀ごろのものと考えられる。水田区画は不明瞭ではあるが、現代の水田畦畔の下に畦畔が認められるため、現代の水田とほぼ同じと考えられる。

第6水田層 A区以外のほぼ全域に存在する水田層であるが、削平が著しく、B・C区では一部にしか存在しない。

時期は出土遺物から13世紀ごろのものと考えられる。また、水田区画は上層水田層と同様に現代の水田とほぼ同じと考えられる。



fig. 235
調査地遺景
(西から)

第7水田層

A区以外のほぼ全域に存在する水田層である。

水田区画が上層水田層とは若干異なっており、B・C区とその拡張部においてその区画と考えられる段落ちが確認された。D～F区においては段落ちや畦畔が不明瞭で、区画を確認することができなかった。この水田層の時期は出土遺物から12世紀ごろのものと考えられる。また、B区において検出された薄状遺構（SD01）は、埋土が水田層と同様のため、水田の排水溝ではないかと考えられ、当時の水田形態の一端が窺える。

第7水田層下層

A区は第3水田層を除去した時点で、地山層である砂礫層が現れるが、B～F区では第7水田層下層で、地山層である砂礫層・細砂層が確認された。これらの砂礫層・細砂層は志染川の氾濫原の堆積物と考えられる。

D・E区の同層上面で、落ち込み状遺構（SX01）、土坑状遺構（SK01）などが検出されたが、出土遺物はなく、その時期や性格は不明である。

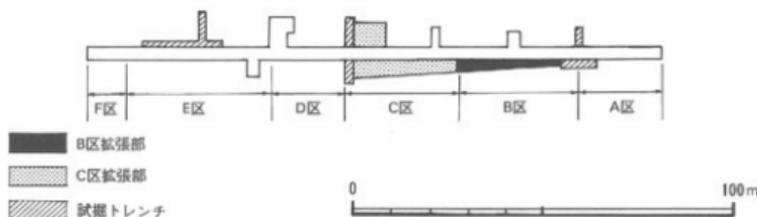


fig. 236 トレンチ地区区画

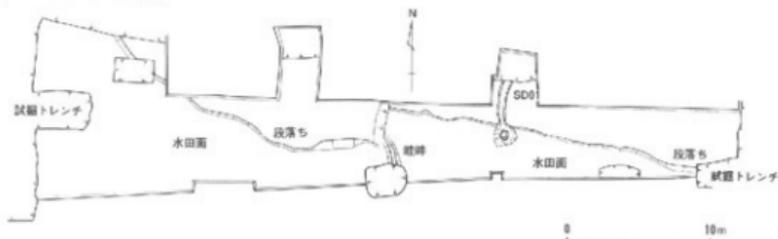


fig. 237 C・D区および拡張部第7水田面平面図

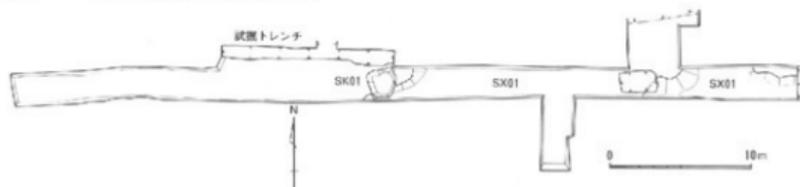


fig. 238 D・E・F区第7水田層下層平面図

3. まとめ

今回の調査では中世前期～近世・近代の水田層と遺物が確認された。

今回の調査区域内では、当地域における水田経営の初現は12世紀ごろであると考えられ、特に、B区の西半部からE区の東半部にかけての地域は、地山層が比較的湧水などが得やすい細砂層であることから、水利の比較的良好な地域から徐々に水田区域を拡げていったと考えられる。そして、13世紀ごろには現代の水田区画に近いような区画が設定され、さらに時代が進むにつれて水田区域の拡張を行い、現代の水田区域にいたったように考えられる。

以上のことから、今回の調査では、当地域における水田の初現から現代にいたるまでの水田区画の変遷過程を、明らかにすることができた。しかしながら、当地域における集落遺跡の実態についてはほとんどわかっていないのが現状である。当地域を含めた山田町一帯は、中世に山田庄と呼ばれた荘園が設置された地域であることから、今回の調査で得られた成果はこれらの荘園との関係を考察していくうえで、貴重な資料となるものと考えられる。

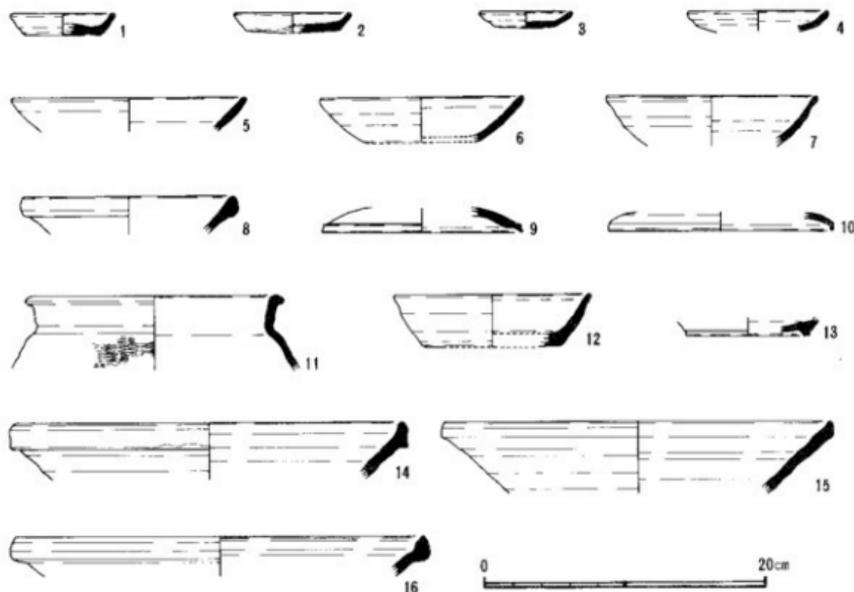


fig. 239 山田原野遺跡出土遺物

22. 神田遺跡^{こうだ}

1. はじめに 神田遺跡は昭和58・59年度に計画された園場整備事業に伴う試掘調査により存在が確認され、その後の調査によって主に鎌倉時代から南北朝時代にかけての遺構、遺物が発見された。

今回の調査は、平成2年4月に実施した試掘調査の結果に基づき埋蔵文化財が存在し、かつ設計上これに影響がある部分について調査を実施した。

2. 調査の概要 調査地付近は、丹生山系の北に位置する山深い地帯で、谷水田と棚田が開かれたなかに民家が散在している。

調査区は、ゆるい斜面を利用して築かれた園場の上下二枚にわたるもので標高215～217mである。調査の便宜上それぞれA・B区とした。



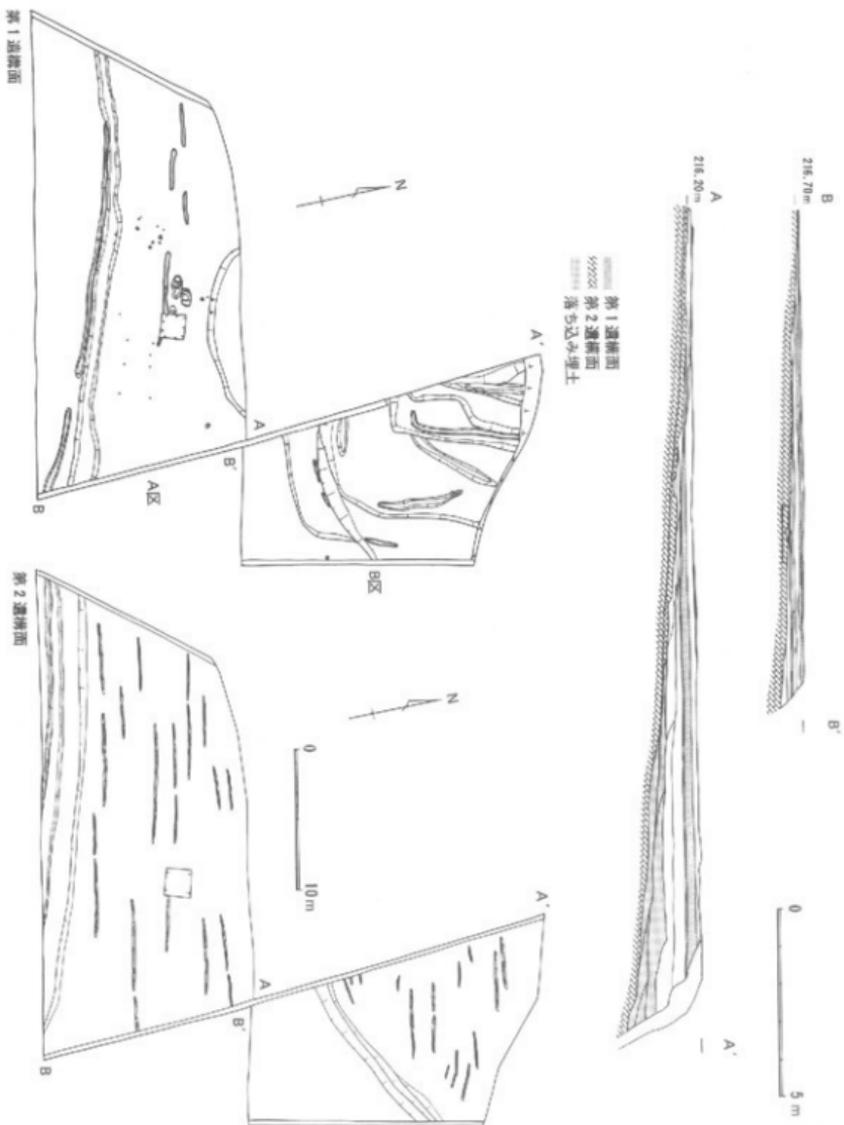
fig.240 調査地立置図 S=1:5000

- (i)A 区 南辺32m、北辺25m、幅14mの台形のトレンチである。
- 基本層序は南部では、耕土、床土、地山面となり、この北側では、耕土、床土、遺物包含層が2～6層あり地山面は南部に比べ低くなっている。
- いずれの層においても、耕作痕らしきものは観察されたが、ある程度の広がりがあり、遺構面として確認できたのは2面であった。
- 第1遺構面 床土直下でみられる黄灰色粘質土に畦状遺構1本、溝1条を検出した。ほかに、東西方向の無数の耕作痕がみられた。
- 畦状遺構 調査区の南端で幅1～1.2m、高さ2～6cmの東西方向の畦状遺構を検出した。南側に溝1を伴う。
- 溝1 幅1mで南側に一段深くなる溝で、畦状遺構に沿って東から西へ流れる。
- 第2遺構面 すべての包含層を除去後、地山面において、溝7条、土坑3基、ビット22基と圃場（棚田）の区画であると思われる段の削り出しが検出された。
- 溝1・2 すべての東西方向のものである。全般に削平を受けており、深さ数cm程度しか残存しない。うち溝1は幅1～1.8m、平らな底で地山の細かいブロックの混じった粘土の堆積がみられた。また、溝2は溝1を切って流れるもので一部削平のため途切れている。
- 土坑 土坑1は、長さ170cm、幅60cmの隅丸の長方形である。底面は凹凸が激しく深さ数～30cmである。土坑2も長さ120cm、幅60cmの隅円の長方形である。土坑の断面は、逆漏斗形で中央部の深さ10cmである。
- ビット 径5～10cm、深さ数～15cm程度のもので、斜め方向のものもあり耕作時使用された枕の跡であると思われる。



fig. 241
A区第1遺構
面検出状況
(東から)

Fig. 242 A-B区平面・断面図



- 圃場遺構** 調査区内で、溝1・2および南端の弧状の落ち込みによって区画されるもので計3枚分が検出された。
- (2) **B区** A区より約1m低い北側の圃場に北辺10m、南辺18mの台形のトレンチを設定した。
- 基本層序は、南東部で床土直下にみられる地山面が、北西に向かって徐々に下がっていき、この間に旧耕土状の包含層が1～4層入り込むものである。
- このトレンチにおいてもA区同様、各層上面において耕作痕がみられたものの、遺構面として検出できたのは2面であった。
- 第1遺構面** A区と同じ黄灰色粘質土をベースとして畦の残痕と思われるもの1本と東西方向の耕作痕を検出した。
- 畦状遺構** トレンチを北西から南東に横切る段状の落ちで、部分的に粘土の堆積がみられる。
- 第2遺構面** 地山面において溝8条、ピット2基、落ち込み1および圃場遺構の区画を検出した。
- 溝** 主として圃場遺構の区画に伴うもので幅30～60cm、深さ2～10cmで、高い所ほど削平を受けて残りが悪い。
- ピット** いずれも径20～30cm、深さ10cmのピットである。
- 落ち込み** 北西隅にみられる谷筋状の落ち込みで、堆積の状況からみて圃場造成時に、いっきに埋められたようである。
- 圃場遺構** 地山の傾斜に沿うように、L字状に削りだされた区画が5枚分みられた。段差は、それぞれ10cm前後である。



fig. 243
A区第2遺構面全景
(東から)

(9)出土遺物

総量で容積14ℓのコンテナに10箱あまりの遺物が出土した。

遺構埋土からは遺物が出土したがいずれも細片で、図化したものはほとんど包含層出土のものである。1～5の須恵器小皿は糸切りの底部をもつ、12・13は須恵器の鉢である。6は瓦器碗、7は土師器碗、8は白磁皿である。1～8の時期は概ね13世紀後半～14世紀である9～11は施釉陶器で、11はA区溝1出土のもので、江戸時代後期の瀬戸美濃製の碗のようである。14～16は鉄製品で、14は用途不明品でU字状の部分は断面四角である。15・16は断面四角形の釘である。17は「開元通宝」である。また18～21は石器で、18・19はササカイト製の石匙、20はめのう質の削器、21はササカイト製の石鏃である。いずれも表面は白っぽく風化している。同じような、石鏃の破片が1点出土している。このほかササカイトの剝片等が若干見つかった。時期は、縄文時代後期以降のものと思われる。

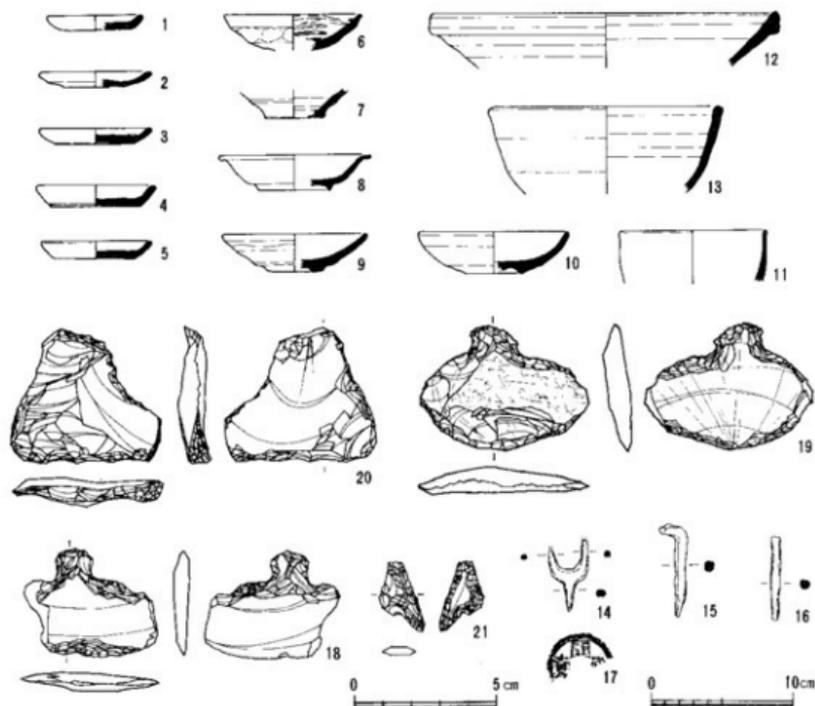


fig. 244 神田遺跡出土遺物 石器S=1:2 開元通宝S=1:1 その他S=1:4

3. まとめ

調査区は、北向きの斜面に位置しているが、この地形を利用しながら一段一段水平に削って水田化していくという過程が、13,4世紀から連続と続けられてきたことが調査によって明らかにされた。このことが遺物包含層や遺構を希薄なものにしてしまったと考えられる。

また縄文時代の石器の出土も注目に値する。出土状況からみて、流れて堆積したものと考えられ、今回の調査地点より高い尾根上に遺構が存在しているものと思われる。



fig. 245
調査区全景
(南西から)



fig. 246
B区全景

23. 屏風遺跡

1. はじめに

北区八多町屏風地区は、武庫川の支流八多川と加古川の支流屏風川がつくる分水界に位置し、山田・衝原山塊と淡河山塊が接する鞍部を占地している。また、当地域は摂津国有馬郡と播磨国美囊郡との国境とされている。

今回調査を実施した地点は、屏風川の右岸、現在の県道三木・三田線が通る尾根の南斜面である。調査地点の現況は、斜面につくられた棚田で、中腹につくられているため比較的広い耕作面の水田である。

この屏風地区の東隣の附物地区の八多川上流には鎌倉時代創建の奥蔵寺があったと文献上知られ、昭和57年墓園造成に先立ち緊急発掘調査を実施した結果、建物基壇の一部などが検出されている。この奥蔵寺は羽柴秀吉の三木攻めの際に焼き打ちをうけ閑却するまで、僧兵を擁し相当な勢力を保持したものと伝えられ、その周辺の地域にも関連する集落の存在が予想された。平成2年8月、この奥蔵寺の位置する谷の入り口にある八多中学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査では中世集落址が検出され、奥蔵寺関連集落の存在を裏付ける資料を得ている。従って、今回の屏風地区での調査地点もいわゆる三木街道に接していることなどから、中世集落が立地しえたものと予想された。

平成2年5月に屏風川右岸の一部について試掘調査を実施した結果、屏風川右岸斜面中腹部の棚田で遺物包含層と遺構の広がりを確認した。



fig. 247 調査地位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要 重機械により現況水田の耕土・床土を除去した結果、調査地の南西半に旧耕土層が広がっていることが判明した。さらにこの18世紀前後の遺物を含む旧耕土層を除去すると、北東半では地山層が、南西半には黒灰色砂質土層をベースにした斜面に、6条の平行して走る畝溝状の遺構を確認した。この黒灰色砂質土層内からは若干の陶磁器片が出土しているほかは、茶木と思われる木の根がみられ、一時期茶畑として利用されていたと考えられる。この近世畑作土を除去すると、調査区南半に整地層と考えられる褐色土が盛られて、調査区全体がもとの自然地形に沿って南西に緩やかに傾斜する平坦面となる。この平坦面において、掘立柱建物址1棟、木棺墓1基、土坑6ヵ所を検出した。

掘立柱建物址

調査区中央で確認した掘立柱建物址である。北側では地山である黄褐色粘質土を掘り込んだ状態で検出したが、南側の妻柱と両隅の柱は整地層上面で検出した。梁行2間(5.0m)、桁行3間(6.0m)の規模の南北棟建物である。柱間距離は、北側梁行で2.5m等間、南側梁行で西側2.7m、東側2.3mと東によっている。桁行の柱間距離は2.0m等間を計測する。

建物の方向は桁行でN48°Wを計測する。北側梁行の柱穴を除いて、柱の抜き取りの痕跡が明瞭である。柱穴は直径27cmの円形で、深さは20~30cmを残している。

木棺墓址

掘立柱建物址北側の段丘崖際に検出した木棺墓址である。長径2.50m、短径1.45m、深さ0.25mの長楕円形の墓坑を掘り、墓坑底に砂質土を敷いてやや西よりに組み合わせ式の箱形木棺を納めている。棺部の状況は比較的明瞭に棺材の木質が灰色粘土として置き換えられて残存し、復元は可能であった。復元される箱形木棺は、内法で長さ1.35m、幅0.50~0.35m、深さ0.15m以上で、厚さ6cm前後の底板に、厚さ5~8cmの側板を合わせ最後に小口板を組み合わせる構造をとっている。この小口板は、西側の小

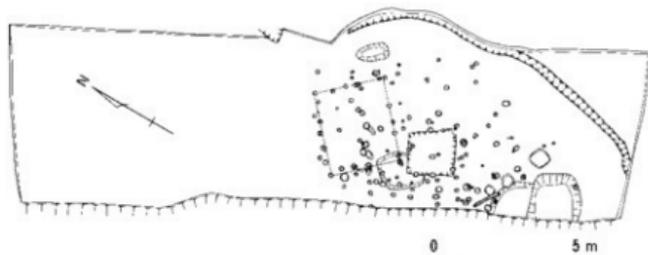


fig. 248 調査区平面図

口が幅55cm、厚さ7cm、東側の小口が幅75cm、厚さ10cmである。木棺内法もそれに従って東側で幅広になっている。木棺の東側の小口上には55cm大の凝灰質砂岩が置かれ、標石とも考えられる。また、西側の小口と南側側板の外側には20cm大の円礫を置き、棺の支えとしている。これから、幅広で標石と推定される石材を置く東側を頭位とする木棺墓と考えられる。頭位の方向は、 $N35^{\circ}E$ を計測する。棺底から土師器片と木質片が出土した以外は、木棺内及び墓坑内からの出土遺物はない。

- 土坑1 調査区東部で検出した東西1.4m、南北1.3mの平面が隅丸方形の土坑である。深さは5cmで、断面形は皿状をしている。出土遺物はない。
- 土坑2 掘立柱建物址によって切られる不定形の土坑である。土坑の規模は長径3.4m、短径2.7m、深さ約20cmである。断面形は皿状をしており、埋土内には炭が比較的多量に含まれていたが、遺物は検出されなかった。
- 土坑3 調査区東部の南辺で検出した隅丸方形の土坑である。東西3.5m、南北3.0m以上、深さ1.0mで、南側は削平をうけている。断面形は逆台形状で、埋土内からは、青磁碗口縁部片が出土している。
- 土坑4 土坑3によって東部を削平された楕円形の土坑である。推定長径3.0m前後、深さ60cmである。土坑底面は平坦な断面皿状である。出土遺物は検出されなかった。



fig. 249 掘立柱建物址平面図

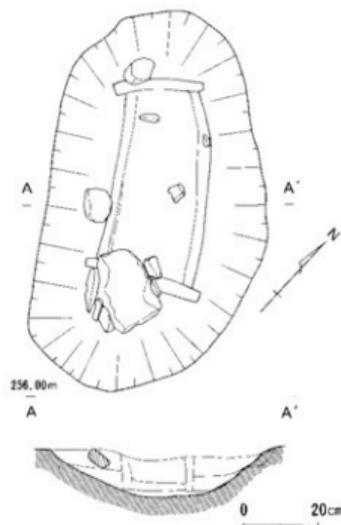


fig. 250 木棺墓址平面・断面図

土坑5 土坑4の西に接して掘られた方形の小土坑である。一辺60cm、深さ20cmで、土坑内には、20cm大から拳大の河原石が埋められている。出土遺物はなかった。

土坑6 土坑5に西側を切られる楕円形の土坑である。長径1.3m、短径1.2m、深さ13cmで、土坑内には、40cm大の河原石とその周辺に角礫が埋められている。出土遺物は石材の間から丹波焼の播鉢片が出土した。

柱穴群 掘立柱建物址を西限にして調査区の東部に多数の柱穴を検出したが、先に述べた掘立柱建物址以外に建物としてまとまるものはない。しかし、柱穴の一部には、一辺40cm前後の方形掘形に明確な柱痕と柱の抜き跡のあるものがある。また、柱を抜き取った跡に柱穴内に石材を据え、補修している柱穴もみられる。従って、今回検出した柱穴群は近世以後の開墾などにより削平をうけていると推定され、当該地が相当の期間宅地として利用されたことを窺わせる。

3. まとめ

今回検出した掘立柱建物址の時期は、柱掘形内から時期の明確な遺物の出土がないため、判明しないが、近接して掘られた土坑6出土の播鉢片が16世紀前半を遡らない時期に比定される。その土坑6および掘立柱建物址南部の柱穴が掘られる整地層出土の播鉢片が15世紀後半を降らない時期に比定される。以上の点から掘立柱建物址の営まれた時期を16世紀前半と考えられよう。一方、木棺墓の時期は、調査区南西部の整地層内から出土した五輪塔石材が木棺墓に付属するものとすれば、掘立柱建物址に伴う宅地造成以前に営まれたものと考えられる。

以上、屏風遺跡における今回の調査では、中世～近世初頭にかけての墓址および集落址を検出した。当遺跡が文献上に現れる奥蔵寺創建・秀吉の三木攻めに相前後する時期の遺跡として重要であり、今後の調査に残す課題は大きいものと考えられる。



fig. 251
調査区全景
(東から)

24. 附物遺跡

1. はじめに

附物遺跡は、武庫川の支流、八多川上流に形成された河岸段丘上に位置する。この上流域は、狭長な平野部が続くが、淡河、三木へ至る主要な街道の一つである。周辺の丘陵には経塚や多くの石造物群が存在することが知られ、中・近世の仏教思想を背景とした社会的動向を窺い知ることができ資料はあるが、生活の場である集落址の存在は、今回の調査が実施されるまで明らかではなかった。

一方、北方の中流域にある上小名田遺跡・下小名田遺跡・吉尾遺跡等は中世の集落遺跡として知られている。これらの遺跡は特に平安時代後期～鎌倉時代にかけて集落が拡大しており、集落形成の過程が最近の調査成果によって明らかになりつつある。

今回の調査は、市立八多小学校・八多中学校管理棟新設事業に伴うものである。先述のように、同地の埋蔵文化財の状況については、不明な点が多く、管理棟建設に先立ち平成元年8月に試掘調査を実施した。その結果、地表下約0.5mに厚さ0.1mの中世の遺物包含層が確認され、地山である黄灰色土上面に遺構が存在することが明らかとなった。よって、建物部分建設予定地の全面の調査を実施した。



fig. 252 調査地位置図 S=1:5000

2. 調査の概要 調査区の基本層序は、第1層：当学校の造成に伴う盛土及び攪乱、第2層：耕作土、第3層：床土、第4層：旧耕作土（中・近世の遺物を含む）

基本層序

第5層：灰褐色土（中世遺物包含層）、第6層：褐色礫混じり土（中世遺物包含層）、第7層：黄灰色土あるいは、黄灰色礫層（地山層）となる。

遺構は、第7層上面でSB01が、下層の地山面でSB02が検出されている。第7層は調査区東端でわずかに検出された。同地点はやや窪地となっており、SB01築造の際の整地土の可能性もある。

遺構は、調査区の東端と西端で集中して検出されている。これは調査区が段丘の北西端に位置しているためと思われる。調査区の東端では、中世の掘立柱建物址が、西端では、近世の土坑群が検出されている。

SB01

梁行2間（3.9m）、桁行3間（5.9m）の南北棟の掘立柱建物址である。柱穴は円形で、柱痕は直径0.16m、柱間距離は、1.85～2mと小規模な建物である。柱穴は、すべて柱の抜き取りが行われ、その際に柱穴掘形の一部を破壊するものや、抜き取り後、拳大～人頭大の角礫を入れているものがある。

この建物の方位は、N-70°-Eと大きく東へ振っている。

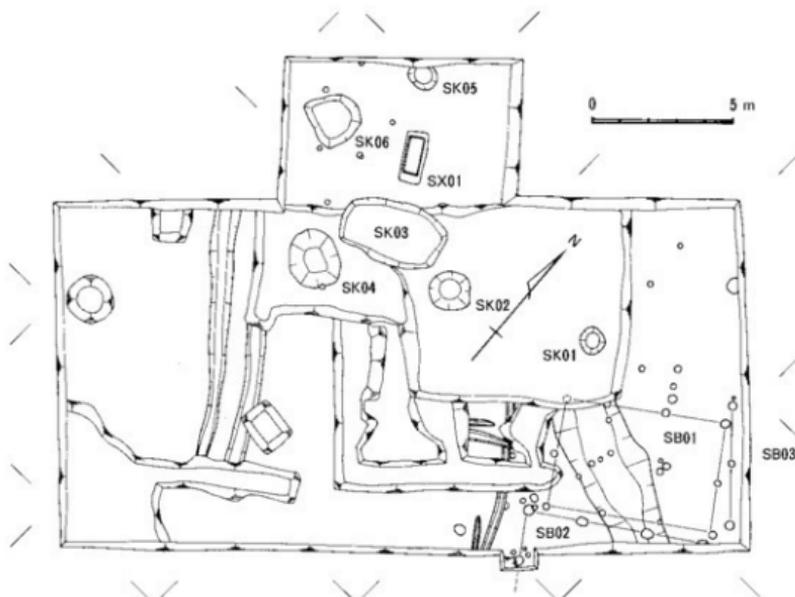


fig. 253 調査区平面図

SB02

調査区の北東隅で検出された。東西1間(1.85m)、南北3間(6.4m)分を検出したのみで、大半は調査区外東方に伸びるため、建物の規模や構造は明らかにしがたい。柱穴は、すべて柱が抜き取られ、築造当初の掘形を著しく破壊しており、柱の痕跡も窺えないものがある(S P13・14)。

また、柱抜き取り後、拳大~人頭大の角礫で抜き取り穴を埋めるものも存在する(S P10・12・14)。建物の方位は、N-77°-Eである。この建物址は、SB01がベースとする第6層(褐色礫混じり土)の下層より検出されたもので、SB01よりも先行するものである。

SB03

調査区の北東隅で東西の並ぶ柱穴列2間分(4m)を検出した。柱穴列が北方あるいは、東方の伸びるかは不明で建物か、柵列か断定しがたい。ただ、いずれの柱穴もしっかりしており、掘形底のレベルも一定に掘り込まれており、建物である可能性が高い。柱穴は、すべて柱が抜き取られ、その際に掘形全体を著しく破壊している。S P16では、柱が抜き取られた後、人頭大の礫を入れている。SB02と同様、第6層の下層より検出したものである。

この他、溝状遺構を7条検出したが、いずれも小規模である。上小名田遺跡で検出されたような、建物に伴う溝の可能性は少ない。

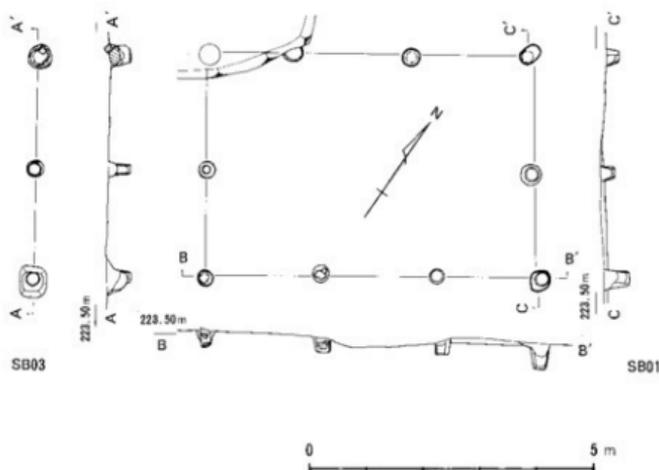


fig. 254 SB01・03平面・断面図

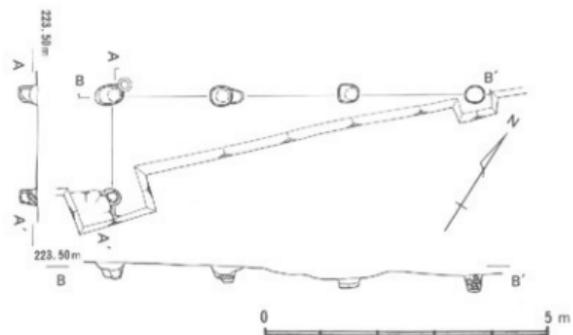


fig. 255 SB02平面・断面図



fig. 256
調査区全景
(東から)



fig. 257
SB01 - 02
(南西から)

近世土坑群

調査区の西半に集中して検出された。

SK06

東西3.6m、南北2.3m、深さ0.4mの長方形の土坑である。土坑底は水平に、側壁面は垂直に掘り込んでいる。出土遺物に寛永通宝1枚がある。

SK01～05

SK01以外は、土坑底に拳大～人頭大の角礫が存在している。土坑は、直径1～1.3mの円形のもの（SK02・03）と、1.8m前後×2m前後の楕円形のもの（SK04・05）がある。土坑は、いずれも楕鉢状に掘込まれ、土坑底に人頭大の角礫を、その上層に拳大の角礫を入れているが、規則的に積んだものではなく、乱雑に入れ込まれた状態である。ただ、SK04においては、礫の周囲に木杭を打ち込んでいた痕跡があり、杭で礫を固定し護岸の役目を果たしていた可能性がある。土坑底には、シルト層の堆積が見られ、陶磁器片と共に、植物遺体や、甲虫の羽などがわずかに出土している。

SK01

長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.18mの長方形の土坑内に、長さ1.5m、幅0.6mの長方形の木棺状の痕跡を確認したが、出土遺物がなく性格・時期共に不明である。

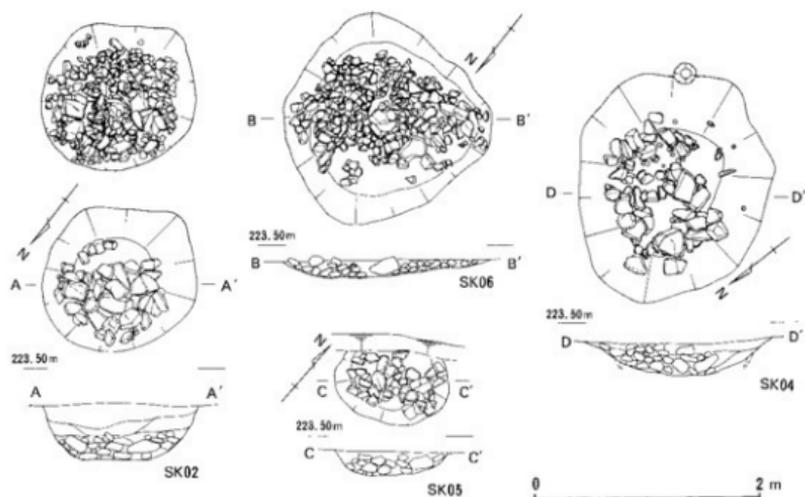


fig. 258 近世土坑平面・断面図

fig. 259
近世土坑群全
景（北東から）



fig. 260
SX01完掘状況
（北東から）



fig. 261
SK02裸出土状
況（南東から）



4. まとめ

今回の調査では、中世と近世の遺構をわずかながら検出することができた。先述のように、調査区は、河岸段丘の北西端に位置しているものと思われる、居住域の中心は、もう少し東側にあると思われる。また、調査区内では、最も低い谷側の西端に、水溜かと思われる近世土坑群が存在することも理解できる。

検出された掘立柱建物址は、柱穴内出土遺物からおおむね13世紀後半～14世紀代のものかと思われる。この他に23基の柱穴を確認することができた。調査区内では建物として完結しなかったが、この段丘上に多数の建物址が存在する可能性を窺い知ることができた。



fig. 262
調査地通景



fig. 263
調査前状況

現在までの調査成果によれば、当遺跡は北方の中流域に位置する上小名田遺跡や下小名田遺跡よりも後出のものと思われ、集落の拡大、拡散といった問題を提起することができた。ただ、調査区は居住域の中心を外れているものと思われ、集落の形成がいつまで遡れるかは、今後の調査の進展を待たなければならない。いずれにしても、この地に集落址の検出ができたことは、大きな成果といえよう。

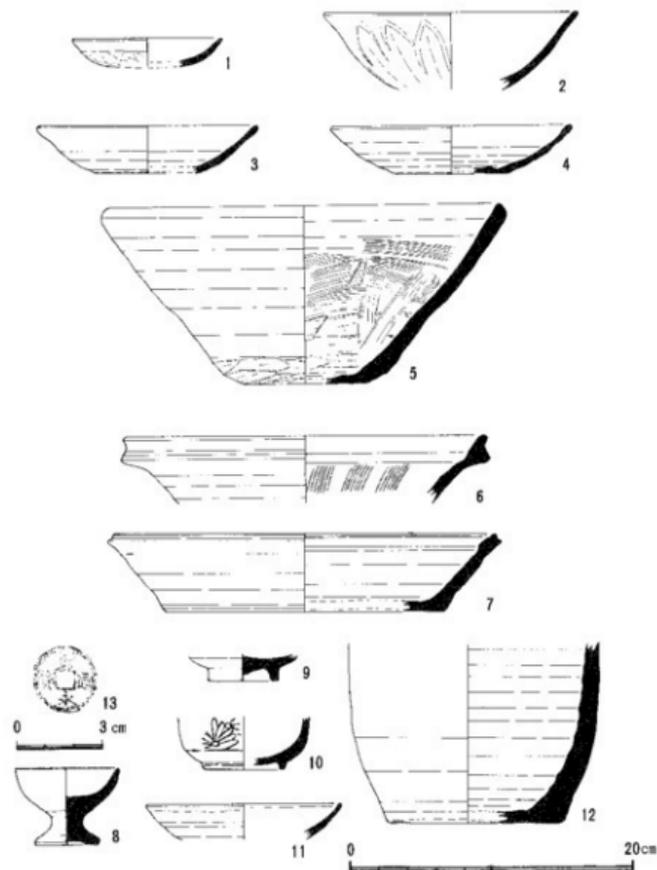


fig. 264 附物遺跡出土遺物 1 : 中世遺物包含層 2 : SP19 3・4 : SB01 5 : SB02
6・9 : SK02 8 : SK04 7・12・13 : SK03 10・11 : SK05

25. 宅原遺跡（豊浦地区）

1. はじめに 宅原遺跡は、武庫川の支流長尾川中流域に存在し、東西1.8km、南北1.0kmの広がりのある遺跡である。昭和57年以来、長尾地区土地改良事業・都市計画道路北神中央線建設事業などに伴って、10数回の調査が実施されてきた。これらの調査で、長尾川右岸の内垣地区では、弥生時代後期の住居址・自然河道や縄文土器が検出されている。宮ノ元地区では、集落に付属する大溝の中から奈良時代前期の土器と共に「木製面」が出土している。また岡下地区の大溝からは「評」と墨書のある坏蓋が出土している。岡下・宮ノ元・上豊浦地区の各地区では古墳時代後期の住居址、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物址・木棺墓も集中して検出されている。長尾川左岸の有井地区では、弥生時代後期～古墳時代前期の住居址が検出されている。

これらの調査結果から、長尾川によって形成された沖積地上に存在している内垣・有井地区では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が形成され、長尾川右岸段丘にあたる岡下・宮ノ元・豊浦地区の各地区では古墳時代後期・奈良時代前期・鎌倉時代～室町時代の集落が形成されたものと考えられる。特に奈良時代前期の集落は、「木製面」・「墨書土器」の出土からきわめて官衙的色彩の濃厚な遺跡といえる。

今回、調査を実施した西豊浦地区は、長尾川の一支流長野川右岸北東に広がる河岸段丘の北端部にあたる。



fig. 265 調査地位位置図 S=1:5000

2. 調査の概要 調査は、段丘上の南北圃場用排水路をAトレンチ、段丘崖縁辺の東西圃場用排水路をBトレンチ、段丘崖下の沖積地の南北圃場用排水路をCトレンチ、調査地北辺の東西圃場用排水路をEトレンチ、段丘崖下の切り土工事実施水田をD・Fトレンチとして実施した。

Aトレンチ

中央を斜めに横切る農道を境にA南トレンチ、A北トレンチとした。A南トレンチは、トレンチ南端から約15mより北で室町時代前後の旧耕作面が検出された。旧耕作土中から陶器鉢底部、須恵器碗、天目茶碗の破片が出土した。この旧耕作土面は、南から北に緩やかに傾斜する段丘斜面を埋め立ててつくられ、その造成土中からは古墳時代・奈良時代の須恵器片が出土した。造成土を除去した地山面では、トレンチ北端でビット・落ち込みを検出したが、出土遺物はなく、性格は不明である。

A北トレンチは、表土直下で黄褐色粘質土の地山となる。トレンチ北端は現代の開墾により削平され、段上に落ち、段丘崖縁辺に続く。南端では急な落ち込みがみられ、A南トレンチの段丘斜面に続いている。地山面で円形土坑・方形土坑各1ヵ所、ビット数ヵ所を検出した。



fig. 266 Aトレンチ北部全景（北から）



fig. 267 トレンチ配置図

土坑 1 SK02と同様に、トレンチ中央西辺で検出した円形土坑である。土坑の西部は、現代の農道の切り通しのため削られている。長径1.6m、深さ0.65mで、板状の木材が底面に貼りついて検出された。埋まった土の中から丹波焼の鉢・陶磁器皿が出土した。

土坑 2 トレンチ中央西辺で検出した方形土坑である。土坑の西北部は、現代の農道の切り通しのため削られている。一辺2.8m、深さ0.25mで、底は平坦に造っている。埋土の中から陶磁器碗、瓦が出土し、拳大の河原石と共に投棄されたと考えられる。

B トレンチ 段丘崖上部縁辺に設定した東西トレンチである。トレンチ北辺は比高差約2m前後の崖となり、後世に削られている。トレンチの西部では、一部で中世の耕作土と考えられる土層から、古墳時代～鎌倉時代の須恵器片の出土があった。この鎌倉時代以降の再堆積土を除去すると北方向に傾斜する岩盤層の地山を検出した。地山を切り込んで溝状遺構2条を検出したが、鎌倉時代以降の耕作痕と考えられる。

トレンチの東部では、古墳時代の堅穴住居址1棟、溝1条、時期不明の掘立柱建物址1棟を検出した。

堅穴住居址 トレンチの東部中央で検出した方形の堅穴住居址である。一辺4.6mのはほぼ正方形の堅穴を掘って造られている。住居址は、後世の耕作などによって削平され、深いところで6cm前後の壁体が残りに、南西部のコーナーで周壁溝が残っているだけであった。堅穴住居址の南西辺の南よりを切って竈の痕跡と考えられる土坑を検出した。竈状の土坑の規模は、長さ1.4m、

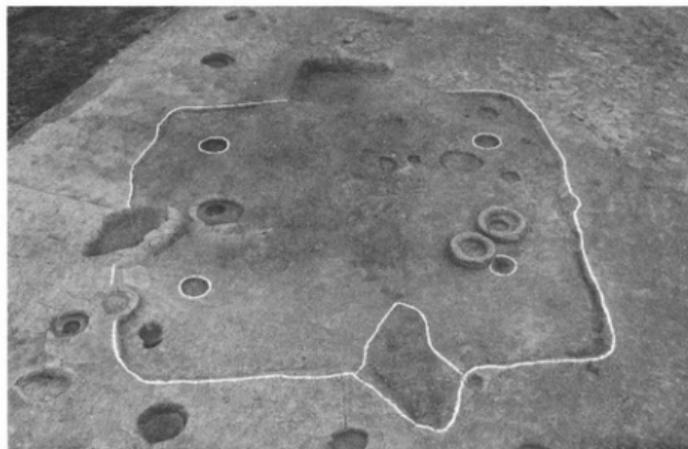


fig. 268
B トレンチ
堅穴住居址
(西から)

幅0.8mで、深さは、最も深い部分で15cmであった。断面形は船底状である。竪穴住居址の床面は、既に削平されているため、掘形の底面で支柱4ヵ所を検出した。支柱穴間の距離は、東西3.2m、南北2.4mであった。遺物は、床土内と竈状の土坑内から須恵器と土師器の細片が出土した。

竪立柱建物址

竪穴住居址を掘り込んでつくられた東西棟建物である。梁行2間、桁行1間以上の規模と推定されるが、建物の東側は削平されているため、柱掘形の連続は検出できなかった。梁行の柱間距離は、北側で1.4m、南側で1.32mである。桁行の柱間距離は2.7mである。出土遺物は、柱掘形内から古墳時代坏蓋片が出土している。

溝

トレンチ東部南辺で検出した東西溝である。東・南側は調査区外に継続するものと推定される。断面の形状がU字状で、幅1.4m、深さは、最も深い部分で22cmの溝である。出土遺物は、埋土の中から須恵器提瓶のみが出土している。

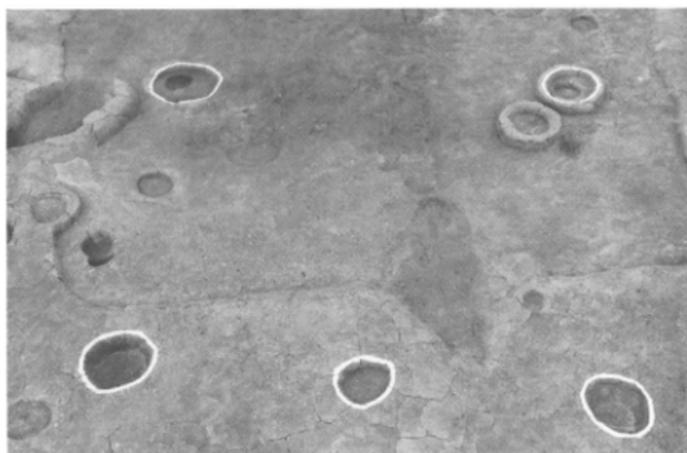


fig. 269
Bトレンチ
竪立柱建物址
(西から)

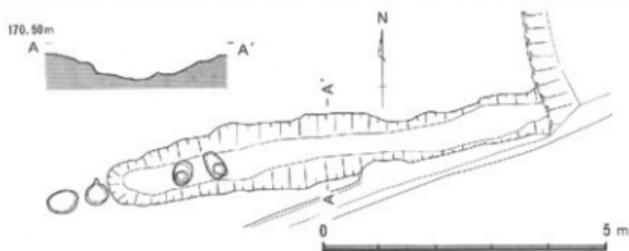


fig. 270 Bトレンチ
溝平面・断面図

Cトレンチ 段丘崖下部に設定した南北トレンチである。床土の下で旧耕作土、その下層に灰色粘質土の遺物包含層を検出したが、さらに下層の黄灰色粘質土の上面では、ピット2ヵ所、土坑1ヵ所を検出した。土坑は、トレンチの南西部で検出した長径60cm、深さ6cmの不定形土坑である。土坑内からは須恵器捏鉢底部が出土した。なお、黄灰色粘質土内から飛鳥時代と考えられる須恵器壺の底部が出土したため、黄灰色粘質土を除去し、黄褐色粘質土上面を精査したが、遺構は検出されなかった。

Dトレンチ 段丘崖下部に設定したトレンチである。調査区南西部の一段高い現況水田では、現地表下60cmで旧耕作土と推定される土層の堆積を確認した。旧耕作土内からは、陶器片、須恵器碗、捏鉢、土師器片が出土している。この旧耕作土面を造成するに先立って、ほぼ調査区全域に広がる暗灰色粘質土の遺物包含層の一部を削平して平坦な造成面をつくっていると考えられる。旧耕作面造成土の下層の遺物包含層を除去した結果、黄灰色粘質土の遺構面を検出した。黄灰色粘質土の上面では、掘立柱建物2棟、溝1条、河道状落ち込み1ヵ所を検出した。この遺構面となる黄灰色粘質土内からはCトレンチと同様に須恵器の出土がみられ、掘立柱建物などが営まれるに先立って、相当規模の盛土整地が行われたことを裏付けている。さらに、整地層を除去した結果、段丘崖下の縁に沿って、東西に流れる自然河道を検出した。

掘立柱建物址1 トレンチ中央やや北よりで検出した梁行2間（4.5m）、桁行2間（5.5m）の総柱の東西棟建物である。柱間距離は梁行で2.25m等間、桁行で



fig. 271
Dトレンチ全景
（北東より）

2.75m等間である。建物の方向は、桁行でN90°Eである。柱掘形は、中央の柱掘形を除いて40cm前後の平均した深さで掘られ、中央の柱掘形のみが検出面下56cmと際立って深く掘られている。大部分の柱掘形で径18cm前後の柱痕跡が観察でき、抜き取り痕跡も明瞭である。また、北側桁の東の隅柱で柱掘形の重複がみられ、さらに北側桁の西の隅柱では東に近接して同規模の比較的浅い柱掘形が掘り替えられ、部分的な柱の建て替えが行われている。この建て替えは、北側桁の隅柱に限られ、他の柱をそのままにして柱の取り替え補強が行われたと推定される。出土遺物は東側妻柱の柱掘形内から須恵器坑2個体分の破片が出土した。

掘立柱建物址 2

掘立柱建物址1の東側で検出した梁行2間(4.6m)、桁行2間(5.5m)の総柱の南北棟建物である。東側で1.5m、西側で1.4m張り出した庇がでている。柱間距離は、梁行で2.3m等間、桁行は北側で2.55m、北側で2.5mである。建物の方は、桁行でN89°Eを計測する。柱掘形の深さは、両側の桁柱が25cm前後、両側の妻柱と中央の柱掘形で40~45cm、庇柱の掘形で15cm前後であった。一部の柱掘形で径20cm前後の柱痕跡が観察でき、抜き取り痕は大部分の柱掘形で明瞭である。出土遺物は北側妻柱の柱掘形底から須恵器皿の完形品が出土し、建物南東隅の庇柱掘形内から須恵器坑1個体分の破片が出土した。

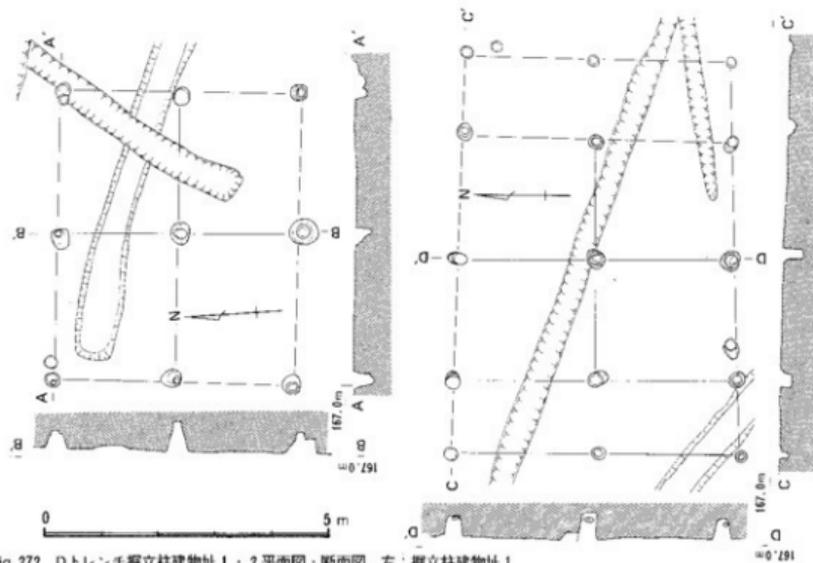


fig. 272 Dトレンチ掘立柱建物址1・2平面図・断面図

左: 掘立柱建物址1
右: 掘立柱建物址2

- 溝 掘立柱建物址1の北西隅から南東に伸びる幅70cm前後、深さ10cmの断面U字形の溝である。溝の埋土は灰色細砂で、土師器細片が出土している。溝の南東端は、削平されて明確ではないが、段丘崖裾にとりついて湧き水を受けていたとも考えられる。
- 自然河道1 トレンチ中央の北辺で検出した東西方向の東に流れる河道である。幅は最大で2.5m、深さ7cmである。断面形は皿状をしている。埋土内から須恵器細片がわずかながら出土している。
- 自然河道2 掘立柱建物址などを検出した遺構面の下層で検出した河道である。段丘崖裾部を巡るように東に流れ、トレンチ東部でやや幅を広げて東北東に落ち込んでいる。河道の幅は、西部で0.8~1.4m、東部で2.0m、深さは、深いところで50cmである。出土遺物は、飛鳥時代の須恵器坏蓋・碗、古墳時代の須恵器坏蓋・高坏、弥生土器片が出土している。
- 弥生時代 断ち割り調査をトレンチ東辺において自然河道2を検出した遺構面下60cmまで実施した結果、現地表面から90cm下で弥生土器を含む灰黄褐色粘質土を検出した。さらに、その下層で炭を多量に含む黒灰色土を埋土とする溝状の落ち込みを検出した。
- なお、以上で述べた弥生時代の遺構については、検出した深さが工事掘削影響範囲外であるため、調査は実施しなかった。
- E トレンチ 調査区域の北辺に設定した東西トレンチである。現耕作土・床土直下に近世旧耕作土がみられ、その下面で溝状遺構2条、ピット6ヵ所を検出した。近世の耕作痕の一部と考えられる。この近世の耕作面である淡灰色粘

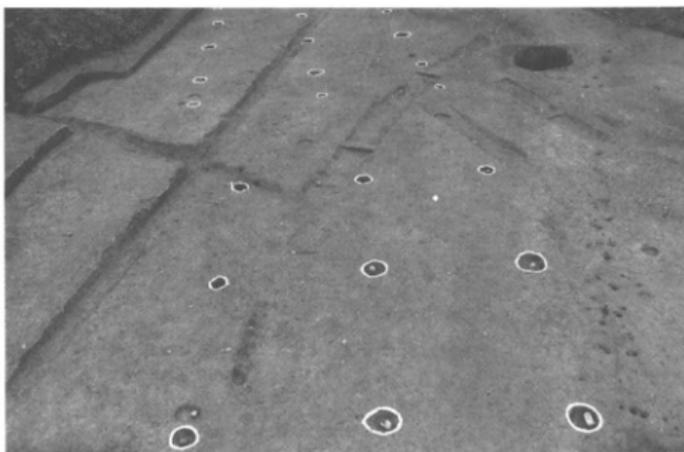


fig. 273
D トレンチ
掘立柱建物址群
(西より)

質土を除去すると、中世土器を含む暗灰色粘性砂質土の遺物包含層がみられる。遺物包含層の下層の黄灰色粘質土の上面で、掘立柱建物址1棟、溝4条を検出した。さらに、この遺構面である黄灰色粘質土層から弥生土器片が出土したことから、下層を調査した結果、黄褐色粘質土上面で土坑1ヵ所、ビット多数を検出した。

掘立柱建物址

トレンチ西部で検出した梁行2間(5.0m)、桁行(8.8m)の規模の東西棟建物である。東側・西側の両面に庇が付き、東側の庇の出は2.0m、西側の庇の出は2.1mである。身舎は梁行2間、桁行2間で構成され、柱間距離は、梁行で2.5m等間、桁行で2.2m等間である。建物の方向は、桁行でN90°Eを計測する。北西部隅の庇柱では、柱の抜き取り痕跡が明瞭であり、抜き取り後さらに10cm前後の埋土を掘形に充填して礎石を置き、柱の一部で立て替えが行われている。

溝 1

掘立柱建物址の北・西側で建物に沿って設けられた幅20~50cm、深さ20cm前後の断面U字形の溝である。埋土の灰色砂質土内から、須恵器塊・土師器瓦片が出土した。

溝 2

掘立柱建物址のほぼ中央から北西側隅柱方向へ伸びる幅35cm前後、深さは南東部で5cm、北西で25cmの断面U字形の溝である。この溝は北西方向に行くに従って深くなる。北西部では、掘立柱建物址の北西側隅柱の掘形と溝1によって切られている。出土遺物は土師器細片が出土した。

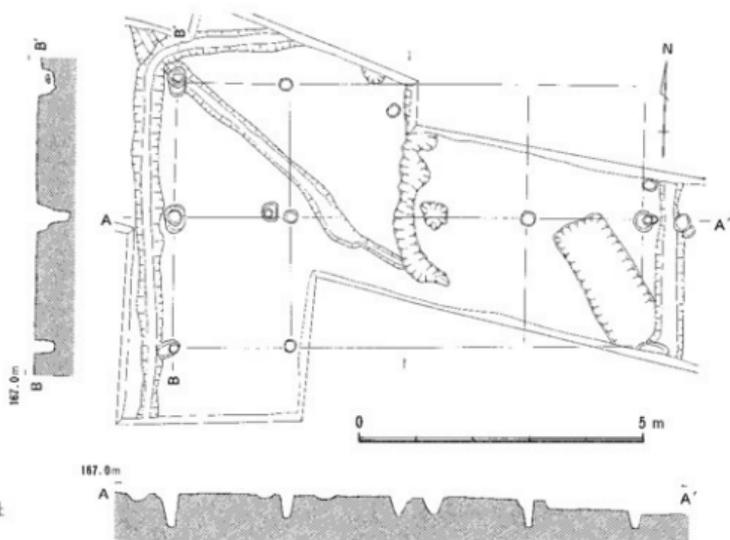


fig. 274
Eトレンチ
掘立柱建物址

溝 3 溝1と同様に掘立柱建物址の東側で建物に沿って設けられた幅60cm、深さ20cm前後の断面U字形の溝である。埋土は、溝1と同様の灰色砂質土である。出土遺物はない。

溝 4 トレンチ東部で検出した、ほぼ真南北方向の断面U字形で、幅50cm、深さ6cm前後の溝である。埋土は、溝1と同様の灰色砂質土である。出土遺物はない。

土 坑 トレンチ東部の中世整地層の下で検出した、平面形が南北に長い楕円形をした土坑である。断面形は漏斗状をしている。土坑の規模は、長径1.56m、短径1.10m、深さ43cmである。土坑の埋土は、炭が多く含まれ、最上層の暗灰色粘質土からは弥生土器細片が出土した。

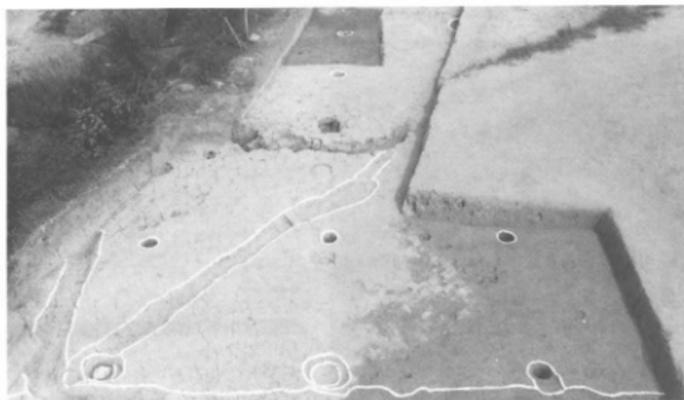


fig. 275
Eトレンチ
掘立柱建物址
(西から)

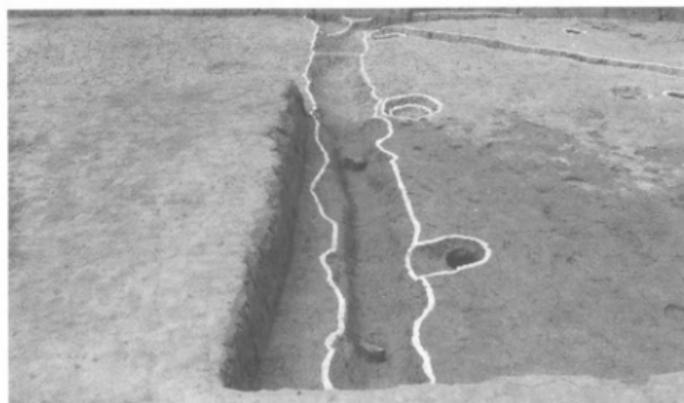


fig. 276
Eトレンチ
溝1検出状況
(南から)